
それなりに楽しい脇役としての人生

yuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それなりに楽しい脇役としての人生

【Nコード】

N1159R

【作者名】

yuki

【あらすじ】

幻覚や妄想の類だと思っていた神様に適当なことを言ったため精神をいくらか立派にされ生まれ変わった主人公。転生した先には魔法が存在していたのでそれを使い、自分を元に戻そうとそれなりに奮闘する、そんな地味な話です。

一話 始まり（前書き）

かなりつたない文章ですし、オリ主などといった人によっては不快に感じる要素も多々含んでいます。

それでも自分なりに頑張っていくつもりですので暖かい目で見て頂ければ幸いです。

一話 始まり

気づくと俺はあたり一面真っ白な空間にいた。

(どこだよ……ここ。なんでこんな所に……)

なぜか痛む頭を抱えながら最初に思ったことは、そんなことだった。

「あなたは死んでしまったのですよ」

どこからともなくそんな声が聞こえる。威厳にあふれているような、それでいてどことなく優しさを感じるような不思議な声だった。

「憶えていませんか？車にひかれそうだった子供を救おうとして、道路に飛び出したことを。あなたはそのひかれそうだった子供を突き飛ばし、救った。そのかわり車にはじきとばされ、頭を強く打って死亡。なかなかできることはありません。罪には罰が必要な様に善行には恩賞がなくはありません。命を救ったものには新しい命をと思ひまして、あなたに新しい生を歩ませてさしあげようと思ひます。前例のないことなんですよ？喜んでください」

そういえばそんな似合わないことをした記憶がある。頭が痛む理由がわかり多少すっきりしたのと同時に新しい頭痛の種が痛みをひどくした。こんな光景が見え、こんな声が聞こえるということは、とどのつまり狂ってしまった、ということなのだろう。

(かなり強くぶつけた覚えがあるしな……、これは昏睡状態で見ている夢ってことか？いや、結構暑い日だったし熱で頭をやられたって可能性もあるな。それにしたってこれはないだろうよ。神様も

どきから転生のご褒美とは……)

自分の頭が案外メルヘンチックな作りだったことに微妙にへこんでいると、声は話を続け始めた。俺の空想上の存在のくせに俺の様子を全く気にしていないあたり、不条理さを感じる。

「私の話きちんと聞いていますか？続けますよ？ゴホン……、えー新しい人生では楽しく幸せに過ごしていただきたいですからね。何か欲しい物がありますか？優れた容姿でも突出した才能でも……何か有れば言ってください。その方がおもしろそうですしね」

「……何でもいいんですか？」

「ええ、かまいませんよ。どうでもいいですけどやっとしゃべりましたね」

この状況での願い事なんて一つしかない。ちょうど神頼みだろうとなんだらうとしたかった所だ。俺の想像上のものとはいえいくらかはお利益があるかもしれぬ。言うだけ言うておこう。

「俺を正気に戻してください」

「は？……別にあなたの精神にこれとおかしなところはありますか」

「あ、いや、じゃあ強い心とか強靱な精神力をお願いします。健全な精神をもとにした上で」

「はあ、欲がありませんね。まあいいですけど」

そんな声が聞こえるのと共に今までまぶしいくらいに白一色だった視界が黒ずんでゆくのと、体の力が抜けていくのを感じた。これで目が覚めたら病院のベッドの上だろうと思うと共に、狂った結果生まれたものに、正気に戻してくれるよう頼むというのもおかしいものだと思いつき苦笑し、目を閉じた。

ただ……

「ではお幸せに。第二の人生はなかなか刺激的だと思いますよ」

そんな上から目線の台詞にイラツとしたことはよく憶えている。

「アシル様。そろそろ休憩を取った方がよろしいかと思いますが。根を詰めすぎると体に毒ですよ」

「そうだね、セバステイアン何か飲み物と汗をふくものを頼むよ」

俺がそう言っていると執事のセバステイアン（まさか本当にそんなどんぴしりな名前の執事がいると思わなかった）は事前に用意していたであろうタオルを差し出した。飲み物も俺の部屋に紅茶とビスケットが用意されているということなので、俺は部屋へと向かった。

あの馬鹿みたいな夢、今の状況を考えると現実だったのだろうか……、を見てからもう8年になる。あのあと気がつく俺はここセシル家の一人息子アシル・ド・セシルとして生まれてから3年もの月日がたっていた。気がついた当初はさすがに驚いた。なにせ金髪の夫婦が自分の親だということらしいうえ、その夫婦は子爵位を持つ貴族であったからだ。そのうえこの世界には魔法というものがあった。

杖を持ち、呪文を唱えれば怪我が治ったり、風が吹いたり……。前

世で物理だの化学だのをまじめに学んでいたのが馬鹿馬鹿しくなるようなことをできるらしい。というか育ててくださっている夫婦が「パパとママはすごいんだぞー」的なことを言いながら実際に見せてくれた。

そういつた自分の立場やおおよその世界観などをつかんでからは考えた。まずはセル夫妻に恩を返さなくてはいけない。なにせ俺とセル夫妻は肉体的には確かに血は繋がっているのだろうが、精神的には赤の他人となんら変わらない。なにせついこの間まで日本人の両親と過ごしていたのに、いきなり金髪の人を両親と思うことなんてできない。俺にとっては赤の他人を騙して育ててもらっている様なものだ。かつこうじゃあるまいしさすがにそれは寝覚めが悪い。ならある程度は恩を返すのが筋というものだろう。

と、言ってもバイトの経験はあるとはいえ、この間まで親のすねをかじって生きていた、ただの大学生なわけで恩を返す方法なんてそういくつも思い浮かばない。例を挙げれば「大金を稼ぐ」「名誉や地位を手に入れる」「子爵位以上の貴族のご令嬢と結ばれる」といった所だろうか。

……どうすればいいってんだ……。と、いう訳で、明らかに無理っぽいそれらの目標は、後何年かしたらトリストイン魔法学院とかいう名前の学校に入る予定らしいのでその時まで置いて、今はもう一つの目標に向けて努力している最中だったりする。

「くそ、こんなことならもつと化学と心理学について学んでおくんだった。何々……えー……水の精霊の涙……？情緒不安定な精霊探せってか。こっちは……マンティコアの牙？なにこれ？ダンジョンでマンティコア倒せば落とすの？」

あのととき神様もどきに頼んだプレゼント、強靱な精神とやらは実に取りがたいものだった。魔法の練習を始めてみてわかったのだが精神力、魔法を発動させるのに使うエネルギーのような物が俺には

人の二、三倍あるらしい。その上昔は苦手だった怪談話の類がたいして怖く感じない様になった。……それが実に不愉快でたまらない。あまり気に入ってたなかったとはいえ俺にとつて俺の性格、精神は自分が自分である証の様な物である。それを苗木支えるみたいに横から無理矢理支えられて立派にされるといふのは良い気分はしない。つまり俺のもう一つの目標というのはこの支えをとつぱらう、つまりこの俺の精神を元に戻すことだったりする。そのために今もこうやって、家の図書室でゲームの攻略本でしか見たことのない様な材料だらけの水の秘薬についての本を調べている。両親ともに治療などにむいている水の魔法使い（ここハルケギニアではメイジと呼ぶみたいだが）だったため俺自身も水のメイジだったこと、そういった魔法薬などについての書物が多いことはまあ、幸運だったが。

しかし、そればかりやっていけるといふ訳にもいかない。他にも魔法の練習もしなければならないし、本来生まれてくるべきではない俺に対して世話をやいてくれ、気を遣ってくれる家族や使用人の方々に妙に思われなければならないにも二十歳超えた精神で八歳の少年の様な振る舞いをしなきゃならない。もう数年もしたら領地経営についても勉強しなければならぬだろうし、さらに数年すればドロドロとした貴族同士のつきあいもしなきゃならない。できれば体の弱い母を治す薬も作りたいし、他にも……アレやコレや……。

「……………やってらんねえ……………」

八歳にして人生に割と疲れている少年、それが俺アシル・ド・セシルだった。

私はカジミール・ド・セシル。しがたない子爵である。妻セリアと共にここセシル領を治めている。長らく妻と二人で支え合い生きて

きたがついに息子が生まれた。妻は体が悪く、私自身貴族としては珍しく妻以外の女性を愛することはしなかったので長らく子供を授かることができなく、養子や体の丈夫な妾を迎えるしかないのだから、という話が持ち上がったので実にうれしかったことを憶えている。この年になると月日が経つのも早く、この間まで赤子だった息子も八歳になった。

「あ、父上。おはようございます。今日もお時間がありましたら一緒本を読んで欲しいのですが……」

「アシルか……。おはよう。今日も元気そうだなによりだ。本なら昼食のあとなら構わないよ。アシルはイーヴアルデイの勇者の話が好きみたいだからね、今日の本はそれにしよう。さあ、それよりも朝食を頂こう。たくさん食べないと大きくなれないからね」

朝起きて朝食をとるために食堂へ向かう途中で一人息子であるアシルに会ったので、朝の挨拶をかわし、頭をなでて共に食堂へ向かった。

「本当ですか？ やったあ！ 父上と一緒に本を読むのは楽しいから好きなんですよ。うれしいな。あ、後今日も図書室を使いたいのですが、いいですか？ 私も水のメイジとして、母上のために何かしたいのです」

息子は実に優秀だといつてかまわないと思う。三歳くらいまでは使用人の間でも、元気が無さすぎる赤子だと言われていて、心配をしていたものだったが、ある日いきなりそれが嘘だったかの様な元気に、優秀になった。それこそ人が変わったかの様に、人格的にも、能力的にも。自主的に魔法やマナー、勉強を学び、親だけではなく使用人に対しても礼儀を忘れない。それでいて子供らしく明るくよ

く笑い、私達に気を遣いながらもかわいらしいわがママを言うこともある。実によくできた息子だと思う。だが何故だろう、私はいつからかこの子を心の底から愛することができなくなっていた。

気づいたのはいつのことだっただろうか。あの子が私や妻、使用人達と接する時、その目に媚びが、哀れみが、謝罪の気持ちが入り込められていることに。あの子は、アシルは八歳にして何かのために私達に媚び、私達の何かを哀れみ、何かについて私達に謝罪の気持ちを持ち続けている。八歳の子供と言うのはああいったものなのだろうか？愛せない私が悪いのだろうか？それともあの子が異常なのだろうか？難しい年頃というやつなのかもしれないので親としての経験のない私にはどうもよくわからない。まあ、数年後にはトリステイン魔法学院に入れるつもりであるしその時には治っているかもしれないし、そうでなくとも学院で年の近い人と共に過ごすことで変わっていくだろうと、いつかはもう一度私は我が子を心の底から愛することができるだろう。

そう考えた私はドアを開け、息子と共に食堂に入ってしまった。

二話 使い魔召還の儀式

あれから数年が経った。今俺はトリステイン魔法学院にいる。剣士がいて、魔法使いがいて、森の中にはモンスターがいる……そんなファンタジーな世界観なので学校はどんなもんなのだろうと思っていたが、それほど奇妙な物じゃなかった。

ただ魔法を教える授業がある、洗濯やら何ならをしてくれる使用人がいる、という所を除けばどこにでもある学校とそう変わりはない。……まあ、十数年貴族やつてるとはいえ元が小市民の俺にとっては気疲れするくらい、そこかしこにある調度品やら内装やらが高級品だらけつてのはすごいが。

まあ、元の人生で経験したようなお気楽な感じの学生生活ではなかったのは確かだ。学校は社会の縮図だと何かで聞いたが、ここもご多分に漏れず社交界の縮図だった。爵位によって周りの人の反応は露骨に違うし、有名な家のご子息、ご令嬢にすり寄って媚びる……なんてのもそこかしこで行われている。俺もここですっかりコネをつくつて、将来楽しよう、なんてことを考えていた。その考えは俺にしては珍しく上手くいっている。

「アシル、おはよう」

朝食を取るため食堂に行く途中、後ろから声がかげられたので振り返ってみるとそこには親しくしておくべき対象、重要度ナンバーワン、ヴァリエール公爵家三女ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールがいた。小柄な体型、大きく気品を感じる鳶色の瞳、白く美しい肌、それに桃色の髪。……桃色で。やはり世界が違つと遺伝子からして違つらしく、ルイズのような桃色の他にも水色やら赤やら緑やらといった、母親が妊娠中に絵の具でも喰つてたんじゃないかっていうようなとんでもない色をした髪の人が

けっこういる。

「おはよう、ルイズ。いやーいい朝だな。こういい天気だとあれだ、使い魔もいいのが景気よくポンつとできそうだと思うないか？」

「そうね、今日こそ魔法を成功させてみせる！そんでドラゴンとか高位の幻獣とか出して！ここから栄えあるヴァリエール家の一員として立派なメイジになるんだから！」

「キヤールルイズサンカツコイーダイター」

「……あんたはもう少し心を込め話すのを練習したほうがいいと思うわ。それより使い魔よ！あんただって使い魔の召還はするんですよ。何がでてくるんだろう、とかそういう不安とか期待とかはないの？」

「俺は水のメイジだからな。たぶんカエルとか水着の女の子とか水に関係したやつだろうな。いやー夢がふくらむな。ベッドをダブルのにしておくかな。アレヤコレヤをするためにも」

「じゃ、また後でね」

「つつこみがないと俺が春先でおかしくなったみたいに思われるからやめてくれませんか？まあ、いいや。ほんじゃ後でな」

普通ならルイズのような爵位の高い子は、派閥というかグループのようなものをつくっているんで俺ごときが親しくするのは難しいのだが、ルイズは何故か魔法が使えず、それを知っている多くの学生から馬鹿にされているので俺でも仲良くできた。正直言ってコミ

ユニケーション能力が高いほうではなかったからこれはルイズには悪いがラッキーだった……というかいくらできが悪かろうと、自分の親でも頭が上がらない家の子をバカにするのはまずいってのが他の子にはわからないんだろうか。

使用人に対してもそうだ。平民だからって理由でバカにしたり虐げたりしているのを見るとどうかしてるんじゃないかと思う。彼ら、彼女らは俺達の衣、食、住、全ての世話をしてくれている訳だ。そんな人達の恨みを買えばドラマにでてくるOLみたいにぞうきんの絞り汁とかを紅茶に入れられるかもしれない、服にうっかり針を刺しっぱなしにされるかもしれない、下手をすれば食事に一服もられるかもしれない……まあ、そんなことはまずないだろうが世話になってるんだからある程度感謝の気持ちを持つべきだろうし、平民相手でも年上にはやっぱりある程度礼儀を尽くすべきだろう。って考えを頭に置いて行動していたからか使用人のなかでは俺は結構好意的に思われているらしい。けどそのせいで周りの貴族には「あいつはゼロのルイズどころか平民にも媚びを売っている」って思われてしまったので正直言っとうれしくない。

「んなことよりも今は使い魔召還だな」

朝食をとっていったん自室に戻ってきた俺はそうつぶやいた。

ここトリステイン魔法学院では二年に進級する際に使い魔つてやつを召還して今後の方針を決めるらしい。その使い魔もカエルや鳥からドラゴンまで召還したメイジの実力や属性によって千差万別だということだから実は少しわくわくしていたりする。いったい俺の使い魔はどんなやつなんだろうか？ルイズじゃないがもしかしたらドラゴンとかでちゃうかもしれない。

時間もおしていることだし俺は部屋を出て、使い魔召還の儀式を

する外の草原へと向かった。

「できればドラゴンとかがいんだけどなあ……。大方カエルか下
手すりやナメクジってとこだろうな……。せめてファーストキスは
哺乳類が良かったんだけどなあ……」

現実的に考えたらそんなわくわくした気持ちは消え去ったが。

三話 人が召還されるとは、さすがにそれは予想外

「ぐあ！ぐああああああ！熱い！」

……なんかよくわからんことになっている。さっきまでルイズが使い魔召還の儀式、サモン・サーヴァントをやっていて、いつもの様に失敗、つまり爆発を繰り返していたはずだ。それがあまりに長く続くので途中から見ているのに飽きた俺は、召還した俺の使い魔（結局召還されたのはごくごく普通のフクロウだった）と遊んでいたところいつのまにか爆発音がやみ、周りのクラスメート達の笑い声が聞こえたのでルイズの方を見たとこ何故かそこにさっきまでいなかった男の子がいて、その上なんか苦しんでいた。

「タバ吉。何がどうなってんの。いつものように箇条書きで説明してくれ」

「召還された」

「へえ、人がか……。聞いたことないけど、さすがルイズだな。後ろ向きに前人未踏の地を進んでいく様はいつそかつこいいやな。あと使い魔交換しない？」

「だめ」

知り合いの一人であるタバサに状況を聞いてみたところあの男の子はルイズの使い魔をして召還されたらしい。サモン・サーヴァントで人が召還されたってのは聞いたことがないがまあ人だって動物だし、そういうこともあるだろう。その上、その男の子はどう見ても昔の俺と同じ、日本人に見えるが広い世界、そういうことが起こ

ることもあるだろう。

「さてと、じゃあ皆教室に戻るぞ」

ルイズが召還に成功したことで、全員使い魔召還の儀式は終わったので儀式に立ち会っていたコルベル先生がそう言うのと、まだぎゃーぎゃーなんかやってるルイズ達を放っておいて、周りの皆はフライという魔法で飛んで学院へ戻っていく。俺としてはルイズを慰めるか、魔法が成功したことをほめるかするべきなのかもしれないが召還した男の子を殴り倒して気絶させたのを見て、とりあえず今は関わらないことに決めた。

次の日の朝食の時、ルイズの機嫌や召還された彼の様子をこっそりと見てみたが、そこにはおそらく同郷の人だろう彼が床に座って悲しそうな顔で貧しい物を食べているという、なんかもう感想に困る光景が広がっていた。さすがにちょっとルイズに言いたいことがあったが、普段ならともかく今の機嫌の悪いルイズに文句を言ったら、さらに彼の待遇が悪くなるかもしれないのでおっぴらに俺が何かをしてやることはできない。せいぜいできるのは隠れて何か差し入れるくらいだろうか。

「……せめて昼飯くらいキッチンとした物が食える様にメイドさんに頼んどくか」

あれじゃ見てるこっちが気疲れするしな。

「……お、来た」

朝食の後、シュヴルーズ先生による錬金、石ころやらなにやらに杖を振るだけで別の金属に変えるという科学者に喧嘩売ってるような魔法についての授業があったのだが、そこでルイズがいつものように

爆発オチをしてしまい、原因である彼女とその使い魔の彼は壊した教室の片付けを命じられたので俺はそれが終わった二人が食堂に行くのを待ってる所である。二人で一緒に部屋の片付けをすることはいくらか仲良くなったかと思っただが、前から来る二人を見る限り何があったか知らないがどうも悪化してるようにしか見えない。

「やつほルイズ。ちょっと使い魔君借りてもいいかい？」

「……好きにしたらいいじゃない」

「悪いね。じゃ、君ちよつとこつち来てもらっていい？つてか、来い。ほれ急いで」

「ちよ、え！？あんた誰！？」

どう見てもルイズは臨界点突破寸前だったので俺は急いで使い魔の彼を厨房へと引っ張っていった。

「……と、いう訳でだ。昼食の時間になったらここに来ればそこそこ立派なモン食えるから。まあ、ただでつて訳にはいかないからちよつとした手伝いはしてもらいたいけど。その辺についてはこのメイドさんに聞いてくれ。俺よくわからんから」

「わかった。正直こつち来てからろくなモン食ってなかったからあ

りがたいよ。シエスタさん……だっけ？これからよろしく頼むよ」

「シエスタでいいですよ、サイトさん。じゃあ、ちょっと待っていてくださいな。今、シチュー持ってきますから。お手伝いはそれ食べてからお願いしますね」

「わかった。俺にできることならなんでも言ってくれ。頑張って手伝うから」

「ふふ、それは頼もしいですね。ありがとうございます」

……なに、この雰囲気。

あの後厨房に彼、サイト君を引っ張りこんで、使用人の人達の仕事を手伝ってくれば昼食はキッチンとしたものを用意する、ということの説明した。いきなり手伝えて言っても難しいだろうから、サイト君と年が近いシエスタってメイドさんに彼の面倒見てくれる様に頼んでおいたのだが、思った以上に気があつたらしく会ってそんなに経ってないのに早くも俺が疎外感を感じるくらいには仲良くなっている。

……まあ、いいけどさ。なんかシチューの味やら貴族に対する愚痴やらで楽しそうに話し始めた二人を横目に俺は食堂へと急いだ。

ただこのすぐ後に俺はこんな提案をしたことを後悔することになる。なぜなら……

「諸君！決闘だ！」

……さすがにこんなことになるとは思っていなかったからである。

四話 決闘

きっかけはしょーもないことだった。サイト君が昼食の対価であるお手伝いとしてデザート配膳を手伝っていたのだがその際に香水が何かの小瓶を拾い、落とし主のギーシュという貴族に渡したところそれによつて二股がばれてしまい、逆恨みしたギーシュがサイト君に決闘を申し込んだ、というなんかもうみっともないというかアホくさいというか説明するのもいやになるような理由だった。

「というか何でギーシュはバラを持ち歩いているんだらうか？あれ食べるんだらうか？今はやりの草食系っていうやつなのだらうか？二股かけてたし草食風肉食系男子ってやつなんだらうか？」

俺がそんなくだらないことを考えている間にも話は進んでいたらしく、ギーシュはサイト君に決闘の場所を告げて行ってしまった。決闘を申し込まれたサイト君はと言うと

「謝っちゃいなさいよ。今なら許してくれるかもしれないし。勝てるわけない決闘なんかして、怪我をするなんて馬鹿馬鹿しいじゃない」

「ふざっけんな！悪いのはあつちなのになんで俺が謝らなくちゃいけないんだ！だいたい、勝てるかどうかなんてやってみなくちゃわかんないだらうが」

「わかるの！貴族に、メイジに平民が勝てるわけないでしょ！少しは私の言うこと聞きなさいよ！あんたは私の使い魔なのよ！？」

「話にならねえな。おい、なんたらの広場ってどこだ」

「こつちだ。ついてこい」

ルイズと言いついていたが、言っても無駄だと思っただろう、近くにいた貴族に声をかけて決闘の場所であるヴェストリの広場へ向かって行った。それを見たルイズもなんだかぶつぶつ文句を言いながら後を追って行った。

「……仕方ないなあ。殺されはしないだろうし回復用の魔法薬でも用意してやるか。あれ高いんだけどなあ、ったくファンタジーな世界観ならエリクサーの入った宝箱でも用意しとけっての」

確かギーシュの二つ名は「青銅」。青銅のワルキューレを何体か作り出して戦わせるという戦闘スタイルだったはず。しかもたしかそのワルキューレ達は武器の類は装備していなかった。なら、よほど当たり所が悪くない限り死ぬことはないだろうし、四肢欠損などの重傷になることもないだろう。せいぜい骨折といったところだろうか。なら、なんとでもなるだろう。

そう考えた俺は負けるであろうサイト君の治療のための薬などを用意しておくため、自室へと戻った。

「……うそん」

俺の目の前で信じられないことが起きている。サイト君がギーシュを圧倒しているのだ。

さっきまでは俺の予想通りの展開だった。ギーシュの出した青銅製のワルキューレにひたすら殴られ、蹴られ吹き飛ばされるサイト君。正直腕を折られても心が折れないというのは予想外だったが、それ以外は典型的なメイジ対平民の戦いだったはずだ。おかしくなったのは……そう、余裕の表れかんなのかしらないがギーシュが剣を作り、それをサイト君が受け取ってからだ。俺の見間違いない

なければその時、左手のルーンが輝いたような気がする。

そして剣を手にした瞬間動きが変わった。今までよりも段違いに速く、力強くなった。いや、それだけじゃないだろう。ただ力が強くなっただけならば、青銅でできた剣で同じく青銅でできたワルキユーレがあんなにすっぱり両断できるとは思えない。おそらく、剣の技術か、魔法的なよくわからない何かが働いたのだろう。そして、そんな物をサイト君が持つていたとは考えにくい。つまり、推測にすぎないがサイト君に与えられたルーンの力は、剣を持つことで身体能力の強化と何らかのプラスアルファを持ち主に与えるという物。そんなルーン聞いたことがない。

魔法の使えない落ちこぼれメイジ、前例の無い使い魔として人間の召還、類を見ないほど圧倒的な力を持つルーンの付与……。

どれか一つだけ、せめて二つなら不幸な、もしくは幸運な出来事だったのかもしれない。しかし、三つだ。これら三つの出来事は何らかの理由があると考えるのが自然だろう。

「……すると何がある……。おそらく大元の原因はルイズだろう。考えられる物としては……」

一つ、突然変異。ルイズは何らかの要因で、失われた虚無を含む五つの魔法の属性、そのどれにも当てはまらないメイジとして生まれた可能性。ルイズ自身が前例の無い存在ならば、前例の無いことを三つも起こしたというのも説明がつく。

二つ、虚無のメイジ。先祖返りだかなんだか知らないがルイズが失われた属性、虚無のメイジである可能性。これならば基礎であるコモン・マジックはともかく、水や土等の系統魔法が使えない理由は説明できる。五つの系統のうち虚無のみが無くなったということは、虚無はそれのみの一点特化の系統であった可能性が高い。ならば、虚無に特化しているのにも限らず他の系統魔法を使おうとすれば、失敗すると考えても不思議じゃないだろう。

三つ、先住魔法。ここハルケギニアには先住魔法という、俺たちが使う系統魔法とは別の種類の魔法がある。主に吸血鬼だのエルフだのといった亜人が、使うのだが、そういった亜人の外見はほとんど人と変わらないらしい。まあ、本物を見たわけじゃないから詳しくは知らないが。とにかく、ルイズは公爵令嬢、つまり父親は公爵貴族としてはトップクラスの絶大な権力を持った存在である。なら、戯れにそう言った亜人をとっつかまえて子供を産ませるといったこともできるかもしれない。つまり、ルイズがそういった亜人の血をひいている可能性。

ざっと考えられるのはこんなところだろうか。このなかでも可能性が高いのは……

「三つ目かね。ピンクの髪なんておかしいと思ったんだ。亜人の血を継いでいるってんなら、そんな変わった色の髪色をしているのにも説明がつくしな。おうおう、それにしてもこの考えがあつてるのならルイズの親父さん鬼畜だな。できればお会いしたくない人種の人だ」

「ってことはルイズでも先住魔法なら使えるかもしれない。後で教えてやるう。もし、これで魔法が使えるようになれば好感度大幅アップってやつだしな。」

「あん……？あれ、ちょっと待てよ、何か忘れてるような……。元々神話や民話、地域に伝わる伝承や都市伝説を調べるのが趣味だったこともあつて、こっちに生まれてからは、勇者イーヴァルディやら始祖さんの伝説やらを読みあさっただけ……確かその中に何かあつたような……。」

「あつ。そういや、あれがあつたな。確か図書館に本があつたはず、一応確認しておくか。もし、俺の想像通りだったならサイト君に剣と槍でもプレゼントしてやらなくちゃな。そしたら……アレだ、あ

だ名はイージスで決定だな」

始祖の伝説の一節を思い出した俺は、自分の考えを確認するために図書館へと急いだ。

五話 調べ物 他人と知り合いの間から知り合いと友人の間への軌跡

「うーす、タつちゃん。聞きたいんだけどさ、我らが始祖様の輝かしき偉業が書いてある本がどこにあるかわかる？ちよつと調べたいことがあるんだけど」

「こつち」

「いや、案内まではいいよ。場所言ってくればわかるから」

「ついでだから」

「……ならいいけどさ、悪いな」

「かまわない」

図書館に着いた俺は、いつものように座って本を読んでいたタバサに探している本の場所について聞いた。彼女もちょうど読んでいた本を読み終えた所だったらしく、ついでに案内してもらったことができた。

タバサと俺の付き合いはこの学院に入ってすぐからになるので結構長い。出会いは当然のごとくここ、図書館だった。最初のころは黙って本を読んでいるだけだったが、いつだったかお互いに「イーヴァルデイの勇者」シリーズがお気に入りだということがわかってから、会話を交わすようになった。といっても彼女はかなり無口な上、たまに口を開いても単語でしかしゃべってくれないので、かなり一方通行な会話になってしまいが。

そんな知り合い以下赤の他人以上の関係をしばらく続けていたが、何かの拍子に世間話（俺が話してタバサは本を読みながら相槌をうち、たまに返事をするといった寂しいものだが）として俺が「心を元に戻す薬」を作ろうとしている、というのを話した。

……その時のタバサの食いつきようはすごかった。

どういった症状に効くものを作っているのか。完成までどれくらいかかるのか。なにか特殊な材料は必要なのか……。あげくのはてには薬の完成のためなら、全力で協力するとまで約束してくれた。まあ、完成したら薬を分ける、という条件付きだが。それに、誰に何のために使いたいのか、という質問にも答えてはくれなかった。まあ、大方ご両親が親戚筋かに認知症が進んだ方がいるとかそんな理由だろう。それ以来少し関係もレベルアップして知り合い以上友人未満の関係を続けている。

「……」

「あんがとさん」

タバサが連れてきてくれたあたりには始祖に関する本がズラツと並んでいた。パラパラッとそれらの本をめくり、使い魔について書かれていそうな本を何冊か選んで読んでみることにした。以前読んだことのある本ばかりだったし、サイト君のルーンについてもおよそのあたりはついていて、おそろくすぐ調べはつくだろう。

結論を言えば、俺の予想は正しかったらしい。始祖の伝説に出てくる四人、もしくは四匹の使い魔の内に神の左手「ガンダールヴ」といった存在がいる。そいつはあらゆる武器を使いこなした一騎当千の存在だったらしい。ドットメイジであるギーシュと互角なのが

一騎当千というのもおかしな話だが、それはサイト君が未熟だとか、ルイズが虚無のメイジとして覚醒しきつてないとかそんな理由だろう。とにもかくにも本での調べ事は終わった。後はやっぱり本人にも話を聞いてみるべきだろう。確かギーシユとの戦いで大けがしたため、今は……どこにいるんだろう？

「まずはそっからだな」

とりあえず俺はルイズを探すことにした。

「ルイズ、いるー？ サイト君のお見舞いに来ただけだ。いちおう治療用の秘薬も持ってきたし、良かったら開けてもらえない？」

あの後、サイト君はルイズの部屋で治療中だと聞いて、俺はルイズの部屋へと向かった。ノックをしてからルイズへ呼びかけると中から返事がした後、ドアが開いた。どうやら鍵はかけていなかった様だ。

「うーす、おおうメイドさんじゃないか。どしたのルイズ、ジョブチェンジしたの？ 髪の色まで変わっちゃって」

「あの……私シエスタです」

「私はこっちよ。たまにはそのおもしろくもない冗談を挟まずにしゃべりなさいよ」

部屋の中にはシエスタとルイズがいて、ベッドに横たわったサイト君の看病をしていた。俺が見る限りまだ怪我は治りきっていないが、命に別状はないようだ。

「どんな感じ？」

「先生を呼んで治癒の呪文をかけてもらったし、怪我はほとんど治ったわ。気絶したままだけど、まあ、今夜一晩寝れば大丈夫でしょう。先生も遅くても五日以内には意識が戻るだろうって言ってたし」

「さいで。まあ、ちょっとどいてくれ。俺ごときの呪文と薬でも使わないよりましだろうし、パパツと治癒の呪文かけっから」

「そうね。じゃあ、悪いけどお願いするわ」

こうして俺はサイト君の治療をすませると、サイト君の意識が戻ったら教えてくれるように頼み、部屋を後にした。あまり長居するのもよくないだろうしな。

まあ、なんかシエスタはきらきらしたうるんだ瞳でサイト君見つめていたし、ルイズはルイズでひたむきな表情で必死に看病をしているので居づらかったというのが一番の理由だけだ。

今日のうちにやっておきたい事はこれで全てすんだ。他にもいくつかやっておきたい事があるが、それらはサイト君の目が覚めるの待ちなので今はどうしようもない。とりあえず今日はもうゆっくりしよう。さすがに色々なことが一度に起きすぎて少し疲れた。

六話 お買い物……せつかくの休日に若者が独りで武器屋にお買い物

「ちょっと武器が欲しいんだけど」

あれからしばらくが経った。俺は今、トリスティンの城下町、誇り高きブルドンネ街にいる。といっても今俺がいる場所はそんな優雅さとは遠くかけ離れているが。なにせ武器屋だ。

「こりゃ、珍しい！貴族が剣を！旦那が使っんですか？いやいや、旦那のような凛々しい方が剣を持てば絵になるでしょうなあ。周りにはいる貴族のご令嬢の目が潤む様子が思い浮かびますな」

「はは、ありがとう。といっても俺が持つじゃなくて、知り合いに送る用でね。それにちょっと試したいこともあるんで、普通の剣はいらないんだ。なんらかの魔法がかかっているのが必要なんだけど、何かないかい？」

あその後、三日経ってサイト君は目を覚ました。適当に会話をした後、ギーシュと戦った時のことを聞いたのだが、いまいち要領を得なかった。

左手のルーンが光った後、体が軽くなった。剣なんて持った事もないのに体の延長のようにつくりきて、何故か使いこなすことができた。その程度の情報が得られただけだった。まあ、始祖の使い魔の一人であるガンダールヴは、武芸の達人だったからあらゆる武器が使いこなせた訳ではなく、完全にルーンの力によるものだった、というのがわかっただけでも十分な収穫なので構わないけど。

そして、その話を聞いた時俺の中に一つの考えが浮かんだ。

武器を使いこなすためには、剣や槍等ならばそれらの間合いや特性などを理解しなければならぬし、技術をつける必要もある。重

火器などならばまずは使い方を知らなければどうしようもない。つまり、理屈は一切わからないがサイト君は、ガンダールヴは持つだけで、それら全てを取得、理解することができるという訳だ。ならば……魔法がかけられた武器を持たせたらどうなる？

それらの魔法がどういった仕組みで発動しているか、等についてわかるではないだろうか？さらに、武器にはインテリジェンスソードといった意志を持つ武器がある。つまりは心を持った武器だ。それをサイト君に持たせれば心の仕組みなどについてもわかるのではないだろうか。さすがに、あんな珍しい物はそうそうに手に入らないだろうが、ちょっととした魔法がかけられたものならば、探せば見つかるだろう。まあ、そんな訳で今日はわざわざ武器屋に訪れたわけである。

「なるほど……、ちょうどいい品があるんでさあ、旦那。ちょっと待っていてくださいえ……よっと、これでさあ、かの有名なシュペー郷の一品！お望み通り魔法もかかっていて、鉄だって軽く斬れちまうほどの名剣でさあ。お安くしときますぜ」

そう言って親父さんが持ってきたのは、確かに言うだけあって立派な物だった。両手で使うタイプの大剣で、白く輝く刃の部分は見ていると吸い込まれそうだ。でも、そこかしこに宝石がついているということは実戦で戦うものではなさそうだし、なによりこんなバカ高そうな物を人に贈れるほど、俺は太っ腹じゃない。つかシュペー郷って誰だよ。知らねーよ。

だけど、高そうだからって理由で断るのもなめられそうだからな……。ここは、サイト君には悪いが

「言い忘れていたんだが、贈る相手は平民でね。確かに立派な剣だとは思うが、平民ごときには少しもつたいないだろう。もう少し質素な、目立ちすぎない感じのものを頼むよ」

「そうだったんですかい。旦那も人が悪い。もう少し早く言ってくださいよ。すると……ちょっと待っていてくださいえ、今持つてきますんで」

そう言って親父さんが店の奥に行こうとした時、後ろの方から男性の声が聞こえた。

「バカなことやってんじゃねえ。剣は斬った張ったに使うもんさ。それ以外に使いたいつてんなら、店を間違えてらあ。道ばたの木の枝でも拾って、部屋で好きなだけいじくり回してろってんだ、坊主」

声が聞こえた方へ振り返ってみたがそこには剣が積んであるだけで、人が隠れているような様子は無かった。

(やべえ、ついに幻聴が聞こえるようになってしまった。もうダメだ。隠居しよう、田舎に引っ込んでお茶すすって生きていこう)

「おいおい、黙っちまった。おでれーた。こんな弱っちいのに武器屋に来るってんだからな、ふざけんじゃねえや。帰りな、貴族の坊主」

「やい！デル公！お客様に失礼な口聞くんじゃねえ！すいませんねえ、旦那……って目え虚ろですけど大丈夫ですかい？」

親父さんは積んであった剣の中から、一本の剣をつかみあげるとその剣に向かつてそう怒鳴った。どうやら、幻聴ではなく、あの剣がしゃべっていたらしい。ああ……良かったあ。まあ、それはそれとしてまさかこんな店にインテリジェンスソードがあるとは……。

「あ、ああ大丈夫大丈夫。居もしない人の声が聞こえたのかと思つて、気でも狂つたのかと。それよりそれ、インテリジェンスソードつてやつか。実際に見るのは初めてだな」

意志のある剣つていうと宝剣、みたくないイメージがあつたがそれはずいぶんと……その……有り体に言えば、ぼろっちい剣だつた。さっきの大剣と比べると刃の部分も薄っぺらいし、なにより錆だらけだ。売り物なら研いでおけよと。まあ、そんなことはどうでもいい。幸運にもインテリジェンスソードが目の前にあるわけだ。それもいかにもぼろっちくて、安く買ったたけそつなもの。さつさとこれ買って帰ろう。なにせこの世界では車なんてものはなく、いまだに移動は馬が主流なのでどうも乗り慣れない俺はすぐ疲れてしまふ。

「ええ、そうですか。つたく剣がしゃべつてどこの誰が喜ぶんだか……。それにこいつは特別口が悪くつて、お客さんにまで喧嘩を売り出すんでこつちも閉口してるんですなあ」

「へえ、けどおもしろいじゃないか。どうせ平民に贈るんだから口が悪がるつとどうでもいいしね。俺が買うよ。いくらだい？」

「やい、さつきも言つただろうが！坊主ごときがこのデルFRINGガ―様を買おつたあ千年早つ」

親父さんはうつとうしそうに、その剣（デルFRINGガ―というらしい）を鞘に入れると、少し考えて、言つた。

「ご覧の通り、錆び付いてますがインテリジェンスソード自体が珍しいですからね。エキュー金貨で400……いや、厄介払いもかねて350でどうですかね？」

エキユー金貨で350……。すると相場は150前後つて所か。つっても長年店主やつてる人に駆け引きをするつてのも無駄だろうし、少しは高く買うことになるだろうな。

「おいおい、いくらなんでも少し高いだろう。いいとこ百かそこらじゃないか？」

「冗談やめてくださいませ、旦那。それっぽちじゃ足がでちまう。せめて170、いや185はもらわねえと」

「そうだな。贈り物を値切るというのもアレだし、185でいこう。ほらこれでいいかい？」

そう言つて俺は財布をカウンターのの上にのせた。親父さんはそこから取り出した金貨を数えながら何かつぶやいている。

「……なら最初からすつと350出せつてんだ……」

「そういう事は本人の前で言わない方がいいと思うけどね。まあ、俺は何も聞こえなかつたけど」

「!!!は、はは。確かにエキユー金貨で185枚、頂きました。これからもどうぞよろしくお願いします。あ、ちなみにそいつは鞘に入れば静かになりますんで」

「わかつたよ。じゃあ、ありがとうね。また何かあつたらよらせてもらうよ」

そう言つて俺は店を後にした。後はこれをサイト君に渡すだけだ。

ちなみに、色々とめんどくさそうなのでデルフリンガーはまだ鞘に入れたままだったりする。だって出したらうるさそうだし。

「という訳で、プレゼントだ。いらなきや返してくれればいいよ」

「贈り物に文句を言うのはアレだけど、いくらなんでもぼろすぎるんじゃないの？これ。しかもしゃべる上に口結構悪いし」

「いや、ありがとうな。ちょうどルイズに剣買ってくれるように頼もうかなー、って思ってたんだよ。口悪くつても根は良いやつっぽいし、デルフもなんか俺の事気に入ってくれたみたいだしなー。だいたいしゃべる剣なんておもしれえや。てか剣て結構高いんじゃないか？」

「ああ、すげー高い。エキュー金貨で200枚弱した。そんだけありゃあルイズが五人は買えるぞ」

「こんなぼろ剣がそんなにするの？あなたが千人は買えるじゃない」

「……なあ、相棒。この二人つてもしかして仲悪い？」

「いや、普段からこんな感じだけど？」

あの後街から帰ってきた俺はルイズの部屋に来ていた。用件はもちろん、サイト君に剣を届けるためである。そしてご覧の通り、和やかに談笑をしている。

サイト君に買って来た剣、デルフリンガーを持たしてみたが、他の武器を持ったときと変わらず、俺の望んでいた「心を持つ剣を理解することで、心の構造を理解する」といったことにはならなかった。まあ、知り合いのメイドさん（シエスタのこと）をギーシュからかばってくれたお礼、つてのが武器をプレゼントしようと思った主な理由だから別に構わないけど、少しがっかりしたのは確かだった。

そして、サイト君は自分用の剣が手に入ったことを喜んで、さっそく広い場所で振ってみたい、と言い出した。なんだかんだでしゃべっている内にずいぶん遅い時間になっていたが、俺もルイズもサイト君の実力をきちんと見てみたかったので三人で開けた中庭に行くことになった。

その途中でタバサとその友人であるキュルケに会い、一緒に中庭に行くことになった（どうもギーシュと戦ったサイト君を見て、惚れっぽいキュルケに火がついたらしい）のだが……。もし俺が一時間、いや十分昔の自分に忠告できるのだとしたら間違いなくこう言っただろう。

「もう遅いから寝ろ。きちんと鍵しめて、カーテンしめて、ぐっすり。それで明日の朝まで何も聞くな、何も見るな」と。

なにせ中庭では、

「…………アレ、これ俺死んだんじゃないの？」

なにやらバカでかいゴーレムが破壊活動にいそしんでいたからである。

七話 フーケ登場

「ちょっとキュルケ！私の使い魔にあんまり触らないで！それもむむ、胸、胸を押しつけて！ほんつとにこれだからゲルマニアンはその重いだけの脂肪の固まりが大きいと態度まで大きくなるのかしら！あー、やだやだもつと慎みを持ったらどう？ツエルプストー！」

「あなたのほうこそどうなのよヴァリエール。胸は小さい、色気は無い、態度は大きい三重苦じゃない。どこに慎みがあるのかしら？ああごめんなさい、そうだったわね。トリステインでは胸の大きさを慎み深さを示すのだったわね。さすがはヴァリエール公爵家のご令嬢、ずいぶんと慎み深いサイズですことね。……プツ」

「笑った！笑ったわね！こ、こ、この、この……表出るおおおおお！！！」

「おい、前二人ともう少し距離開けて行こーぜ。知り合いだと思われたくないんだけど」

俺達五人は今中庭へと向かっている。ルイズとキュルケの二人は昔から仲は良くなかったのだけど、サイト君という新しいいざこざの原因ができたことでいっそういがみ合っているっぽい。まあ、興味ないしどうでもいいんだけど。

そんなわけでもうその角を曲がれば中庭という所で前を歩いていた二人が立ち止まった。理由はわかる。なにやら重く鈍い音が聞こえるのだ、こんな夜遅くにもかかわらず。どうもその音は中庭から聞こえるようなので俺達は角から顔を出してそちらを覗いてみた。……そこには壁をひたすら殴る巨大なゴーレム、というなんとも

コメントに困る光景が広がっていた。

「……なによ、あれ？」

「さあ、少ないとも俺の知り合いにあんなサイズの奴はいないな」

「もう面倒だから、真面目な話題の時はアシル黙ってなさい」

「おそらく土くれのフーケ」

「で、誰だよそれ」

「確か最近話題になってる賊だったはずだ。でかいゴーレムで貴族から盗みを働くって聞いた。なあ、真面目に返事するぶんにはしゃべったっていいだろ、ルイズ……おい、あのピンク髪いねーんだけど……」

中庭で起きている出来事を見た後、角に隠れてみんなで話し合っていたが気づくとルイズがいなくなっていた。そしてその直後に何故か爆発音が聞こえたので、おそろおそろそちらの方を振り返ってみると、そこにはゴーレムに向けて杖を向けているルイズがいた。しかもわざとなのか偶然なのか知らないが、さっきの爆発、ルイズの失敗魔法のせいだろう、先ほどまでゴーレムが殴っていた壁の部分に大きな穴が開いていた。さらに運が悪いか当たり前のことだが、ゴーレムを操っていたフーケと思われる人（よく見るとゴーレムの肩の上にそれらしき人影があった）もこちらに気づいたらしく、一番近くにいたルイズへとゴーレムが近づいてきた。

（ヤバイー!!）

あんな二十メートルはあるんじゃないかっていうゴーレムに潰されたら怪我じゃすまない。俺はルイズの方に走り出した。

「早く逃げ……」

「なにしてんだ！！ルイズ！！」

俺がルイズの所にたどり着くよりも早く、ガンダールヴの力を発動させたんだろう、すごいスピードのサイト君が俺を抜いてルイズの所に行き、ルイズを掴むとゴーレムから遠ざけていった。これで、ルイズの安全は確保された訳だ。良かった良かった。

……あれ？ゴーレムに一番近かったルイズを助けるために近づいた後、そのルイズがサイト君に助けられいなくなったということとは

「今度は俺がやべーじゃねーか！！」

まあ、ゴーレムの動きは大して速くないので油断さえしなければそれほど恐ろしい相手ではない。それに、タバサの使い魔であるウインドドラゴンが俺達を回収して安全な空に逃げる事ができたので、たいした問題は無かった。

それからは正直特に何もなかった。ルイズが貴族として賊を捕まえるために全力を尽くすべきだと言っていたが、百戦錬磨の盗賊相手に学生メイジが相手では、いくら多数対一でも難しいだろうと考え、なんとかなだめた。

思えば魔法が失敗ばかりのルイズは人一倍貴族らしさという物にこだわっているし、今まで他の貴族にバカにされていたぶん、自分を認めさせたい、といった顕示欲などが強いのだろう。フーケが有名な賊だと聞いて後先考えず攻撃をしたのも、そのあたりが理由なのだと思う。まあ、そういうのは誰にもあるものだし、誰が怪我をしたというわけでもないから、少なくとも俺は責めるつもりはない

けど。

そしてフーケらしき人物は開いた穴から中に入っていくと、しばらくして何かを持って出てきた。それを持ったまま、またゴーレムの肩に戻るとそのまま魔法学院の外へと出て行った。そしてそのまましばらく行くと、突然崩れ落ちた。上空でそれを見ていた俺達は、降下して残った土くれを調べてみたがもうそこには何も、誰もいなかった。

つまり目の前で見ていたにも関わらず、俺達は何もできなかった……俺達はただフーケが盗みを働くのを見ていることしかできなかった……。

まあ盗まれたのは俺の物じゃないので、かけらも悔しくはなかったんですけどね。

八話 探偵・アシル・ド・セシルは役立たない(前書き)

ロングビルさんの髪色は絵ではどう見ても緑ですが、地の文では青だったので青、ということになりました。

八話 探偵・アシル・ド・セシルは役立たない

「……いった……責……とるの……」

「賊ごときが……貴族……しおって……」

「……あま……いじめ……」

ドスツッ！！

「痛ったあ！！」

隣にいたルイズに足を踏まれて目が覚めた。どうやら眠っていたらしい。真面目に今回の事件について話し合っていた所を邪魔してしまったからであろう、先生方の俺を見る視線が痛い。

あれから俺達はすぐさま衛兵を呼び、何が起きたかを説明した。そして、彼らが壊された壁の中（宝物庫だったらしい）を調べてみた所、フーケが書き残した文字を発見。今回の犯人はメイジであることが確定したので、そこで先生達を起こしそれからずっとこうやって話し合っている。つまり、俺達は徹夜なので、寝てもしょうがないと思う。

「あのね、こんな大変な時に寝てるんじゃないわよ。しかも立ったままなんて変に器用よね、あんたって」

「しょうがないだろ、俺は医者に一日12時間は眠るように言われているんだ。もつといたわってくれ」

「……アシルどっか悪かったっけ？聞いたことないんだけど」

「まあ、嘘だからな。ところで今話はどんな感じ？寝る前は責任のなすり付けしてた気がするけど」

「なるほど、頭と性格が悪いのね。ああ、話ならついさっきまでその話題だったわ。そこに学院長が来てセクハラした結果、先生全員に責任があるという所に落ち着いたみたい」

「……どうやったら、セクハラでそんな事になったんだよ」

俺達がそんなことを話していると一人の女性が現れた。眼鏡をかけた青髪の理知的な女性、俺の記憶がたしかならオスマン学院長の秘書のロングビルさんだったはずだ。今頃来るといっなのはいくらなんでも職務怠慢なような……。オスマン学院長もそう思ったのか、ミス・ロングビルに話しかけた。

「どこ行つとつたんじゃ、ミス・ロングビル。大変なことになったるんだが」

「存じていますわ、オールド・オスマン。朝方に、フーケが現れたと聞いたので独自に調査をしておりますの」

「そうじゃったのか、いつものことながら優秀じゃの。で、何かわかったことは？」

「ええ、フーケの居所が判明しましたわ」

それを聞いて 場がザワッと揺れる。手際が良いっていつてもこの早さは異常だからか、ほとんど全員が驚いている。

「そ、それは本当ですか！？いつたどこなのですか！？」

「近くの農民に聞き込みをしたところ、黒いローブの男が森の中の廃屋に入っていく所を見た。おそらくそれがフーケではないかと思うのですが」

「た、確かに。黒いローブというのはミス・ヴァリエール達の証言とも一致します。おそらくそれがフーケで間違いないでしょうな」

コルベール先生が驚いたように質問すると、はきはきとした返事が返ってきた。それを聞いてオスマン学院長が続けて聞いた。

「そこは近いのかね？」

「いえ、徒歩で半日、馬でも四時間はかかるかと」

その答えを聞いた学院長はみんなの方を向き言った。

「そうか……。諸君、知つての通りこのたび魔法学院の宝がフーケによつて盗まれた。これだけの数の貴族がいて、たかが賊一人ごときのために国に頼るといふのも情けない。ここは、我等でフーケをとらえ貴族の誇りを見せつけてやるうではないか！」

その言葉に、先生方から拍手が起こる。それを聞いた学院長は誇らしげにこう続けた。

「では、搜索隊を結成する。我こそは、と思う者は、杖を掲げよ！」

その言葉に、先生方は誰も杖を掲げない。このさっきの拍手からコントのような流れには、一種の美しささえ感じる。

まあ、ロングビルさんの話からおおまかな裏は見えてきているし、ここは俺が立候補しよう。

俺はすっと杖をあげた。学院長がそれに気づいた。

「ミスタ・セシル。おぬしは生徒ではないか。というか君さっき寝とらんかった？どうしたんじゃ、急にやる気出して」

「ははは、ご冗談を学院長。私も貴族の誇りを踏みにじっているかのような盗賊には心を痛めておりまして、微力ながら力を尽くしたいと思っていた次第なのです」

俺がそう言った後、隣にいたルイズも杖をあげた。コルベール先生が彼女を思い直させようと話しかける。

「ミス・ヴァリエール！君はまだ生徒じゃないか！ここは教師に任せなさい！」

「先生方は誰も掲げないじゃないですか。それに嘘くさくて心がこもってないとはいえ、アシルがあそこまで言ったのにもかかわらず、見ているだけなのど私の貴族としての誇りが許しません」

枕詞みたいに俺への罵倒を挟まないでほしいけどな。まあそれはおいておいて、ルイズが捜索隊に参加するのを聞いて、ライバルであるキュルケ、そしてその友達であるタバサ、使い魔であるサイト君。後、フーケの居場所を見つけたロングビルさんが案内役と御者としてついてくることになった。

実を言うと俺は行った先にフーケが居るとは思っていない。何故ならロングビルさんは、フーケは馬で四時間行った先に居る、と言

っていた。これがおかしいからだ。

ロングビルさんが言った事が本当なら、朝ここを出て馬で四時間行ったさきで聞き込みをして、また四時間かけて戻って来たのにまだ朝だったということになる。これはおかしい。つまり彼女の話は全くの嘘だった、ということになる。

俺の考えではおそらく、ロングビルさんは何も見なかったのだろう。そして先生方が責任をなすり付け合っているのを見て、その矛先が自分に来るのを恐れた彼女は、フーケの居場所を見つけた、という功績を作ることです。その矛先をそらすとした。たぶん、彼女が案内した先に行けば廃屋はあるが、それがけて何の手がかりも残っていないと思う。フーケは有名な盗賊だ。手がかりが残っていないことは不思議でもなんでもない。つまり、廃屋の場所さえ知っていればそれだけで何の準備も必要とせず、フーケの隠れ家をでっちあげられる、ってことだ。

つまり、話にのつたふりをして捜索隊に参加すれば片道四時間のピクニックをするだけで、フーケを恐れずに勇敢にも貴族の誇りを貫き通したってな評判が手に入る。……と、まあ俺はそんな考えで俺は参加することにしたのである。

そんな推理から安全であることがわかりきっている俺は、安心して馬車に乗り込んだ。

九話 対ゾンビ用最終兵器……それは漢のロマン

「遅かったじゃない、何してたの？」

「学院長に盗まれた破壊の杖について聞いてた。宝物庫の中身について堂々と質問できることなんかそう無いからな」

俺が馬車にくるとすでにみんなそろっていた。遅れたことを咎められるか、と思ったがそんなことはなかった。みんな緊張しているかと思っただが、ずいぶんとリラックスしている、というか普段通りだ。

「へえ、で何かわかったのかしら？」

「これと言って大したことは。なんか学院長の昔の恩人の持ち物で、ワイバーン殺す程度の威力はあること。同じ物がもう一本あってそれはその恩人さんの墓の下、ってことだけだな。わかったのは」

まあ、その恩人さんは死ぬ間に元の世界に帰りたい、って言うてたことから俺やサイト君みたいに違う世界から来た人だろうという事がわかったのは収穫っっちゃ収穫だけど。あと、同じ物を二本携帯していたことから予想できることもあるが、まあそれはどうでもいいだろう。

「……………」

「……………」

「何？」

「いや、ルイズ、キュルケって順に質問が来たから、次はタバサあたりが『お兄ちゃんて好きな人いるの？』みたいな事聞いてくるかと思って待ってるんだが」

「興味ない」

「……そうですか」

ギャグに素で返されるとつらいですね。あとルイズさんとキュルケさんが無言で蔑みの視線を送ってきているのが地味に効きますね。

「で、サイト君はなんか聞きたいことある？」

「いや、特にないけど……目的地まで結構かかるんだろ？早く出発した方がよくないか？」

「……そうですね」

徹夜のせいかテンションが変に上がっているので、みんなの間に温度差を感じて少しさみしい。

さすがに、こんな気持ちでは役に立たないだろうので、俺は少し眠ることにした。目的地にいたら起こしてくれるようタバサに頼み、俺は横になった。幸い眠気はすぐ来たので、俺はそれに身を任せた。

俺は体を揺さぶられている感覚で目を覚ました。起こすのをタバサに頼んだので、当たり前だが目を開けると一番にタバサの顔が目に入った。……どうでもいいが起きてすぐに、美人さんを見ると一

日幸せに過ごせる気がするの俺だけだろうか……周りを見渡すとみんなが降りる支度をしていた。ってことは、もうすぐ目的地に着くのだろう。外を覗いて見れば、森が深くなっていた。ここがロングビルさんの言っていた所だろう。

それからすぐにここからは徒歩で行くべきだとロングビルさんが言い、反対する理由もないのでそれに従いみんなでそろそろと歩き出した。歩いている間、何があったか知らないがサイトをルイズとキュルケが取り合っていた。実に青春ぽい。俺が女で、かつ寝起きでなければ『まーぜーてー』って言いたくなるような光景だ。そんな事を考えていると前方に廃屋が見えてきた。あれがロングビルさんが言っていたフーケの隠れ家ってやつだろう。いい年して秘密基地を実際に作ってしまったフーケに、俺は感動を禁じ得ない。まあ、ロングビルさんの嘘なんだろうけど。

「で、どうするべーよ」

「偵察をするべき」

「って事はこーゆーのはすばしっこいサイト君だな。ほれ、行ってこい、キミに決めたから」

「え？え？」

「相棒、俺も鞘の中に入れられっぱなしでなまってたんだ。いつちよ、偵察でも何でもしてやるーぜ」

俺が廃屋の偵察をサイト君に頼むと二つ返事で請け負ってくれた。意思疎通が上手くいくのはなんと気持ちが良いのだろうか。周りを調べてきますと言ってどっか行っちゃまったロングビルさんにも見習って欲しい物だ。

ガンダールヴの力を使い、サイト君がすごいスピードで廃屋に近づいていった。そして、窓から中を覗き、特に危険要素はなかったらしく、手で俺達を呼んだ。

ロングビルが周りを見回っているだろうとはいえ、万が一の時のためにルイズをドアの外に残し他の四人は中へと入った。

廃屋の中は、思ったほど廃屋してなかった。……つまりぼろくはなっていないかった。埃こそ積もっているが掃除すればまだまだ住めそうなくらいには、きちんとしている。そして、埃が積もっているということはここはしばらく使われていない、ということだ。俺の考えが合っていたようでホツとする。後は、適当に家捜ししてから学院に戻って、すでにフーケは逃げた後でした、って報告すれば終わりだ。良きかな良きかな。

「あつた。破壊の杖」

「……えー。」

「本当にこれが破壊の杖なの？ ずいぶんあっさり見つけたけど」

「間違いないはず」

「……」

「……」

破壊の杖を前に話し合っている二人をよそに、俺とサイト君は黙っていた。

学院長には破壊の杖のだいたいの見た目とその威力、どうやって

手に入れたのかを聞いたただけだったのです。さすがにこれには驚いた。何せ破壊の杖というのは俺の記憶が確かなら、俺やサイト君がいた世界にあった対ゾンビ用最終兵器、ようはロケットランチャーのことだったからである。それに盗まれた物が実際にここにあったということは、俺の推理は完全に間違っていたということになる。

……いやな予感がする。早くここを離れた方が良さそうな、そんな気が。

「……まあ、いいや。見つかったんならさっさと帰ろうぜ。こんな陰気な森の中にいつまでもいたくねーや」

考えていても仕方がない。俺は破壊の杖を掴むとみんなにその声をかけた。何はともあれまずは戻って破壊の杖を取り戻したことを報告しよう。そして、みんなで廃屋出ようとした時、ルイズの悲鳴が聞こえた。その理由は考えるまでもなく、すぐにわかった。

何故なら恐ろしい破砕音と共に小屋のドアや屋根破壊され、そこから三十メートルはあろうかという土でできたゴーレムがこちらをむいていたからだった。

十話 戦いは基本的に主人公以外の見せ場（前書き）

こんな小説でも見に来てくださっている方々には申し訳ないのですが、新年度も始まったので更新は週一か、隔週になります。

十話 戦いは基本的に主人公以外の見せ場

前回までのあらすじ
死にそう。

「まずは外に出るぞ！」

こんな狭い所では、対処のしようがない。急いで廃屋の外に出た俺達は、ゴーレムへ失敗魔法で攻撃していたルイズを捕まえると、ゴーレムと距離をとった。そうすることで今から俺達が戦わなくてはならないだろう相手の姿が明確にわかった。

前回見たときは薄暗い真夜中だったためよくわからなかったが、いざこうして見るとでかい。目測だが30メートルはあるだろう。メイジー一人で作るゴーレムとしては最大級だ。フーケのことを賊ごとき、と先生方はバカにしていたがそんなことはない、これを一人で作ったのならフーケはトライアングル、いや下手をすればメイジの実力としては最高峰であるスクウェアかもしれない。

「タバサ！使い魔のドラゴンを呼んでくれ！確か連れてきていただろ！悪いんだがサイト君はあれの足止めを！たぶん俺達じゃ敵わない」

「わかった！」

「もう呼んである。それで？」

「さっすが！じゃあキュルケとルイズを乗せて空中に待避していてくれ。あれは俺とサイト君でなんとかする」

「バカにしないで！私だって……魔法が使えなくなっただって私は貴族なのよ！それなのに敵を使い魔に任せて、背中を見せて逃げるなんてまねできるわけないでしょ！」

貴族令嬢三人に対して避難するよう言ったが、ルイズはその意見に反対してきた。この危機的状况でそんなこと言わないで欲しい。これじゃあ速攻でタバサのウィンドドラゴンの上へと逃げたキュルケがかっこわるい感じになってしまう。それにしてもこんなことになるなら俺の使い魔も連れてくればよかった。あいつには学院周辺の地理を憶えさせるため、留守番させてきたからな。

「……そうじゃない。適材適所ってやつだ。ルイズ達は上空からフーケを探してくれ。この近くでゴーレムを操っているはずなんだ。頼むよ、ルイズ。誇りを優先して状況を見間違えなくてくれ！」

「……わかったわよ」

なんとか説得して三人を避難させることはできた。まったく少しは考えて欲しい。今回来た六人の中で、あの三人だけは怪我をさせるわけにはいかないのに。

タバサとキュルケはそれぞれガリアとゲルマニアの貴族だったはずだ。留学先の他国で、自国の貴族が賊に殺された、怪我をさせられた。しかもそれは学院の尻ぬぐいのため、そのうえフーケなんて危険人物がいるであろう場所に行くことを学院長が許可していた。……下手しなくても外交問題になる気がする。

ルイズの方はもつとわかりやすい。公爵令嬢が怪我した、なんてことになったらこの場にいる唯一ルイズと同国の貴族である俺が、貴族社会的にヤバイ。

つまり、この場は俺とサイト君の二人でどうにかしなくてはならない。

まずはあれだろう。サイト君にこの破壊の杖でゴーレムを攻撃してもらおう。一撃とはいかなくてもかなりの大ダメージを与えることはできるはずだ。そうすれば時間が稼げる。できればその間にタバサ達がフーケを見つけてくれるのを祈るばかりだ。

「サイト君！ちよつと来てくれ！」

そう俺はゴーレムの足下で戦っているサイト君に叫んだ。だが、戦いに必死で聞こえていないらしい。これは、俺の方から近づかないか、と気を入れ直しサイト君の方へ一歩踏み出した所、ゴーレムの拳がうなりを上げて彼にたたき込まれるのが見えた。デルフを盾にしてなんとか受けたようだが、もともと威力がすさまじかった上に直撃の瞬間、ゴーレムの拳が鉄へと変えられたようで、サイト君はこちらへと吹っ飛んできた。

「サイト君！大丈夫か!？」

「つつ！つと。ああなんとかかな。だけどこのまんまじゃじり貧だ。あいつ削つても崩してもすぐに直るんできりがねえ。どうしたら…あつ！それ破壊の杖……だったか？アシル、それ貸してくれ」

そう言う俺の手から破壊の杖を取り、ゴーレムへと向けた。そして発射に必要なのであろう細々とした操作を行うと肩に担ぎ、トリガーを引いた。思っていたよりもぱつとしないロケット状のタマが発射され、ゴーレムに当たると爆音と共に破裂した。

「うおっ！」

爆発による土埃が収まると、そこには上半身が吹っ飛んだゴーレムがいた。さすがに木っ端みじんというわけにはいかなかったよう

だ。だけどチャンスだ。回復される前にとどめを刺さなくては……。

「ん？」

ゴーレムはそのまま数歩歩くと、膝から崩れ落ちた。どうやら、有る程度以上の破損は直せないようだ。

「やったな！」

「つつてもサイト君以外特に何もしてないけどね。後はせいぜいタバサのドラゴンくらいか、役に立ったの。あとさサイト君、もしかしてその破壊の杖って単発式だったりする？」

「ああ……そうだけど。アシルもこれがなんだか知ってるのか？」

「まさか、学院長の話からすればたぶんそうだろうなって。後サイト君もしかしたらこの後少しばかり面倒なことになるかもしれないけど、その時は頼むね。俺が杖投げるのを合図に斬りかかってくれ」

「それってどういう……」

そうサイト君が疑問を言いかけた時、空から女性組が戻ってきた。そして、キュルケがサイト君に駆け寄り、抱きついた。それにまたルイズがぎゃーぎゃー文句をつけている。一人でゴーレムの残骸を調べているタバサとの温度差がいつものことながらすごい。二人にまわりつかれて大変そうなサイト君から、俺は破壊の杖を受け取った。たぶんこの後、俺の考えている通りに事態が動けば必要だからな。

「ミスタ・アシル。それが破壊の杖ですか。一応確認をしたいので

見せてもらってもよろしいですか？」

「ええ、もちろんですよ。ミス・ロングビル。どうぞ」

いつのまにかロングビルさんが戻ってきていたので、俺は言われた通りに破壊の杖を渡した。彼女はそれを受け取ると、俺達から少しばかり離れこちらに破壊の杖を向けた。先ほどまでの柔和な表情が嘘のように無くなっている。ルイズ達も異常に気づいたのか騒ぐのをやめて、彼女の方を見ている。距離的に、渡した俺が彼女と一番近いので、俺が話をする。

「なるほど。あなたがフーケだったんだな。ミス・ロングビル」

「ああ、そうさ。気づくのが少しばかり遅かったね。もう少し早ければ破壊の杖があんた達に向けられることもなかっただろうに。まあ、度胸は認めるよ。破壊の杖を向けられてもあんた震え一つないようだしねえ」

「確かに、少しうかつだったな。あんな威力の物がそちらの手に渡ったんじゃもうどうしようもないしな。死ぬ前くらい気合いいれるさ。最期に一つだけ教えてくれ。なんでこんなことをした？さっさとどっかの好事家にでも売っぱらえばよかったのに」

「ああ、それはね……」

フーケが理由を話しかけた時をねらい、俺は杖を相手の顔めがけて投げつけた。フーケはいくらか驚いたようだったが、首を振って冷静に杖をよけ、その隙に走って近づいて来ていた俺に破壊の杖を向け、その引き金を引いた。

「なっ!!」

それでも何も起こらないことに驚愕の表情を浮かべたフーケの顔面めがけ、俺は拳をたたきつけた。

「ちいつ!」

だがさすがにインドア派の貴族のパンチなど簡単によけられてしまった。しかし、ずいぶん雑だったとはいえ、打ち合わせしておいた通りにガンダールヴを発動させたサイト君がデルフをフーケの腹に打ち込んだ。鈍いうめき声を上げて倒れたフーケから破壊の杖と普通の杖を取り上げているとルイズ達が近寄ってきた。ずいぶん物事が早めに進んだせい少し混乱しているようだ。

「よくわからないんだけど……ミス・ロングビルがフーケだったってことなのよね? 気づいてたんなら早くいいなさいよ! 本当に死ぬかと思ったんだからね!」

「無茶言つなよ、ルイズ。気づいたのはついさっきなんだ。それに証拠が無かったからな。破壊の杖を渡せば目撃者消すためにこつち向けて撃ってくれるかな、って考えてたらぺらぺら自白しだしたからな。運が良かったよ」

「でも破壊の杖が発動してたらどうするつもりだったのよ。だいたいなんで何も起こらなかつたの? 故障?」

「いや、キュルケも破壊の杖撃つ前にサイト君がなんかごちゃごちゃやってたの見たろ。つまりこれ使うのには特殊な準備があるわけだ。フーケがこんな芝居うったのも、大方その準備がわからなくて使い方がさっぱりだったからだろう。それにスケベに泥棒とはいえ

学院長もフーケもメイジとしては一流だ。その二人でも使い方がわからないってことはこれはマジックアイテムじゃない可能性が高い。そんな目で見てみればいいさ。形状からして平民が使う銃にどことなく似てる、事実サイト君が使ったときは変な形の弾が発射されたる？つまりこれは銃の発展系ってことだ。そこまでわかれば話は簡単だ。学院長の話からすればこれは恩人さんの持ち物で同じ物を二本持ってたって話だ。単発式じゃないなら同じ物を二本持ち歩くより、これと弾を持ち歩くのが普通だろ。そんな考えからこれは単発式の銃だと俺は考えた。つまりこれはもう弾切れなんだよ、動くわけがねえ」

まあ、こんな穴だらけの推理サイト君って裏付けがなくちゃ、行動には移せねえけどな。

まあそんなわけで、俺達の少しばかり危険だったピクニックは、こんな結末を迎えた。

十話 戦いは基本的に主人公以外の見せ場（後書き）

できれば感想などもつけてくださるとありがたいです。

一言二言でもモチベーションの維持になるのはもちろん、私としても単純につれしいので。

十一話 舞踏会も基本的に主人公以外の見せ場

絢爛豪華なホール、着飾った紳士淑女のみんな、ずいぶんと楽しげな雰囲気の中、なぜか俺はバルコニーにいた。

「…………おおう…………」

「大丈夫か？無理してあんなに喰うから。つーかタバサはどこにあればだけの食い物入れてるんだ？」

あの後フーケを捕まえた俺達は学院に戻って起きたできごとについて学院長に報告した。それで、まあ、その報償としてシュヴァリエだかなんだかという名誉な地位を頂けることになったのだが……そこでまたルイズさんがやってくれた。一番活躍したサイト君になんの褒美もないのはおかしい、と言い出したのだ。しかし、サイト君は使い魔、学院長も立場的に爵位を与えることなどできるわけもなかった。そこで、未だにバカだったとは思うが俺はこう言ってしまったのだ。

「今回一番活躍したサイト君に何も無いのでしたら、私も結構です。実際これといって特になにも功績はあげてませんからね」

まあ、フーケを捕まえるのに一枚かんだことで調子に乗っていたんだと思う。さらに周りからの評価を上げようとしてそんなかっこいい感じの事を言った。その結果先生方にはほめられたが、まじで俺への爵位の授与は見送られてしまった。

…………おかしくね？そこは『いやいや、君も頑張ったからのう。そんなに自分を卑下するものではない。君はシュヴァリエの爵位の授与に値する事を成し遂げたのじゃよ』みたいな流れになるんじゃないな

いの？どうやら西洋風のこの世界観では日本人的な謙遜という美德は通じないらしい。今後は気をつけようと思う。

そして、フーケ騒ぎで忘れていたが今日は『フリッグの舞踏会』だった。ただでさえインドア派の俺からすれば面倒なイベントなのに、フーケ騒ぎで疲れている今日開催というのは嫌がらせに近い。

そんな理由から溜まったストレスをやけ食いすることで発散していた所、タバサが馬かなんかみたいな勢いでもさもさとサラダを食べているのを発見。なんか負けてるみたいで悔しかったので対抗しておれも牛みたいな勢いで料理に挑んでみた。その結果、

「……………うあ……………やべえ、なんか出そう……………」

「こつち向けてそんな事言うんじゃねーよ！俺、剣だから逃げられねーのに！相棒！助けて！俺、汚されちまう！」

「何やってんのよ」

その言葉に振り返ると着飾ったルイズさんがいた。結い上げた髪も胸元の開いた大人っぽいドレスも中々どうして似合っている。もともと整った容姿の上、スレンダーなので西洋人形のような美しさだ。肘のあたりまである白い手袋も高貴さを感じさせる。まあ、正直異性として見たことがないので俺にとってはどうでもいいんだがサイト君には効果がばつぐんらしく、目も合わせられないようですっぽをむいてしまった。なんか頬が赤くなってるし。

「せっかくの舞踏会なのにこんな所でうずくまって……………フーケの捜索隊に参加したってだけで今は大人気になれるわよ。普段バカにしていた私にまで言い寄ってくるやつらがいたくらいだしね」

「……………ざける。いまくるくる回りながら踊った日には、回転しながら

ら吐きちらすことになるわ。もう、いいから俺の事はほつといてサイト君と踊ってこいよ。使い魔君があれだけ頑張ったんだ、ご褒美やってもバチはあたらないだろ」

「……そうね」

そう言つとルイズは顔を背けながらもサイト君に手を差し、こう言った。

「……あんたもまあまあ、頑張ったしね。まあ、踊ってあげなくもないわ」

ホールでは、ルイズとサイト君が踊っている。ダンスになれていないからだろう、他のペアと違いサイト君の動きはたどたどしくぎこちない。だがその表情は他のどのペアよりも柔らかくたのしそうだし、こうして見ている間にも少しずつ息があってきたように見える。

それは無能セロのメイジと平民の使い魔というかみ合っていない二人が、これから様々なことに立ち向かうことでお互いのことを少しずつ支え合い、信頼し合い、認め合っていく……そのことを暗示しているように俺には見えた。

十二話 好奇心は俺をも殺す（かもしれない）

今、俺は深夜の女子寮にいる。この一文だけでは、犯罪の香りがするが断じてそんな目的があるわけではない。むしろ正義の味方と呼んでもいいくらいだ。なにせ俺は犯罪を未然に防ごうとしているのだから。

あれから……フーケ騒ぎだのフリッグの舞踏会だのが終わってから、俺がこうして女子寮に忍び込むまでの間に様々な出来事が起きた。

フーケ騒ぎのような一大事件がたて続きに起こるわけもなく、俺は平穏な日々を送っていた。まあ、サイト君がルイズに夜這いをしてようとして返り討ちにあっただの、未だにキュルケに言い寄られていてルイズとの諍いの種になっているだの、シエスタとの仲も少しずつ深めているようだ、だのの騒ぎはあったがまあそれは俺には関係ないのでどうでもいい。まあ、そんなこんなで平和に静かに過ごしていたのだが、ある時ここトリスティン魔法学院に、我が国の王女、アンリエッタ・ド・トリスティン姫殿下が来ることになった。名前が長いほど偉いのではないか、と思っていた俺にとって彼女の名前の短さは驚いたが、憶えやすいし、短いのにこしたことはないだろう。さすがに自分の国の王女の名前間違えたら冗談じゃすまなそうだしな。

まあ、そんなこんなで姫様が来たことでテンションの上があった知り合いに合わせたせいで疲れた俺は、知り合いのメイドさんに作ってもらった軽食を片手に月を眺めていた。ぼーっと空を眺めるのが結構好きなのだがこんなとこ見られたらナルシストだと思われそうで隠れるようにしていたせいだろう、誰かが俺に気づかずにくすぐ近くを通っていった。確かそっちは女子寮だったはず……。黒いロー

ブを羽織った人物が行く場所にしては怪しすぎる。しかしフーケ騒ぎが起きてそう経っていないこともあり、慎重に動くべきだと思っただ俺は、少しの間息を殺していた。その考えは合っていたらしい、さっきの不審者の後を追いかけるかのように二人目の不審者が俺の近くを通っていった。

……ていうかギーシュだった。

さっきの変質者はどうだか知らないが、女たらしのギーシュが夜中の女子寮に行くなんて目的は一つだろう。合意の元でなら構わないうがそうでないなら問題がある。いくらなんでも知り合いから性犯罪者を出したくはないし、一人目の不審者も気になる。そんな理由から俺はギーシュの後をつけ、夜中の女子寮に忍び込んだのだった。

ギーシュの後をつけてみたのはいいんだが、気づかれないように距離をとっていたこと、女子寮という土地勘の無い場所だったこともあって迷ってしまった。しばらくうろろうろしていた所、誰の部屋の前だかは知らないが、ドアに顔を近づけて何かしている人を見つけた。これで三人目の不審者だ。さすがに疲れてきたが、せめて顔だけでも覚えておこうと目をこらしてみた。

……ギーシュだった。

なんかもう、頭が痛くなってきたがとりあえず今のところギーシュは別に問題になるような行動を起こしている訳ではない。ただドアに耳をつけてみたり、隙間らしきところに目を近づけたりしているだけだ。倫理的にも法的にもアウトな気がするが、ギーシュというキャラ的にはセーフな気がする。つくづくイケメンは得だと思っただまあ、とりあえず妙な事をしでかさないかしばらく見張っていることにしよう。

……ふと思ったのだが、今の俺も不審者っぽいのではないだろうか。ギーシュは女たらしだと思われているから夜中の女子寮にいて

も笑い話ですみそうだが、俺の場合は「深夜の女子寮でギーシュを監視していた人」という、女好きにもギーシュのストーカーにも思えるシヤレにならない状況だしな。もうさっさとギーシュに「こんな夜中に女子寮の方に行くから、変なことやらかさないか一応ついてきたけど何もないみたいだしな。もう戻って寝るわ。おやすみ」みたいなこと言って帰ろう。一人目の不審者ももうどうでもいいや。なんとでもなるだろ。

そう考えた俺はギーシュの方へと歩み寄り、その肩をたたこうとした瞬間、

「きさまーッ！姫殿下にーッ！なにをしてるかーッ！」

何があつたのか知らないが、ギーシュはいきなりドアを開け放つたかと思うと中に飛び込んでいった。そして、中に居たサイト君となにやらとつくみあいの喧嘩をし始めた。それを見てここがルイズの部屋だつた事に気づいた俺は、ギーシュがルイズに気があつた事に驚きつつも部屋の中を見渡してみた。部屋の中には、ルイズ、サイト君、ギーシュ、そしてどっかで見たことあるような女性がいた。俺の記憶が間違っていないければその謎の女性はともよく我が国の王女、アンリエッタ姫殿下に似ているような……。わきに黒いローブが脱ぎ捨ててあることから考えても一人目の不審者は彼女だつたのだろう。

……ヤバイ。夜中の公爵家令嬢の部屋にお忍びでいらつしやつた王女様。……正直死亡フラグか陰謀の臭いしかない。さっさとUターンして部屋に戻ろう。

そんな事を考え始めた時、ギーシュの乱入でそちらに目を向けていたルイズと目が合ってしまった。

「……僕、ダンスのお稽古があるのでおうち帰ります。また明日、ごきげんよう」

そう言って後ろを向き、全速力で駆け出そうとした時、

「待ちなさいよ、今の話を聞いて帰れるわけないでしょ」

その後ろから声をかけられた。いったい話と言われてもなんのこ
とだかさっぱりだが、今更「実は聞いてないんですよ」なんて言っ
たって信じてはもらえないだろう。

つまりあれだっ、これはヤバイフラグが立った気がする。

十三話 出発の朝

「……おまえの……どこに……」

「……ああ……ヴェルダ……」

「……そんなの……馬で……」

ドスツッ！！

「痛ったあ！！」

隣にいたルイズに足を踏まれて目が覚めた。どうやら眠っていたらしい。こんな起こされ方をするのは二度目だ。三度目は無いように努力したい。

「もっと優しく起こしてくれてもバチは当たらないと思うぞ、ルイズ」

「姫様からの重大な任務の前に居眠りするような人に対する優しさは持ち合わせてなッ、キャアッ」

いきなり目の前からルイズがいなくなったので何事かと思えば大したことはなかった。なにやらバカでかいモグラに押し倒されて転んだだけのようだ。モグラと人間という前衛的なカップリングを見て官能的だなんだと言っている残念な二人組、まあサイト君とギーシュのことだが……の話からするとこのモグラはギーシュの使い魔で、ルイズがアンリエッタ姫から預かった「水のルビー」という指輪に反応しているらしい。主に似て欲望に正直な使い魔だと思う。

ちなみに俺の使い魔も今回は連れてきている。これといった特徴のないただのフクロウだが、まあ飛ぶ速さとかは結構なものなので全く役に立たないってこともないだろう。

結局昨晚、ルイズに呼び止められた後、ドア越しだったのもう一度詳しく話を聞きたいと言って、姫さんの頼み事について聞いたのだが、これがまあひどい話だった。

なんでも昔出したラブレターがかなり気合いの入ったできで、そんなモン見つかったら今度ゲルマニアとする政略結婚が破談になるかもしれないから、ちよつと内乱中のアルビオン行ってそこの王子様からそれを取り戻して来てくれ、つてな内容だった。

たかが一生徒が内乱中の国に行って生きて帰れると思ってるのかとか。政略結婚なんて血筋と立場が欲しいだけなんだから今更ラブレターごときで破談になるものなのか、とか。色々つつこみどころはあるような気はするがそこは悲しき宮仕え、王女様に意見するなんておっかない事ができるはずもなく、頼み事という命令を承る他に選択肢はなかった。

しかも深夜に相談に来て、明朝早くに出発します、という無茶ぶり。話を聞いてからすぐに遺書を書いて信頼できるメイドさんに渡したり、料理人をたたき起こしてから頭を下げて日持ちする食べ物を作ってもらったり、いざという時のために作成していたいくつかの魔法薬を大急ぎであるていど完成させたりしていたらもう出発時間ぎりぎり。寝てもしょうがないと思う。……どうでもいいがこの台詞もフーケの時、言った気がするな。

そんなことを考えているうちに種を越えた愛はクライマックスへと進んでいた。あまり優しい訳ではない俺でもさすがにルイズが可哀想になってきたので、そろそろ助けてやろうかと思ったとき、突風が吹きモグラ、名前はヴェルダンデだったか？を吹き飛ばした。そちらへ視線を向けてみると朝靄の中に人影が見えた。おそらく今の風はその人影の仕業だろう。こんな朝早くから一体、誰が何の目的でこんなところにいるのか知らないが、警戒するのにこしたこと

はない。そう思っていると一人の長身の男が朝靄の中から現れた。年の頃は三十前半といったところだろうか。服の上からでも鍛え上げているのがわかる肉体、鋭いまなざし、きれいに整えられた口ひげに気品漂う羽帽子。どこのどちら様だか知らないがおそらくここにいるメンバー全員で一斉にかかっても勝てるか怪しいものだろう。自分の力に絶対的な自信を持っていて、しかもそれは虚仮威しではない……そんな雰囲気はただよっている。やめときゃいいのに、先ほどヴェルダンデを吹き飛ばされたことに対して腹を立てたのか、ギーシュが彼へと声を荒げた。

「だ、誰だ貴様ツ！僕のヴェルダンデに何をするかあつ！」

「いや失礼。僕の婚約者が襲われていたようなのでね、少々手荒かとも思っただが対処させてもらった。ああ、自己紹介が遅れたね。僕はワルド、ありがたくも女王陛下の魔法衛士隊、グリフォン隊の隊長をさせて頂いているしがない子爵さ。さすがに今回の様な大きな任務に君たちだけ、というのは心許ないと姫殿下は思われてね。しかし、お忍びの任務である以上あまり大勢の兵士を付けるわけにもいかない、そこで僕が指名されたってわけさ。よろしく頼むよ、君達。何、大した事はない。フーケを捕まえた勇敢な君達に風のスクウェアである僕が付いているんだ。何も恐れることはないよ」

そう言つと、そのワルドさんは明るく笑った。

……内乱中の国へ極秘任務、強いイケメンが仲間に加わった、しかもそいつは話からするとあのルイズの婚約者。魔法衛士隊の隊長と聞いてギーシュは萎縮してるし、サイト君は嫉妬か何かで不機嫌そう。

出発前からこれだけ不安だらけの旅もそうそうありはしないだろうなあ、そう思いながら俺は寝ぼけ眼をこすった。

十四話 戦いはワルドの仕事（前書き）

お気に入り登録件数が気付けば百件を越えました。これも読んでくださっている方々のおかげです。ありがとうございます。これから頑張っていくことと思いますのでよろしく願います。

十四話 戦いはワルドの仕事

「おい、ギーシュ。よくバラくわえてるけどそれって美味しいの？一本くれ」

「これは僕の美しさを引き立てるための物だよ、食用じゃない。…さつきから変な事ばかり言ってるけど大丈夫かい？ずいぶん疲れてるように見えるけど」

疲れるのも当たり前だ。かれこれ半日以上馬に乗っているのだから。それだけならともかく前方には、新キャラのワルドさんが余裕しゃくしゃくのうえ、微妙にルイズといちやつきながらグリフォンに乗っているのが見えるし、さらにそれを見てサイト君の機嫌もどんどん悪くなっている。正直意味のないことでもぐだぐだとしゃべってないとやってられない。

「すまないがもう少し急いでくれないか！あまりに遅いと置いていってしまつよ！」

こっちの気も知らずにそうワルドさん…もう呼び捨てでいいや、ワルドが怒鳴った。馬とグリフォンじゃ地力が違つてことをあの人がわかってるんだろうか。あんまり飛ばすんで二回も馬を変えているつてのに、こっちの苦労もわかってほしいもんだ。

「……やってらんねえ」

そうつぶやいた俺とサイト君は、ぐつたりと馬の首にもたれかかった。

あれからまたずいぶんと馬を走らせ、俺達はアルビオンへの港町、ラ・ロシエールの入り口付近に着いた。もうあたりはすっかり暗くなってしまうている。

「港町目指してるんじゃないか？さっきから山登ってるような気がするんだけど」

「ああ、サイト君は知らないんだっけか？あー、まあ行ってみりゃわかるよ」

だるすぎて説明するのもめんどくさい。まあ、もう少しで着くらしいので、気分的には幾分楽になってきたが。

そんな事を虚ろな目をして、馬にもたれかかりながら考えていたところ何故か目の前に松明が落ちてきた。急に火を見たからだろう馬が驚き、暴れたせいで振り落とされてしまった。

「敵襲だー!!」

そのワルドの一声を合図にしたかのように松明と矢が大量に飛んできた。疲れて落馬したところへの不意打ちの急襲、情けない話だが俺にはなんの反応もできなかった。それに俺が頑張る必要はないだろう。なにせ、

「大丈夫だったかい？」

こちらには風のスクウェアがいるんだからな。ワルドが杖を振ると突風が吹き、矢も松明も吹き飛ばしてしまった。グリフォンに乗って体力を温存していたのだし、これくらいはやってくれないとな。

それにどうやら頼もしい助っ人も来たようだ。

「う、うわあああ。竜だ、くそがっ！竜がいるなんて聞いてねえぞ！」

矢が飛んできたがけの上の方からそんな悲鳴が聞こえると共に、人が転がり落ちてきた。上を見上げればそこには二つの月を背景にタバサの使い魔であるシルフィードがいた。上にはタバサとキュルケが乗っているようだ。夜目のきく使い魔であるフクロウと感覚の共有をしていたので早めに気づいた俺はともかく、それ以外の人にとっては、ずいぶんとかっこいい登場だと感じたことだろう。全くタバサもキュルケも美人で優秀で登場のタイミングまでも良いとは…… どれか一つくらい俺に分けて欲しいもんだ。

それにしても『聞いてねえぞ』ねえ……。どう考えても嫌な想像しかできない上に、容疑者も一人しか思い浮かばない。しかし、証拠はもちろん、動機もわからんから考えるだけ無駄だしなあ。まあ、そんな難しいこと考えるのはまた今度として今は……

「タバ公、俺もそつちに乗せてもらえない？」

そう言っただけ俺は頭を下げた。

ラ・ロシエールに付いた俺達はまず宿をとった。今はアルピオン行きの船があるかどうか聞きに行ったワルド待ちだ。

それにしても疲れた。竜やグリフォンで来た奴等はそら疲れてないだろうし、ギーシユは軍人の家系、サイト君はあれで結構体力も根性もあるからな。ほんとなんで俺連れてきたんだか。きつとあの姫様には人を見る目が無い。

まずい、本格的にくらくらしてきた。先に部屋戻って休ませて
もらおう。このままじゃ何か起きたとき、足手まとい以下の存在に
なるのは間違いないしな。

「皆、悪いんだけど、疲れたんで先に部屋に行って休んでるわ。な
にかあったら起こしてくれ」

さすがにこれからすぐに出発することもないだろう。俺は頼み事
に対する了承の返事をもらうつと部屋へ向かった。

十四話 戦いはワルドの仕事（後書き）

あまり何度も言うのもカッコ悪いとは思いますが、一言でいいので感想をお願いします。

文の量、レベル共に低いことは自覚しているのでそついったことに対する指摘、指導等をしていただけるとありがたいです。

十五話 アルピオンへ

「……やべえ」

起きてみたら何故か夜だった。まさかとは思つがまる一日寝ていたんだろうか、起こしてくれてもよかつたんじゃないかと思うんだが。下の食堂で騒いでいたギーシュにそう言ってみたところ、

「いや、一応朝起こそうとはしたんだよ。でもきみ、用もないのに起こしたんだつたらはっ倒すぞ、ってすごい目付きで言ってきたからさ、出発は明日だって話だし寝かせておいてあげようと思ったんだよ」

……それはどう考えても俺が悪いな。

「……悪いな、親切で起こしてくれたのに気を悪くさせるようなことしちまって。ごめん」

「はっはっは、別に気にしてないさ。それにしても普段ひょうひょうとしていきみでもあんな顔をするんだな、少しばかり驚いたよ」

……あれ？もしかしてギーシュって良い奴なのか？女好きという評判を聞いて偏見を持っていたのかもしれないな。

とりあえず俺は酒を片手に、俺が寝ている間に何かあったかどうか聞いてみた。が、サイト君とワルドが決闘まがいのことをして、サイト君が負けたくらいで、他にはこれといって特に何もなかったようだ。まあ、決闘そのものは見ていないし決闘の理由も知らないらしいが。大方ルイズの取り合いとかそんな理由だろう、アホくさい。

それからしばらくキュルケとタバサも含めた四人で飲んでいたら、武装した男達が玄関を蹴破るような勢いでなだれ込んできた。

「隠れて!」

とつさにキュルケが、俺達で使っていたテーブルの脚を折り、それを立てて盾のようにした。これで油断さえしなければすぐにやられる、ってことはないだろう。

……そこからが長かった。ワールドが加勢に来てくれたのはよかったんだが相手も手練れの傭兵かなにからしくこちらの魔法の射程を見極めると、その外から矢を射かけてくるといふ嫌らしい戦法を使ってきた。あげくのはてにバカでかいゴーレムは現れるわ、上の方から破壊音はするわ……。破壊音がしてすぐ上から駆け降りてきたルイズとサイト君が言うにはこの襲撃にはフーケが参加しているとのこと。しかもその近くには謎の仮面の男もいたらしい。まったく冗談じゃない。こんな場面に出てくる怪しい男は頭が切れる実力者だと相場は決まっている。そんな奴が敵側にいるなんて面倒な予感しかないぞ。

「これではらちが開かないな……」

そうワールドがつぶやいた。そう思ってるのなら、お強い風のスクウェア様らしくなんとからちを開けてもらいたいもんだけどな。

しかし、どうしたもんかね、こちらは全部で七人だ。傭兵を返り討ちにするには少なすぎるし、なんとか逃げだしてあいつらを撒きちやっちやと船に乗ってアルビオンへ行くには多すぎる。どこかで見つかるか、遅れた奴が捕まるのが関の山だろう。すると一番ベターなのは足止めとアルビオン行きの一組に分かれることなんだが……どうもあの「聞いてねえぞ」の一言が引っかかる。……しかたな

い、こっしよっ。

「みんな聞いてくれ」

とりあえずそう言ってみんなの意識をこちらに向けさせると、俺は自分の分散するべきだという考えを伝えた。

「なるほど、確かにそうだね。僕もそう提案しようと思っていたところなんだよ。では……」

「当たり前のことですがワールド子爵、ルイズ、サイト君はアルビオン行きでしょう。逆に他国の貴族であるタバサとキュルケは足止めの方がいいと思います。シルフィードがいますし、二人ともトライアングルなのでなりふり構わなければ逃げることで事態はそれほど難しくはいはずです。あとは俺とギーシュですが、治癒のできる水メイズである俺がアルビオンへ、ワルクューレなど多数と戦うことができる魔法が得意なギーシュが足止め、というのが妥当だと思います。いかがでしょうか、子爵？」

この俺の考え多少ワールドに反対されたが、最終的には採用された。ワールドがしゃべろうとした所を遮って自分の意見を話したのは失礼だったと思うが、彼にまかせると自分とルイズだけでアルビオンに行くといいだしそうだったので仕方がないだろう。あと、どうもワールドが怪しく感じるので行動を共にしておきたいというのも理由の一つだ。それに……ラ・ロシエールに着く前に待ち伏せをして襲い、着いてからも傭兵を雇い襲撃させる、そんなことをするやつがこれで手じまいつてのは考えにくい。おそらく船までの道にも追っ手が潜んでいるはずだ。俺たちが二組に別れることまで読んでいたならそちらには手練れの者がいる可能性が高い。もしかしたらルイズ達が言っていた仮面の男が直々にかかってくるかもしれない。そ

れが俺の狙いだ。とりあえず見てみないことには対策が立てられないからな、ワルドがこちらの味方であるうちにそいつに会っておきたい。まあ、これがこんな分け方にした本当の理由だ。

「じゃあ僕たちは裏口から棧橋を目指すから、奴等の注意を引き付けてくれ。じゃあ頼んだよ」

ワルドはキュルケ達にそう言うのと俺達に対しても気を付けるように言い、ルイズをかばいながら風のように先に行ってしまった。

・・・それにしてもラ・ロシエールに来るまでといい、ルイズ偏重主義もここまでくると立派なもんだ。つーかあいつフェミニスト通り越してただのロリコンなんじゃないのか？なんか初めて会った時からルイズを見る目が変だった気がするなあ。

まあ、それはともかく俺とサイト君はタバサのフォーローによって、矢を防ぎながらそれに付いていった。

十六話 味方の最大戦力がなんかもう色々と怪しい件について

「面倒なことになっちまったなあ、おい」

裏口から店を出たとたん爆発音が聞こえてきた。おそらくはキユルケの仕業であろう、それを聞いて俺はそつつぶやいた。

「では行くぞ、諸君。棧橋はこつちだ」

そう言ったワールドに続き俺達は棧橋へと向かった。ワールドがルイズを護るように先頭を歩き、ルイズ、俺、サイト君という順で行動している。まあ、最前列と最後尾は手練れがやるほうが安全だろうから、妥当な順番だろう。

あれから俺達は月明かりをたよりに町を駆け抜け、階段を駆け上がり、一本の大樹の元へとたどりついた。暗がりできちんとしたサイズはわからないが大きめのビルくらいはあるだろうか。もはや逆に作り物にしか見えないようなその樹の枝にはそれぞれ船がぶら下がっている。これがラ・ロシエールが海沿いに無いにも関わらず港町と呼ばれている理由、空を飛ぶ船の停留所、いわゆる棧橋だ。後は目的地行きの船の所まで行くだけ……と言えば楽に聞こえるがぼろい木製の階段を登らなくてはいけないので、ここまで走り続けた身としてはだるいことこの上ない。

「ルイズー、疲れたんでおぶってくれ。船まででいいし、後でお菓子買ってあげるから」

「死んだら？」

虫でも見るような冷たい目でそう返すとルイズは、樹を見て惚けていたサイト君に声をかけ、目当ての階段を見つけたらしいワルドの後を追って行ってしまった。全く、ああいう態度を取るの俺が被虐趣味に目覚めてからにして欲しい。今されたってうれしくもなんともない。

俺はため息を一つ付くと、サイト君と共に階段を登り始めた。

階段の隙間からラ・ロシエールの明かりが見える。もう結構な高さまで登ってきたようだ。それにしてもキュルケ達は大丈夫だろうか、無事だと良いんだけど。

「アシル、もう結構登ってきたと思うんだけどまだ着かないのか？こんなとこきたの初めてだから、どれくらい登るのかわからねえんだけど。いいかげん疲れちまってるさ」

「情けねえ事言ってるなよ、相棒。色々あって疲れてんのはわかるけどよ、貴族の娘ツ子でさえ弱音吐いてねえんだ。ここが男の見せ所って奴やつだと思っぜ。まあ、俺剣だから実は疲れたとかよくわからねーんだけどさ」

サイト君からの質問に答えようと階段を登りながらも後ろを振り返ると、サイト君の後方の暗がりの中に人影が見えた。それにしては忍び足でもしているんだか、足音が聞こえない。古い木製の階段なので普通に登ればぎしぎしなるはずなんだが。

……こんな夜更け、それに町で騒ぎが起きてるのに忍び足で棧橋に来る用事があるなんて考えにくい。傭兵が追ってきたのだろうか、と俺が思った瞬間壁の隙間から刺した月明かりがそいつの顔を、仮面を照らした。

「サイト君！！後ろ！！」

「えっ!?!」

俺の声を聞き、サイト君が後ろを振り向くと同時に、その仮面の男は飛び上がり、サイト君と俺を飛び越えたとルイズの背後に降り立った。そして悲鳴をあげるルイズを気にもせず担ぎ上げた。

「てめえはさっきの!?!」

サイト君の怒声からするに、やはりこいつがフーケと共にいた仮面の男のようだ。ルイズを助けようとデルフを振り上げたはいいものの、きちんと剣術を習っている訳ではないサイト君では、手元が狂ってルイズに怪我を負わせてしまう可能性が高い上に、仮面の男がルイズを盾にしないと限らない。それがわかつているのか、サイト君も手が出せないように振り上げたデルフを振り下ろす事に躊躇した。その隙についてルイズを抱えたまま飛び降りようとした男は、ワルドが杖を振ることで生まれた風の塊をくらい壁にたたきつけられたが、その拍子にルイズが男の手から離れ、落ちてしまった。

「チツ!?!」

ルイズはフライが使えない。このままではほぼ間違いなく死んでしまう……と慌てて俺も飛び降りてルイズを捕まえ、レビティーションか何かで助けようと思ったが、すでにワルドがやっていた。なんか見せ場が取られたようで少し悔しいがそんなことを言っている場合じゃない。ルイズが助かって、襲撃してきた仮面の男はまだ健在なのだから。

そちらではサイト君がそいつと対峙していた。なんだかんだ言ってもメイジ相手の戦いはギーシュとフーケしか経験が無いサイト

君では、相手が何してくるかわからないらしく攻めあぐねている。それを見た仮面の男は杖を向け呪文を唱え始めた。それにつれ周りの空気が冷え始めた。うっすらとだが、それらは帯電しているように見える。確か風の高位呪文にこんなのがあったような……！！俺の予想があっているのなら、これはまずいっ……！！

「ライトニング・クラウド！！」

「ウォーター・シールドッ！！」

破裂音と共に仮面の男の周りの空気が震え、サイト君向けて稲妻が走った。俺がサイト君の前に大急ぎで張った水の盾をたやすく貫き、それはサイト君に直撃した。

「が、ああああああああっ！！」

一応デルフで防いでいたようだったが、通電したのだろう。断末魔のようなすすまじい叫び声と共にサイト君が倒れた。彼の左腕は焼けただれ、肉の焼けるような嫌な臭いが俺の方にまで漂ってくる。痛み of せいか気を失ってしまったようだ。サイト君を無力化することに成功したからか、仮面の男が今度は俺の方へとその仮面を被った顔を向けた。

こんな足場の悪いところで逃げ切れるとは思えない、勝てはしないまでもワルドが戻ってくるかサイト君が目覚めますまで時間を稼ぐしかない……。そう俺が気を引き締めた時、ルイズのサイト君を呼ぶ叫び声と共に、突風が吹き抜けるような感じがした。見れば仮面の男は吹き飛ばされ、その拍子に階段を踏み外し地面へと落下していった。おそらくルイズを助けて戻ってきたワルドがエア・ハンマーか何かの呪文を仮面の男に向けて放ったんだろう。

……さすがワルド子爵、風のスクウェア様々だ。俺の後方にいた

ということとは仮面の男にはワルドのことが見えていたはず、さらにライトニング・クラウドが使えるということとはあいつは風のスクウエア、低くてもトライアングルのはずだ。そしてルイズをさらうためかどうか知らんが、あれだけ傭兵がいたにも関わらず誰も連れずに一人で襲撃してきた。つまりそれだけ自分の実力に自信を持ち戦闘慣れもしていたということだ。それにも関わらずそんな奴をエア・ハンマー一発で倒してしまうとはな。……それはそれは、不思議な事もあるもんだ。

サイト君に駆け寄り無事を確認する二人と共に今の襲撃者について話しながら、俺はワルド子爵に対する警戒を深めるのだった。

十七話 倉庫でぐだぐだしゃべるだけの回（前書き）

一月以上も間を開けてしまい、すいません。

なんだかんだと忙しい事もあり、以前言った一、二週間に一話と言うのは難しいかもしれませんが、今後ともおつきあいくださればありがたいです。

十七話 倉庫でぐだぐだしゃべるだけの回

「で？ あんた何してんの」

「昼寝に決まってるでしょうよ、ルイズさん。他になにしようとしてるように見えるんだよ？」

「……そう、昼寝。ねえアシル、あなた今の私たちの状況わかってる？ たぶんそんなことしてる場合じゃないんじゃないかなあ、と私は思っただけど」

「そんなくらいわかってるよ。空賊に監禁されてんだろ。ははっ、やべえなコレ、俺ら殺されるんじゃないかね？ どうする？」

「なら少しは怖がったり焦ったりしなさいよ！！ 普段通りの気の抜けた顔して！！」

「ばっかおめえ、こちとら怖くて今にも泣いちゃいそうなのを必死で我慢してるんだぞ？ だからルイズ、おまえの薄っぺらい胸で我慢してやるから抱きしめて安心させてくれ」

「うるさいっ！！」

「いたあっ！！」

まあ……そんなわけで僕たち絶賛監禁中です。

こんなことになるまでの経過は実は大したことなかったりする。

あの後アルビオン行き船までたどり着いた俺達は、今の状況では空を飛ぶためのエネルギー源である風石が足りないから、とアルビオン行きを拒む船長さんを足りない分は風のメイジであるワルドがなんとかすると説得し、やつのことでアルビオンへと出発した。

ワルドとルイズは今後の相談、サイト君は疲れたのか眠ってしまった、俺はサイト君の焼けただれた左腕の治療。そうやってそれぞれ時間を潰し、空に浮かぶアルビオン大陸が視認できると同時に空賊の襲撃を受けた。あちらの船の方がこちらよりも大きい上に、武装もあちらの方が立派、やむなく停船命令に従った。それによってあちらさん達がこちらに乗り込んできたが、戦力になりそうなワルドは船を動かすために頑張ったので精神力が打ち止めで役立たず、サイト君は戦おうとはしていたが左腕が完治していない上、あまりに多勢に無勢。そのうえ下手をすればルイズあたりを人質にとられて面倒なことになる可能性もある。そうワルドに説得されて諦めた。

そんなこんなで積荷の硫黄と身代金目的か貴族である俺達は哀れ空賊の手の中へ……ってな訳である。メイジ相手に当たり前の事だが杖や剣はとりあげられてしまったので、打つ手も無い。

俺達を閉じこめている場所は普段倉庫にでも使っているのか砲弾や火薬といった危険物から、穀物の類が入っているであろう布袋まで様々な物が置いてある。これらを使えばいろいろできそうなこともあるが……まあそれは最終手段だな。

「それにしても悪いね、サイト君。中途半端な治療しかできなくて杖が無いから治癒をかけてあげるのはできないけど、痛み止めの薬

は持つてきてあるから飲みなよ、まだ結構痛むでしょ？」

俺のメイジとしての腕が未熟というのもあるが、やけど自体がかなり重度の物だったこともあり、見た目はずいぶんと元に戻ったが、まだ動かすと引きつったような痛みが走るはずだ。

「いや、でもずいぶんと楽にはなったよ。ありがとな、アシル。いくらかは痛むけど戦うのには問題ない程度だし、そろそろ脱出のためにも動き出そうぜ。まず見張りの男をなんとかして倒すのが一番か？」

「はあ……使い魔君、君は少し血の気が多すぎるよ。脱出するといつたってここは空の上だよ？その後一体どうするつもりなんだい？見張りを倒すというののも後の事を考えていなさすぎだ。一度こちらが手を出せばあちらも暴力に訴えてくるだろうが、それはどうするんだい？ 僕たち四人で空賊達全員を相手どるのは現実的ではないよ」

「まあ、そんな感じだしさ、少し休みなよ。寝て起きれば腕の痛みもいくらか引いてるさ。おっとそれはそうとワルドさんにお礼を言っておきたかった事があるのですよ。ラ・ロシエールへの道中という棧橋での仮面の男といいご迷惑をおかけしてすいません。お恥ずかしい話なのですが、実をいうと内乱中の国へ行くというのに準備を怠ってしまい……飲み水と治療用の薬、あと痛み止め程度しか持つてきていないものでして。こんなことになるのなら毒や麻痺薬なども持つてくるべきでした。考えが足りず、申し訳ない」

そう言っただけはあぐらをかいたままとはいえ頭を下げた。気休め程度にしかならないだろうが、言っておくに超したことはないだろう。まあ、この台詞が意味を持つようなことにならないのがなによ

りだけどなあ。

「いや、気にすることはないよ。元々僕は護衛として君達に同行しているんだ。むしろ僕がついていながらこんな事に状況に陥ってしまったことをこっちが謝りたいくらいさ」

するとワルドはそう返してきた。ありがたいことだ。元々罪悪感なんか砂粒ほども感じちゃいなかったが、それはおくびにださず楽になったような表情で、ワルドと今後の事について話し合う。するとそれを横で見ていたルイズが口を出してきた。

「で？」

「で？ って……なんだよトイレか？ 一人じゃ怖くて行けんのか？」

「ごまかすんじゃ無いわよ、アシル。あんたがそれだけ落ち着いてるってことは何か考えがあるんでしょ。それが脱出の方法なのか、私達が危害を加えられる事はないっていう保証なのかは知らないけど。さつさと言いなさいよ。姫様からの任務を忘れた訳じゃないでしょうね？ 私達には、こんな所ではーっとしてる暇なんてないのよー！」

「おいおい、これだから……察しのいい女はもてんらしいぞ、ルイズ。いい女ってのは男が浮気やらへまやらをやらかしても、気づかないふりをする美人でスタイルと性格の良い若いネエちゃんの事を言うんだ、ってオスマン学院長が言ってたぞ」

「次くだらない冗談でごまかそうとしたら、そこの樽に入ってる火薬をあんたの口に詰め込むわよ」

「おつかねえな、おい。……一応考えはあるがまだ証拠も根拠も薄弱でな、人に話すようなもんじゃねえんだ。どっちかって都合の良い事を考えてそれに無理矢理、それがありえるかもしれない根拠を付け足したようなもんだからな。これを話して下手に希望を持たせるつてのもなあ、外れてたら残酷だからな」

「それでも聞かないよりはましよ。私達はこんなところで座っている場合じゃない、でも大きな行動は起こせないんだから、せめて頭を使うしかないじゃない」

「……ご高説どうも。……しょうがねえな、いいか聞け。俺の考えが合っているのなら、そのうち空賊さんの方から、『こんな時期にトリステイン貴族がアルビオンに何の用だ』って聞かれるはずだ。その質問に対してルイズ、おまえらしく答える。もし上手くいけば次は『アルビオンの貴族派か王党派のどちらの人間だ』って聞かれる。これにもルイズ、おまえの好きなように答える。これ以上は言えない、なんでかもだ。言わない方がいいから言わないんだ。それにそんなことにならない可能性の方がはるかに高いから、あんまり待すんなよ。わかったらもう休め。俺ももういいかげん疲れたんで寝てーんだよ」

俺はそう言い終わると、自分の腕を枕にごろりと横になった。くだらない事言ってしまった。こんな考えが合ってる訳がないつてのに、世の中つて奴はそんなに都合良くできてはいないだろう。

結局、具体的な説明をしていない俺に対してルイズが文句を言うつと、口を開こうとしたときだった。

ノックもなしに空賊だろう、太った男が入ってくると近くにいたルイズにこう質問した。

「おい、おまえらトリスティン貴族が、わざわざこんな時にアルビオンに何の用があって来やがった？」

……まさかとは思うが、案外世の中という奴は都合良くできてるものなのだろうか？

十七話 倉庫でぐだぐだしゃべるだけの回（後書き）

自分が書いた物を完全に客観的な目で見るというのも難しいので、感想など付けていただけるとうれしいです。

感想を頂けるといふのは純粹にうれしいですし、誰かが読んでくれている、というわかりやすい目安にもなるので。

一言二言でいいのでお願いします。

十八話 怒るとすぐ火薬片手に向かってくるのはヒロインとしてどうだろうか

お気に入り登録が二百件を越えました。自分の書いた小説を気に入った、としてくれる方が二百人もいるというのは非常にうれしいです。今後ともよろしくお願いします。

十八話 怒るとすぐ火薬片手に向かってくるのはヒロインとしてどうだろうか

「自分で言っというて何だけど……おまえすごいな」

「当たり前よ、あんたと一緒にしないでよね！ 私には貴族としての誇りがあるの。薄汚い反乱軍に頭を下げるくらいなら死んだ方がましよ」

そう言つとルイズはフン、と鼻で息を吐いた。ワルドはいつも通りの余裕面だが、サイト君はあきれ果てたのか、口をポカンと開けて固まっている。

正直俺も何もわかっていないだろうルイズが、ここまで毅然とした態度をとれたことには感心を通り越して軽くあきれれている。

なにせ先ほど来た空賊に、この船は反乱軍の協力者であり王党派の連中を捕まえるように貴族派から言われている。おまえは貴族派と王党派のどちらだ？と聞かれ、堂々と

「王党派へのトリステインからの大使よ！」

と言つたのだ。わざわざ貴族派なら港にまで送ってくれると言ってきたにも関わらず。正直この空賊騒ぎの裏がなんとなく推測できていなければ俺もサイト君と似た反応をしていただろう。肝が据わつてんのか頭がカラなのか知らないが、正直すごいと思う。空賊さんも呆れた様な顔をして、頭にこの事を報告してくると、行つてしまった。ご丁寧にも王党派だつてのならただじゃすまない、と言いつ残して。

「こ……の……バカ！ おまえはTPOってモンを知らないのかよ！ 正直なのも時と場合を選べよ！ どうなるかわかつてんのか！」

「テツ……テーピーオー？ 何よそれ、ご主人様にわかる言葉でしゃべりなさい！ だいたいね、あんなやつらに下げるほど私の頭は軽くないの。ホラッ、アシル。あんたの言うようにしてあげたんだからさつさとあんたの考えを説明して、この愚かな使い魔に私の正しさを教えてあげなさい！」

お互いの胸ぐらをつかみ合って言い争いを始めた二人を、動物園のサルを眺めるような気分で見えていたところ、こっちに飛び火してしまった。正直冷静になってさつきの空賊さんの言っていた事を考えれば、誰でもその変な部分には気づくと思うし、いちいち説明するのめんどくさいんだが。そんな俺の嫌そうな顔を見たのか、ルイズはつかつかと火薬の入っている樽へと歩み寄った。

「喜んで説明させて頂きましょう、美しいお嬢さん。ほら、あなたの白魚のような手に火薬は似合わない、そして俺の口にもきつと合わない。だからほら、それを樽へと戻して。……ようし、たくちよつと嫌そうな顔をしたくらいで、暴力に頼ろうとするんじゃないよ。いい貴族つてのは男が嫌そうな顔やらへまやらをしても、火薬片手にこちらを睨んだりしない美人でスタイルと性格の良い若いネエちゃん……そうですねこの台詞二回目でした。待って、ルイズ、火薬はともかく砲弾はちよつと口には入らない。ほら冗談だから、悪かったから。……はあ、まあ茶番は終わりにするとしてだな、冷静になって考えればルイズとサイト君にもすぐわかるよ。面倒だから一番わかりやすい矛盾点を言うとな、さつきの空賊さんだよ。どこの世界に王党派なのか貴族派なのか調べたい奴相手にわざわざ貴族派なら何もしませんよ、王党派なら痛い目に遭いますけどね、つて質問する奴がいるよ。そう聞かれたら仮に王党派でも貴族派だ、つて答えることくらいわかるだろ。あれじゃあ、取り調べになつてない。その一点だけ見てもこの空賊騒ぎはおかしい。おそろくさつ

きのルイズの対応が一番だと思うよ。たぶんこの船は王党派だ」

王党派でも貴族派って答えるだろう、のあたりで得意げな顔になったルイズに一発かましたくなつたが、間違いなくやり返されるのでやめて置いた。できれば一生、火薬なんかを口にしたいくはないからな。

後今言った理由にプラスするとたかが空賊が交易に使われる輸送船よりもでかく、武装のしっかりした船を持っていること。貴族の子供二人に大人の貴族一人、それに平民らしき男一人、って組み合わせなら平民らしき男は貴族の子供を護るための傭兵か何か、と見るのが筋だろう。……まあ、サイト君自体まだ若いので傭兵とまではいなくても、デルフを背負っていた以上、戦力として連れていくことくらいは推測できたはずだ。それなのに殺さず武器を取り上げるだけだった。身代金目的に貴族をさらったのならサイト君は殺されているはずだ。平民からとれる身代金など微々たるものである以上。まあ、これらの考えは後付になってしまふし、この船が空賊の物ではないとするには一つ一つの根拠が薄く、俺の勘違いや空賊に別の思惑があつた可能性も高いが、先ほどの空賊の質問とあわせて考えるとがぜん意味合いを持つてくる。

貴族派である方が圧倒的に得である状況下で貴族派が王党派か聞いてきたことからおそらくこの船は王党派。空賊の物にしては船が大きく武装も立派なのは王党派の軍艦だから。サイト君を殺さなかつたのは貴族をさらつたのが身代金目的ではないから。そう考えればまあ、筋は通るだろう。ということはこの船の頭はアルビオン軍のそこそこお偉いさん、ってことだろう。

そこまで考えたとき扉が開き、先ほど頭に伝えてくる、と言つて出て行つた空賊が入ってきて、こつ言つた。

「頭が呼びだ。全員ついてこい」

ああ、答え合わせと参りますか。

十九話 対、ワールド（前書き）

気づけばPVが二十万を超えていました。うれしいものですね、ありがとうございます。

今後も読んでくださるとありがたいです。

できれば感想などもつけてくださると励みになるのでお願いします。

十九話 対、ワルド

いくつかの通路を抜け、階段を上がり船長室とおぼしき部屋へ俺達は連れてこられた。部屋の中央には大きなテーブルが鎮座しており、そこに一人の男が座っている。

薄汚れたシャツに赤く日焼けした肌、ぼさぼさとのびた黒髪を赤いバンダナでまとめ、左目には眼帯をしている。いかにも荒くれ、といった雰囲気をもったその空賊然とした男は、部屋に入ってきた俺達を残った右目でおもしろそうに見つめてきた。無精ひげで隠れた口元も愉快げにゆるみ、手にはメイジなのだろう、頭に水晶がついた杖を持っている。

周りには武装した多くの空賊がいて、そいつらも同じようににやにやとこちらを見つめていた。入ってきた扉の前には、俺達をここに連れてきた男がそこをふさぐように立っている。つまり、反抗しても力づくで抑えることができ、なおかつ逃げることも許さない、暗にそう言っているということだろう。

「頭、連れてきやした」

「ああ……さてと、嬢ちゃん。呼んだのはほかでもねえ、聞きてえことがあんだ。まあ、まずは名乗りな」

「人に名前を尋ねる時は、まず自分から名乗るのが筋でしょう。そうでなくても私達に対して大使としての扱いをしていない以上、あんた達なんかの名乗るつもりはないわ」

頭の問いを無視しルイズがそう答えると、頭は目を少し見開いた後笑い出した。

「く、くくつ。いいな、気が強い女は嫌いじゃねえ。ただな、口の利き方には気をつけな。お国じゃあ俺より嬢ちゃんの方が偉くても、空の上ではそうもいかねえ」

そう言つと頭は立ち上がり、ルイズの方へ近づいて来た。

「もう一度聞け、大使の嬢ちゃん。お前らは貴族派か、それとも王党派か？ 貴族派ってんなら俺達の仲間みたいなもんだ、丁重にあつかつてやらあ。しかし、王党派だつてのなら大変だ。俺達は手を汚さなきゃならねえし、嬢ちゃん達は少しばかり痛いのを我慢しなきゃならねえことになる。なあ、どっちだ？」

「王党派だと言っているでしょう。あんた達みたいなのに頭下げて嘘をつくほど落ちぶれてはいないわ」

そこまで言つた時、焦つたサイト君がルイズの口をふさごうとした。しかし、近づいてルイズがかすかに震えていることに気づいたのだから、複雑そうな顔をするとも何も言わず、ただルイズの横に立つた。

頭はルイズの答えを聞くと、ますます口元の笑みを深め、持っていた杖をルイズの首筋にあてた。

「そうかい、なら貴族派につく気はねえか？ あいつらはメイジをほしがっているからな、いくらか協力すればたんまり金ももらえる。なあ、王党派の嬢ちゃん、これが最後の質問だ。貴族派について生きるか、王党派のまま死ぬか……よく考えて答えな。どちらにするんだ？」

「だから何回も……」

「王党派だつて言つてるだろ」

ルイズの言葉を遮り、頭の質問にサイト君がそう返した。ルイズと話していたのに横から口を挟まれた事に気を悪くしたのか頭はサイト君を威圧的な目で見ると言った。

「おめえは？」

「使い魔だよ。あんたらの言う嬢ちゃんの名」

「そうかい……俺もやきがまわつたもんだな、使い魔にまで口答えされるとは。それにしてもうちの国の貴族よりトリスティンの使い魔の方が誇り高い、つてのはなあ……全く情けなくて泣けてくるぜ。ああ、そついやあ嬢ちゃん、人に名前を聞くときにはまず自分からだ、だつたな。じゃあ、まずは私から名乗らせてもらおう」

そついうと頭はバンダナをはずし、眼帯をはずし、つけひげだったのかひげをむしり取り、かつらだったのだから、ぼさぼさとした黒髪を帽子を脱ぐようにはずした。その下から現れたのは先ほどまでとは似ても似つかない精悍な顔をした金髪の青年だった。

「アルビオン王国皇子、ウェールズ・テューダーだ。さあ、これで名前を教えて頂けるかな、誇り高き大使のお嬢さん？」

そこからの展開は俺は詳しくは知らない。ウェールズ皇子が本物かどうか確認するためにアンリエッタ姫殿下から預かってきた「水のルビー」と、彼の持っていた「風のルビー」とかいうらしい指輪

を近づけた。するとその二つの間に虹の橋がかかったのだが、それが皇子である証明らしい。正直、指輪なんて盗んだりすりかえたりすることもできそうなものなので身分証明としての力はそれほどでもないような気がするがそれを言っていてはしょうがない、とそこは納得した。

ちなみに空賊のふりをしていたのは敵の補給路を断つためだったそうだが、そんな危険な事を皇子様がやってたつても納得いかない。正直こいつ偽物じゃないのかなあ、とは思うが外国の王族の顔なんて知らないからな、信じるしかないだろう。まあ、頭の隅にでも疑いは持ち続けておくつもりだが。

そして俺達の目的である姫様の書いたラブレターは今手元にならないということ、それがあるニューカッスルの城まで取りに行くこととなった。

そして俺達は王党派のみが知っているらしい鍾乳洞のような抜け道を通り、貴族派たちの軍艦の目から逃れながらもニューカッスルの城までたどり着いた。ルイズ達は皇子の部屋へ手紙を取りに行っていたが、俺は行かなかった。

ウエールズ皇子も恋人へ伝えたいことくらいあるだろう。なら姫殿下の古くからの友人であるルイズに伝言を頼むくらいのはすはす、それを邪魔するほど俺は野暮ではないつもりだったからな。ワルドとサイト君はついて行ったが、それは仕事だし仕方がないだろう。まあ正直、純粹にあの二人が、空気読めてないだけのような気もするが。

その後城でパーティーが開かれた。なにやら、貴族派の連中が明日の正午に攻城を開始すると伝えてきたらしく、それにまず間違いないで耐えられないので最後の思い出作りの様な感じで騒ぎたいのだろう。まさに、後の晚餐というやつだなあ、と思った。

ルイズ達はそれに出るようだが、俺はこちらも欠席させてもらった。滅びる国の貴族なんかと親しくする必要がない以上、大勢で騒ぐのがあまり好きではない俺が出る理由はないからだ。さすがに、

ウエールズ皇子とその父であるジェームズ一世にはあいさつと、体調が優れないのでパーティーを欠席する旨は伝えたが、その程度だった。

そうして、用意された部屋で休んでいた所、ノックの音と共にワルドが入ってきた。

「休んでいるところすまないが、きみに言っておかなければならぬいことがあってね」

そしていきなりそう言ってきた。

「そうですか、わざわざすいません。で、なんででしょう？」

「明日、僕とルイズはここで結婚式を挙げることになった」

「……失礼ですが、おっしゃっている意味がよくわかりません」

「意味は今言った通りだよ。君は部屋にも行かなかったし、パーティーにもいかなかったから知らないだろうが、僕はウエールズ皇太子の誇り高い勇敢さに惚れ込んでね、是非とも僕たちの婚姻の媒酌をと頼んだところ快く引き受けて頂いたのだよ。しかし、残念ながら明日の正午にはここは貴族派どもに攻め込まれてしまう、だからこんな時にはと思うが、機会が明日しかないんだ。できれば君にも式に出席してもらいたいのだが、あいにくと式は避難用のイーグル号が発するのとはほぼ同時の予定なのでね、グリフォンで帰れる僕とルイズはともかく、君や使い魔君はそうもいかなかった。だから残念だが君は今言ったイーグル号に乗って、一足早く帰ってくれたまえ」

「……はあ、わかりました。あー、一応空を飛べる使い魔を連れて来ましたので、使い魔ごしにはなりません。が式は見せて頂きます。では……お幸せに」

そう言っただけで俺が頭を下げると、一言二言しゃべった後、ワルドは部屋から出て行った。

それにしてもまさかこんな時に結婚式を挙げるとは……。ワルドもワルドだがルイズもルイズだ。あんの脳内パラッパラパーめ、いくらイケメンの婚約者相手だからって、まさか戦地で式を挙げることに賛成するほどだとは思っていなかった。

俺はため息を一つつくと、少し早いベッドに横になった。さすがに誰かが起こしてはくれるだろうが、避難船に寝坊して乗り遅れたなんて笑えないからな。

「あんま落ち込むなよ、サイト君。女なんて星の数ほどいるさ」

「それただし星には手が届かない、ってオチだろ。なんか聞いたことあるよ」

次の日の朝、俺とサイト君はイーグル号の上にあった。まあ、横から見てもサイト君がルイズに好意を持っていたことはわかっていたので、俺は失恋したサイト君を慰めつつも、式場に置いてきた使い魔のフクロウと感覚を共有し、式を見ている所だ。ちなみに今、式の方はルイズが登場したところ。なんか元気のない顔をしているがマリッジブルー……だったか？そんなやつなのかね。

はあ、それにしてもなんで俺こんな出歯亀みたいな事してんだろ。

「あーほらさ、シエスタいるじゃん、シエスタ。あれサイト君に結構ぐらつと来てると思うからさ、押せばいけると思うよ」「

「いや、けどさそんなあつちがダメだったからこつち、って男として最低じゃあないか？ だいたい俺はさ……ん？ なんだこれ？」

「どしたのさ？」

「いや、なんか左目が変わんだよ」

そう言つとサイト君は左目をこすりだした。ゴミでも入つたのだろうか。

式の方はいわゆる誓いの言葉の所だ。今、ワルドがルイズへの愛を誓つた。それにしても頼りがいのある大人といった感じのワルドと、まだまだ幼さの残る容姿に小柄な体格のルイズが並ぶと変な感じだ。間違いなくどっかの条例に引っかけりそうな雰囲気漂っている。

「ゴミが入つたときにあんまりこすると眼球を痛めるよ。今、水出すからそれで流しなよ」

「いや、そうじゃねえんだ。なんかぼやけて……うお！ なんか見

える！」

いきなり目をこすりだした後、そんなことを言い出したサイト君。正直危ない人にしか見えない。

式の方はなにやら妙な事が起きている。どうもルイズがワルドとの結婚を断ったようだ。女心と秋の空というやつだろうか、さすがにワルドが気の毒だな。と思ったが当のワルドの様子がおかしい。表情がひきつり、声を荒げ、世界を手に入れるとか言い出した。どうしたんだ？ 使い魔ごしのせいで詳しい所まではわからないので状況の把握がしづらい。

……ん？ 使い魔ごし……？

「……サイト君、今、何が見える？」

「んー、誰かの視界みてーだけど……たぶんルイズかな。ワルド見えるし」

「やっぱりか……急ぐぞサイト君！ ルイズが危ない！」

「うおっ！ なんだよ、アシル。ちょっ、危なっ！」

俺はサイト君の手を掴むと、人をかき分けながらルイズ達が今居る礼拝堂目指して走り出した。

くそっ、完全に俺のミスだ。ワルドが怪しいことはわかってたのに。もし、仮にワルドが裏切り者なんだとしたら、目的なんて考えればわかったはずなのに。わざわざ俺達を離し、虚無の担い手である可能性のあるルイズとの結婚式に王党派の中心であるウェールズ皇子を呼ぶ、その目的なんて考えるまでもないことなのに。

礼拝堂が見えるあたりまで来たとき、急にサイト君はデルフを握るとそこめがけて駆けだし、そしてその勢いそのまま壁を突き抜けた。

それに続くように礼拝堂の中に入ると、そこには衝撃的な光景が広がっていた。

座り込むルイズ、それに向けるように杖を構えるワルド、そしてそれを受け止めているサイト君。その近くに倒れているウエールズ皇子、服の胸のあたりが血で真っ赤に染まっている。おそらく生きてはいないだろう。

「てめえ……よくもルイズを！ あんなにお前を信じていたルイズを裏切りやがって！」

「ふむ、何故これたのかと思ったが主人の危機が見えた、ということころかね。それにしても困った事を言わないでくれよ、使い魔君。僕を信じるのはそちらの勝手だが、その信頼に応えるかどうかは僕の勝手だよ」

「ふざっけんな！ くそがあっ！」

そう怒鳴りながら斬りかかったサイト君をひらりとかわし、ワルドは俺達と距離を取った。三対一で圧倒的に不利なはずなのにも関わらず、ワルドの余裕は崩れない。一人殺しておきながら、今までと何も変わらないような態度に口調。不気味にさえ感じてしまう。

「まいったな、三人相手か……。悪いが面倒なのでね、こちらも少々本気を出させてもらうが、まあ、恨まないでくれたまえ」

そう言ってワルドが、風のスクウェアが、魔法衛士隊の隊長が、俺達に対し明確な殺意を持って杖を構える。

「ユビキタス・デル・ウインデ……」

そうワールドが呪文を唱えると共に、ワールドの身体が五人に分身した。

やっぱりか……。風のスクウェアであるワールドと繋がっているらしい謎の仮面の男ってあたりから感づいていたが、ワールドは偏在の魔法が使えるらしい。

偏在、ようは実態を持った分身を生み出す魔法だ。一人一人が意志を持ち、魔法まで使えるという冗談みたいな魔法。それ自体がかなりの高位呪文なので、使える人は偏在を使わなくとも強い場合がほとんどである。つまり、元から鬼のように強い人が数人に増えるという戦う側からすれば悪夢のような呪文であり、それと戦わなければいけない俺は早くも諦めかけていた。

「では、君とルイズの相手は僕がつとめさせてもらおうかな」

そう言っただけの一人のワールドがこちらへ近づいてきた。ガンダールヴを警戒しているのか残りの四人はサイト君の方へ向かった。

ルイズは婚約者に裏切られ、殺されかけるというダブルショックのせいか、軽く放心して使い物になりそうにない。つまり俺一人で風のスクウェアをなんとかしないとイケないということ。

「……ワールド子爵、頼みがあります」

……しょうがないな。まず間違いなく無理だと思うが、やるしかないか。サイト君の方は四人相手に頑張っているんだ、一人くらいは倒してみせよう。はあ……気は進まんけど、じゃあやるか。

「俺だけでも見逃しては頂けませんか？」

水のラインが、風のスクウェアを倒す。そんな一世一代の大バクチを。

十九話 対、ワールド（後書き）

今のところ何も書いていませんが、活動報告もしたほうがいいんですかね。

まあ、気が向いたらやってみようかとは思いますが。

二十話 罪悪感ではないけれど(前書き)

ウォーター・バレット、ウォーター・カッター共に大した威力ではありませんが原作には出てきていないオリジナル魔法です。なので気になる人はいるかもしれませんが、ご容赦願います。

二十話 罪悪感ではないけれど

「俺だけでも見逃しては頂けませんか？」

そう言いながらも俺は、懐に隠し持っていたビンを取り出し栓を抜くとワルドへ向けて投げた。そしてビンから飛び散る液体に対し、呪文を唱える。

「ウォーター・バレット！」

すると散った液体が空中で無数の弾丸状に固まり、ワルドへと飛んでいった。

「なんとというか……情けない戦い方だね」

俺に向け嘲るようにそう言うと、造作もなくワルドはそれらの水の弾丸をよけ、そのまますさまじいスピードで俺に向けて飛んでくると、俺の胸部に蹴りを叩き込んだ。

「う……っおっ！」

蹴りが入ると共に身体の中で、生木を無理矢理折ったような音がしたような気がした。そのまま蹴り飛ばされ、壁に叩きつけられる。

「かぶっ！……ってえな、くそが」

そう言いながらもなんとか立ち上がることはできたが、正直蹴り一発でもうヤバイ。胸のあたりにはすさまじい熱さと痛みを感じるし、壁にぶつかったときに軽く頭をつったのか少し足下がふらつく。

これあばらかどっか折れてんじゃないか。

それにしても、わかつてはいたがこれほど圧倒的な差があるとはなあ。

ワルドの方を見てみると蹴った直後に後ろへと飛び下がり距離を取ったのか、俺とは少し離れた位置にいる。まずいな、妙な事をされないようにヒットアンドアウェイで戦うつもりか。

「さすがに……敵いませんね。けれども俺も生きて帰りたいんですよ。そこで、賭をしませんか？」

俺がそう言うとワルドは怪訝そうな表情になった。当たり前だ、見逃したところでワルドには何の得もない。デメリットだけでメリットの無い話を受けるほどバカではないだろう。

「そんな顔をしないでください。賭と言ってもまあ、簡単な話ですよ、あなたはライトニング・クラウドを撃ってください。僕はそれを全力で防ぎます。そして、僕が無傷ですんだのなら、スクウエアの攻撃をラインが防ぎきるなんて奇跡が起きたのなら、見逃してください」

「なるほど……まあ、いいよ。おもしろそうだ」

「そうですね、ありがとうございます」

「それにしても本当にいいのかい？　僕がこんな何の得もない賭を受ける理由くらい君もわかっているだろうに……。変わった人だね」

「まあ、奇跡でも起きるかもしれませんしね。せいぜい上手くいくよう、始祖様に祈っておきますよ。ケホッ、あー痛え」

ワールドにとって何の得もない賭、しかし俺は間違いなくワールドは乗ってくるだろうと考えていた。なにせ負ける可能性がほとんど無い上、仮に負けたとしても約束を守るかどうかはワールドの胸先三寸な訳だ。なら別に受けたところで損はしない。そして、今までの言動から推測するにワールドは加虐趣味というか、相手よりも上であると確認する行為が好きないように感じる。

調子に乗ったガキが身の程知らずにも自分の攻撃を防いでみせると挑戦してきた、そんなシチュエーションを作っちゃったんだ、それは乗ってくるだろう。

「じゃあ行くよ。まあ頑張ってくれたまえ」

そう言っただけでワールドが俺へ杖を向ける。周囲の空気が冷え始め、ひんやりとした冷気が俺の身体を通っていく。

おいおい、ただでさえこちららピンチで背筋が冷えてるのに、勘弁してくれよ、風邪引いちまう。

「ウォーター・シールド」

「ライトニング・クラウド」

俺は呪文を唱え、水の盾を張る。それなりの精神力を込めたものなのでわりかし丈夫なはずなのだが、そんな俺の努力を無視するようにあっさり稲妻が盾を貫いた。

まあ、こうなるだろうなと思っていたので考えていたとおり左腕で稲妻を受け、杖と利き腕である右腕だけは守る。

「がっ……！！あ、ああああああっ！！かあっ、が、あああああああああああああ！！！！」

痛い！いや、熱い！くそがつ！覚悟はしていたつもりだったがここまでだとは！

あまりの痛みに足から崩れ落ち、焼けただれた左腕を胸に抱え込むようにうずくまった。肉が焼けるような臭いが鼻を突き、気分が悪くなる。

「おっと、ずいぶん手加減をしたつもりだったが。悪いね、あれでもまだ強すぎたか。それにしてもひどい臭いだな、ちゃんとしたものを食べてるのかい？」

口元を歪ませながらワルドがそう嘯く。いや、手加減をしたというのは実際本当なのだろう。本気で撃ってきたのなら今頃俺は黒こげだ。まあ、ワルドの性格上手加減をするだろうとは思っていた。こちらが先に盾を張ってやれば、それを打ち破りながらもこちらに大けがをさせる程度に、威力を抑えるだろうと。加虐趣味者の長所を挙げるとすれば、即座にとどめを刺したからない事だからな。それにしても痛え、くそが。その上俺を見下ろしやがって、そんなにスクウェア様が偉いかよ。

「ここまで……いくらスクウェアとラインだからって、ここまで力の差が有るわけがあるかよ」

震える足に力をいれ立ち上がり、懐からまたビンを取り出すと栓を開ける。そして、ワルドを睨みつけると杖を向ける。

「なめてんじゃねえぞ、くそがつ！くらっつけ！！ ウォーター・バレットオ！！」

そう呪文を唱えると同時にビンの中の液体が水の弾丸となり、ワルドへ向け射出される。先ほどより精神力を込めた弾は段違いのス

ピートでワールドへ向かうが、それらは

「エア・シールド」

その一言と共に、全ての弾丸はワールドの目の前で見えない壁に阻まれるように動きが止まり、ただの水のしずくとなってワールドの足下に滴った。それを見ると同時に俺は膝から崩れ落ちる。

「さて、これで打ち止めかな」

「見ればわかるだろうよ、ひげ親父。俺の精一杯を軽く防ぎやがって、ボケが、くたばりやがね。ちくしょう……。さっきのライトニング・クラウドだってもう少し精神力を込めておけば防ぎ切れたかもしれないなかつたつてのによ……」

「くたばるのは君の方がね。さあ、せつかくだ。先ほどは手加減をしてしまったからね、せめてもの詫びに本当に全力でライトニング・クラウドを撃ってあげよう。そのラインごときがこの僕の攻撃を防ぎ切れたかも、などという愚かな勘違いを正すためにもね……」

「……………」

そう言ってワールドがゆっくりとルーンを唱える。さっきと同じように少しずつ周囲の空気が冷えていき、ワールドが俺へと構えた杖の先には青白い電気が集まっていく。後は一言呪文を唱えればその電撃は俺を襲い、俺を肉から炭へと変えるだろう。

……やれるだけのことは全てやった。後は俺に運があるかどうかだ。

「これで最後だ。何か言い残すことはあるかい？」

「……長くなるけど構わないか？」

「いや、こちらも忙しいのでね。いいかげん君ごときにかける時間がもつたいないのだよ。では、さよならだ。ライ……ト!？」

そこまで言ったとき、ワルドの手から杖が滑り落ちる。そしてそれと同時にまるで糸が切れた人形のように倒れかけ、ひざまずくような体勢になった。

それとは反対に俺は立ち上がり、痛む身体を引きずりながらワルドへと駆け寄る。

「な!?!なにをし……!？」

「おらああああああ!?!」

そのままワルドの顔を思い切り蹴り抜いた。鈍い音と悲鳴をあげながらワルドは後ろへと倒れ、落ちていた瓦礫に頭をぶつけると、うめき声と共に消えていった。つまり倒した、本物だったら殺していたということだろう。

裏切り者相手に正当防衛でその上偏在だったとはいえ、もし人相手だったならば殺していたという事実は俺の右足に不快感を残した。それにしてもこころも上手くいくとは正直思わなかった。別に俺がやったことは大したことではなかったからな。ただ単に一度目は水で攻撃を行い、二度目は俺が作った特性の麻痺薬で攻撃したというだけだ。

この薬は無色透明に近く、気化しやすい上即効性という結構自慢の出来だったんだが、時間が無かったので無味無臭とまではいかなかったのだ。だからなんとかしてこれの臭いをごまかしたうえで、これをワルドの近くに撒かなくては俺の勝利はなかった。

そのために俺は事前に治療薬と飲み水しか持つてきていない、とワルドに伝えておいたのだ。そして一度目は実際に飲み水で攻撃をした。気休め以下だがこうすればワルドの液体に対する危機感が低下するかも、と思っただけだ。そして実力差を認めないような事を言いながら、今度は麻痺薬で攻撃した。こうすればワルドは実力差を見せつけるため、攻撃をよけるのではなく受け止めるのではなかったからだ。そして、それは上手くいった。気化しやすい麻痺薬が足下に撒かれた状況で、油断をしてくれた。

後は臭いだ。そのために賭だ何だと言って俺に対して、ライトニング・クラウドを撃つように誘導した。そして、自分の左腕が焦げる臭いでごまかした、というわけだ。しかし、まさか自分の腕を臭い消しに使う日が来るとは思っていなかった。

それにしても、上手くいったのがおかしいくらいに危うい博奕だった。

ワルドが初めから殺す気でもかかってきていたら、二度目の攻撃も受け止めずに避けたら、賭にのらずにライトニング・クラウドを撃つてこなかったら、麻痺薬の臭いに気づいていたら……。どれか一つでも上手くいかなかったら、今頃俺はウエルダんだ。ホント、まあ、よくこんな上手くいったと思う。

だが、結果良ければ全てよし、だ。ラインの腕一本でスクウェアの偏在を倒したんだし、おつりがかえってくるくらいだろう。

「つあっ……」

そこまで考えたとき胸と左腕から吐き気がするほどの痛みが伝わり、その拍子に膝を突いてしまう。くそ、こんなことをしている場合では無いというのに。

振り向くと放心したルイズと四人のワルドとなんとか渡り合っているサイト君が見える。たかが一人偏在を倒したからといって何が変わるわけでもない。こちらもなんとかしなくては、さっきの俺の

努力はなんの意味も無い。しかし、正直俺はぼろぼろであちらには俺をぼろぼろにしたのと同じ強さの奴がまだ四人も残っている。その上、偏在を倒したことでもう油断はしてくれないだろう。なら勝ち目なんて万に一つも無い。

それにしてもデルフが格好良くなってるのは何があっただんだ？

俺は痛み止めを飲むと、治癒の呪文を自身へとかけながらルイズへ歩み寄った。

「よう、元気か？」

「あ、アシル……」

振り向いたルイズの瞳にはいつもの強気な光が宿っていない。仕方ないだろう、信じていた婚約者は裏切り者で自分を殺そうとしてきたうえ、目の前で人が殺されるなんて初めてだろうし。

「私って何なんだろう……？」

ぼつりとルイズがつぶやく。

「あなたは偏在のワールドを倒せるくらいの力を持っている。使い魔のサイトは見ての通り四人相手に互角に戦ってるわ。私だけ、何もできない……。私が強ければウェールズ皇子をお救いすることができたかもしれない。もっと気を張っていればワールドの裏切りにも気がついていたかも……。私だけ……。いつまでも足手まといで……。ゼ口のまま……。」

「何、的はずれな事言ってるんだ。お前がゼロなのは頭の中身じゃねえのか？」

「え……?」

そう言ってもルイズの目に浮かぶのは疑問の色であって、怒りではない。

……これは重傷だな。

「サイト君見ろよ。くだらない事でちよくちよく鞭でうたれてるつてのに、うってくるお前を守るために命がけじゃねえか。何もできない? 寝言言っつてんなよ。会って半年も経ってない奴が命を賭けてもいっつてくらいにはお前は良い女さ」

そう言つとルイズの背中を軽く叩く。

「ほれ、立ちな。サイト君が、惚れた女を守るために風のスクウエアを打ち倒した平民、なんていう英雄になるか。力の差もわからずに格上に突っかかって返り討ちにあつた間抜けになるか……。お前にかかっているんだ。使い魔の誇りくらい守ってやれよ、貴族なんだろほれ、気の抜けた顔してんなよ」

そう言つてやるとルイズは立ち上がった。

「ま、がんばれ。いつもみたいに自信満々な面して、薄っぺらい胸張つてよ」

「ファイヤー・ボール」

そう唱え杖を振ると共に、一人のワルドの頭の近くで爆発が起り、それをくらったワルドは消えていく。あと三人か。

「アシル……帰ったら憶えておきなさいよ。人をさんざんバカにし

て」

「嫌に決まってるんだろ」

背中を向けてそう言ってきたルイズに対し、そう返す。さっきみたいに静かな方が俺は好きだが、こうじゃないとルイズじゃないしな。

そしてルイズは、軽く息を吸うところ言った。

「やるわよ、サイト！」

「はあ……はあ……ふう……。何とかなったな」

「ええ、でもこれからどうするの。あのレコン・キスタの連中はもうすぐここにもくるわ。なんとかして逃げ出さないと……」

「……………」

ルイズが加勢した後、元から速かったサイト君の動きは見違えるようにさらに速くなりワルドを圧倒した。逃がしこそはしたが、左腕を切り落として追い返した。風のスクウェア相手なのだ、奇跡的な勝利と言ってもいいだろう。しかし、ワルドをなんとかしても反乱軍、レコン・キスタの連中の動きは変わらない。遠くから砲撃や悲鳴が聞こえている、もうしばらくしたらここにも攻め入ってくるだろう。その前になんとかして助かる方法を考えなくてはならない。

「悪いね、皇子様。バカな俺にはこれくらいしか思いつかないんだ」

そう呟いてウェールズ皇子の死体に歩み寄る。ちなみにルイズ達は少し離れたところで休んでいる。疲れているのだろう、こちらのことには気にしていないみたいだ。そのまま皇子の死体のそばまでくると頭の横に膝を付いた。

「ルイズはともかく俺とサイト君の顔を知っている奴はレコン・キスタにはいないだろう。ならあんたの首を持って自分たちはスパイとして潜入していた、と言えばやり過ぎるかもしれん。そうやって時間さえ稼げればもしかしたら逃げ切れるかもしれないんだ。だから、許してくれ。その代わりと言っちゃ何だけどこの風のルビーは形見だつて事で、責任もつてあんたの恋人さんに渡しておくさ」

そう言って、指からルビーを抜き取り、ポケットへとしまう。

そして息を一つ大きく吸うと、ウェールズの首筋に杖をあて、呪文を唱える。

「ウォーター・カッター」

俺が蹴り殺したワルドは偏在で、裏切り者で、正当防衛だった。

俺が首を切り落としたウェールズはすでに死んでいて、それは仕方のないことで、少なくとも俺に非はないはずだ。

それでも足と手には不快な感触が残っている。それは達成感なんかじゃ間違いないが、罪悪感とも違う気がする。このこびりつ

きよつな不快な感覚は何なのか？ それについて考えるのに疲れた俺は、ほんの少しの間だけ、と自分に言い聞かせ目を閉じた。

「何をしているの？」

目を開き、声の聞こえた方を向くと、何故かそこにはタバサがいた。サイト君達のほうを見てみればギーシュとキュルケもいる。その近くの床に穴が開いているが、おそらくそこを通って来たのだろう。

「どうしたんだ？」

「迎えに来た」

「そうかい。それはどうも」

言葉少なにそう返す。タバサ達も大変だったのだろう、という事くらいわかってる。遊んでいて遅れたのじゃないんだろうな、ってのもわかってる。それでも必要以上に口を開いたら、タバサを責めそうで、もう少し早くきてくれればワルドの偏在を蹴り殺さないですんだのに、ウェールズの首を切り落とさないですんだのに、そんな八つ当たりをしてみまいそうだった。我ながら情けないことこの上ないな。こみ上げる苦笑をかみ殺し、タバサへと向き直る。

「じゃあ、帰るか……。タバサ」

「……………」

そう声をかけると何故かタバサは少し驚いたような顔をした後、うなずいた。

いつもなら微笑まじさを感じるだろう、そんなタバサの表情を見ても感じるのか妙ないらつきと不快感だけだ。どうかしてるな、今の俺。

帰ったらまず寝よう。寝て起きればいつも通りの俺のはずだ。そう考えるとタバサに続き、俺は穴へと飛び込んだ。

二十話 罪悪感ではないけれど（後書き）

薬品の効果といい衛士隊の隊長のはずのワルドが考えなしな行動を取るところといい、今回はいつも以上に都合主義っぽかった気がします。

よほど評判が悪いか、もっと良い展開を考えついたら修正するかもしれませんが、よろしくお願いします。

二十一話 空の上から帰ってきて

「よう、マリベル。元気だった？」

「……何度も言ったと思いますが、私はアラベルです」

アルビオンの騒動から帰ってきた翌日、見覚えのある金髪のメイドさんを見つけたので、声をかけた。

本人も言っているが彼女の名はアラベル。後ろで一つにまとめた金髪に青い瞳というこの世界では極々平凡な見た目を持つメイドだ。この学院の使用人の中では俺と一番親しい子でもある。

ちなみに、アルビオンの事に関してはルイズとアンリエッタ姫殿下間の秘密の任務だったこともあり、俺がその後どうなったかの会談に加わることは出来なかった。一応、風のルビーは姫様に渡すように言っただけでルイズに渡しておいたが。まあ、言いたくはないが王族として精神的があまり完成しているように思えないアンリエッタ姫殿下と関わっても、メリットはあまり無いと思うので、会談に加われなかったのは逆に良かったかもしれない。正直、こんなに苦労した褒美も、治療などに使った薬品代などが出ないというのは予想外だったが。これじゃ、苦労した分だけ丸損だ。

まあ、そんなこんなでとりあえずアルビオンへの冒険は終わった訳なので、預けていた遺書を返してもらいに来たわけだ。

「まあ、半分あってんだしいいじゃん。それより手紙渡しといたる？ あれ、返してくれ」

「ああ、そうでした。私あれについて言っておきたい事が山ほどあったんです。何なんですか？ あれ」

ただでさえ普段から無愛想というか無表情なのに、手紙の返却を求めたら眉間にしわが寄ったんだが、どうしたんだこの子。なにやら不機嫌な感じだ。俺が何かやらかした覚えはないんだけど。出発前夜にマルトー親方を起こして保存食を作ってもらい、ついでにその時アラベルに手紙を渡すよう頼んだだけだったはずだが。

「アシル様は私の事をどう思っています？」

「なんか残念なメイド」

「なんか残念な貴族に言われたくはないんですけど。まあ私達はそういうったドライな関係のはずですよね？」

「まあ、ねちょねちょした関係ではないな。それなりに仲は良いつもりだけど」

「そこは同意してもいいですけど……。いや、それは置いておきまして。このあいだの朝いきなりマルトーさんがにやにやしながら、アシル様からだと言紙を渡して来たんですよ。私もアシル様も年頃ですし、長い付き合いですから。マルトーさんはもちろん、それを見ていた使用人の皆さん達に私達、……。まあ、その、そういうった類の手紙を送り合う仲だと、思われているようなんですよ」

「……まじですか？ それは悪かったなあ」

困った時の癖だが、左手で頭をかきながらそう返事をする。

まあ、マルトーさんに手紙を渡すよう頼んだのは、命の危険があるアルビオンに行く直前だったからなあ。

真剣な顔をした男性が女性に手紙を渡すよう頼む、なんてシチュエーション、確かにラブレターか何かだと勘違いしても仕方ないか。

ん？　するとこいつ俺と恋仲だと思われているから不機嫌なのか？

……なんだかなあ、別に惚れてる訳じゃないが切ない話だ。

「いえ、それは別にいいんです。問題は手紙の内容です。正直私もそういった類の手紙だと勘違いしまして、生憎と恋愛経験というものが無いので、手紙をもらった時はまあ、それなりに、多少、なんというかドキドキしたんですよ。そして、そんな気分で手紙を開いてみたら一行目に『もしも私が死ぬような事が起きた場合のため、ここにお世話になった方々に対しての感謝と私財について書き残しておこうと思う』ですよ。なんだか裏切られたような気分にはなるわ、それなりに不安になるわで……心配したんですよ、まったく。そんな危険な目に遭う可能性があったのなら一言くらい言っておいてくださってもいいのではないかと思うのですが」

「いやいやそれは悪かったけどさあ、俺も大変だったんだって。夜中にいきなり明日の早朝出発だって知らされたんだからさ、仕方ねーべよ」

「はあ……一応貴族様ですからね、色々あるんだというのはわかっているつもりですが。しかし次からは私に、事前に、直に、言ってください。普段親しくしている人が突然いなくなるというのはあまり気分の良いものではありませんからね。言いたい事はそれだけです。はい、どうぞ。お預かりしていた手紙です」

「あいよ、確かに。ま、今後何かあったらきちんと言っよ。まあ、そうそう危険な目に遭う事なんて無いと思うけどな」

「そう願いますよ。ま、精々頑張ってください。応援も協力もしませんが、傍観はしますから」

「そらどうも。心強くて涙が出るよ」

「いえいえ、喜んで頂けたのなら何よりです。あ、後マルトーさん達も心配していたので後で顔だけでも出してあげてください」

「あいあい、わかったよ。ほんじゃ、またな」

「はい、失礼します。」

頭を下げたアラベルに対して、軽く手を振って別れると俺は自室へと戻った。

「恋愛ねえ……」

自室のベッドの上で、自分の腕を枕に横になりながらそんな事を考えてみる。

恥ずかしながら……になるのかはわからないが俺には惚れた腫れたの経験が無い。まあ、誰かに惚れられてたのいうのはもしかしたらあつたのかもしれないが、少なくとも誰かに惚れる、という経験をしたことが無い。正直キュルケやギーシュ、サイト君達が恋だの愛だのがどーしたこーしたと騒いでいるのを見るたび、自分が出来ない事をしているのを見るようで少しだけ羨ましく感じることもある。

「作ってみようかなあ、惚れ薬」

最終的には自分の心を元通りにすることを目指している以上、これでも一応心に作用する薬についての知識は一通り持っている。そしてそのなかには惚れ薬についての物もある。それを飲んでみれば誰かに惚れる、という感情を体験することはできるだろう。

様々な薬を作ったり、実験をしたりしているので材料もある。材料の中でも入手が一番困難な水の精霊の涙も市場に流れるたびに可能な限り手に入れるようにしているので、そこそこの在庫はある。なにせ心に作用する薬や高い効果の物を作る際には絶対とまではいなくともそれが必要になるのだ。大量に用意しておくにこした事はない。といってもバカ高い上、滅多に売られないのでピンにそこそこといった程度だが。知識と材料は揃っているのだ。惚れ薬を作れることは可能な訳だが。

……さすがに惚れ薬ごときに使うのももったいないか。だいたい自分の意志でとはいえ心を薬でどうこうつてのも良い気がしない。

そう考え諦めると、俺は目を閉じる。疲れからすぐに睡魔が訪れたので素直に意識を落とした。

だるかったんで授業は二日連続でさぼってみた。というか、ワルドに蹴られたあばらのあたりが折れていたようで、治療にそれだけかかったというのが真相だが。気が抜けたからだろうか、アルビオンから帰ってきた翌々日から痛み出すというのが、またいやらしい。

それにしてもそれらの怪我を自作の秘薬と呪文で治したので……はあ、また赤字だ。勘弁してくれ。

まいったわね……元々珍しい物ではあったけど入荷が絶望的だなんて……。けれどもなんとかしないと……。もしもあの平民やルイズの口から王女様にこのことが伝わったとしたら、私だけじゃなく実家の方にまで迷惑がかかるわ。こうなったら本当にラグドリアン湖にまで行くしかないのかしら……。

いや……。一つだけ方法があったわ！ あいつなら持っているかもしれない。正直借りを作るどころか関わるのもできれば遠慮したいけど、そうも言っていられないわね。仕方ない、行くだけ行ってみましょう。

「もうこんな時間か」

怪我の方が完治したので薬の作成や研究をしていたのだが、気付けば月が出るような時間になっていた。この調子なら明日からは授業に出ることができらるだろう。

今日はもう横になるか。そう思い椅子に座ったままのびをしたのと同時に部屋のドアがノックされた。

「誰だ？ こんな時間に」

そう思いながらも、ドアを開ける。そこにいたのは……

「ミス・モンモランシー？」

金髪のドリルが似合うクラスメイトだった。

二十一話 空の上から帰ってきて（後書き）

アラベルですが、ヒロインとして扱うかモブで終わりにするか決めていないので、気づくと出てこなくなっていた、とか普通にあると思います。気がしないてください。

二十二話 アシルとモンモランシー（前書き）

自分で書いて置いて置いてなんですが、少し主人公の性格が悪く見える
かもしれませんが、そのあたりは愛嬌ということで気にしないで頂
くとうれしいです。

二十二話 アシルとモンモランシー

「こんな時間に来るとは、何か用でも？　ギーシュならいないが」

「いえ、ちよつと頼みたい事があつて……。廊下でするような話じゃないし、部屋に入れてもらえない？」

「ん、ああ、気が利かなくて悪いね。少し散らかっているけど、どうぞ入ってくれ。今お茶でも出すよ」

私が訪ねた部屋から出てきた男はアシル・ド・セシル。確か二つ名は「水薬」のアシルだったはず。私の二つ名である「香水」と微妙に被っているような気がしたり、自作の香水を町で売っている私と同じように怪我や病気に効く薬を町で売っていたりと、変な所で妙に私と似ている奴。今の会話でわかるように悪い奴ではないと思うのだけれど、正直私は好きじゃない。

部屋に通された後、椅子に座って待っているとすぐに紅茶が出てきた。用意したにしては早すぎるし、元々自分で飲みながら何か作業でもしていたのかしら。すこし、部屋が散らかっているようだ。一言お礼を言つて紅茶を頂き、人心地ついたところで向かい側に座つた彼に向け用件を話す。私はここにお茶会をしに来た訳じゃないんだから。

「で、わざわざあなたの所に来た理由なんだけど、……。えっとね、その……。水の精霊の涙を持っていたら分けて欲しいのよ、あなたなら持つてるんじゃないかと思つて。もちろんお金なら払うわ」

「……。金があるなら買えばいいんじゃないのか？　売つてる所くらい知つてるだろ、『香水』のモンモランシーなんだし」

「そりゃ行つたわよ！　けど売り切れの上に水の精霊と連絡が取れないとかで入荷も絶望的みたいで……。これであなたが持つてなかつたらラグドリアン湖にまで行かなくちゃならなくなるかもしれないのよ。だからお願い！　持つていたら分けてもらえないかしら？」

「へえ、そりゃ大変だ。……ところで俺の所に来た理由はそれだけ？　実は秘めたる想いを胸に、夜這い……とかおもしろそうな理由は無いの？」

「冗談でもそんなバカな事を言うのはやめて欲しいわね。そんな理由も無いし、あなたとお茶会するために、こんな時間にわざわざ部屋に来たりはしないわ。水の精霊の涙が欲しいだけよ」

少し興奮気味にしゃべつたせいか、喉が渴いたので紅茶に口を開ける。それと同時に彼が口を開いた。

「で？　惚れ薬を飲んじゃつたのは誰？」

「ぶふっ！！」

それを聞いて私は紅茶を吹き出してしまふ。何？　今のは私の聞き間違い？

「飲み物を吹き出すとかはしたないぞ、モンモランシー。いやいや、それにしてもマジかよ？　結構な大事だぞ、それで、誰にやったのさ？　故意？　それとも偶然？　いや、わざわざ来たんだ。故意じゃないか。事故か何か、つてどこかね」

「げほっ、げほっ、こぶっ……。な、何を言っているのかしら？」

何を根拠にそんな事を……」

むせながらも私はそう言い返す。そんな私を見ながら彼は、悪戯を思いついた子供のような少し楽しげで得意そうな表情で話し始める。

「まず、こんな夜更けにわざわざ対して親しくも無い男の部屋を訪れてまで水の精霊の涙が欲しい、ってことは至急必要だって事だ。そうじゃないなら別に明日の朝やそれ以降でもいいんだしな。さらにあれを使つて作る薬つて言ったら、惚れ薬か心をいじつたり、えげつない効果を發揮するような毒薬、または効果の高い治療薬つてとこだろ。生憎モンモランシーが毒薬使うような奴には思えないし、思いたくない。なら残りは惚れ薬か治療薬関係に絞られる。そして至急、水の精霊の涙を使うような治療薬が必要な状況になった、もしそんなことになってるなら、いくらばれたくないんだとしても座つてお茶飲んでるような余裕は無いだろ、いくらなんでももつと焦つてるはずだ。つまりこれも無い」

「……」

私は言い返すことも無く、ただ彼を呆然と見返していた。

これだ。私が彼の事が好きでは無い、いやどちらかと言えば嫌いなのはこれだからだ。

自分の都合や内面はくだらない冗談で覆い隠しているくせに、人のそれは見透かしてくる。少なくとも私はそんな彼を好きにはなれない。

そんな私を見ながら彼は続ける。

「まあ後は楽だろ。惚れ薬が至急必要つて状況なんて、……もしかしたらあんのかもしれないけど俺は思いつかない。ってことは、そ

れの解除薬。で、狙った相手……モンモランシーの場合はギーシユか？ に使ったのなら解除薬なんか必要にならないから、それ以外の奴が飲んじまった。だから解除薬が必要になっただけど、水の精霊の涙は惚れ薬を作る分量しか用意しなかった、その上店に行ったら売ってない。そんな訳で仕方なく俺の所に来た、と。こんなところがちなみにこれで合ってる？」

「……ええ。その考えに飲んだのはルイズで、あの使い魔が相手つてのを足せば完璧よ」

「うわっ！ まじかよ。ルイズがサイト君にべた惚れ中かー。それは見ておかないと損だな。後で会ってこよう」

「……事情はわかったでしょう。お願い、水の精霊の涙を分けてちょうだい。さつきも言ったけどお礼はするわ」

「そりゃ、『水薬』って呼ばれてるしな、持ってはいるけど……ごめん、断らせてもらっわ」

「は、はあっ！？ あなた私をバカにしてるの！？ いや、そうじやなくとも知り合いが困ってるんだから手を貸してくれたっていいでしょう！？」

「い、いや、そうじゃないんだ。勘違いしないでくれ、モンモランシー」

私がその声を荒げると、少し焦った様にそう返事をしてきた。勘違いも何も無いと思うのだけれど。

「モンモランシ家って確か水の精霊との交渉役を何代にも渡って努

めて来てたろ？ なら、水の精霊もモンモランシーの呼びかけなら答えてくれると思うんだよ。俺、一度水の精霊と会ってみたかったんだ。俺が水の精霊の涙を渡さなきゃラグドリアン湖行って、精霊と交渉するつもりだったんだろ？ それについて行きたいだけなんだよ。もしそうしてくれれば、精霊との交渉が上手くいかなかったとしても、水の精霊の涙どころか解除薬を作って渡すよ、お金もいらぬ。……だめかな？」

そう言うところらを伺うような目で見てきた。意図はわかった。正直、ここで素直に水の精霊の涙を渡してくれば話は早いんだけど、本人にその気が無い以上仕方がない。それにここで断っても何の得も無いわけだし……。

「……しょうがないわね。わかったわ、元々ラグドリアン湖に行くつもりだったし、一緒に行く人が一人増えるだけだしね。いいわ、付いてきなさいな。あ、解除薬の話、忘れないでよ」

「わかってるよ、悪いね、無理を聞いてもらって。で、いつ行くつもりなんだ？」

「明日の早朝よ」

「……え？」

そう伝えると、彼は頭を抱えてしまった。なにやらまたかよ……、とか呟いているのが聞こえる。

……一体どうしたのかしら？

「……大丈夫？ どこか体調でも悪いの？ そういえばここ何日か見なかったし」

「ああ、いや別にどつか悪いわけじゃないんだ。ただ、前日の夜に計画立案、翌日早朝に出発つてのがこないだあったばかりかだね。また、そんな事になるとはなー、ってただだよ」

「ふーん……案外忙しく生きてるのね」

なんとというか、普段はのんびりしているイメージがあったけれども色々大変なのね。

「……まさかまた、大冒険が待ってるんじゃないだろうな……」

「何か言った？」

「いや、何でもないよ」

何か呟いたみたいだったけれど小声すぎて聞こえなかったわ。まあ、大した事じゃないでしょう。

「じゃ、私はもう部屋に戻るわ。明日はよろしくね」

そう言って椅子から立ちあがり、ドアへと向かう。さすがにもういい時間だ。明日のためにも、もう部屋に戻らないと。

「ああ、おやすみ。こちらこそよろしく頼むよ。じゃ」

そうあいさつを交わすと私は、自室へと戻っていった。

二十二話 アシルとモンモランシー（後書き）

少しずつでも総合評価が上がっていくのは、見ていてうれしいです。

感想の方もよろしくお願いします。
いい加減しつこいですかね（笑）。

二十三話 ダブルカップルの中で独り身はさすがにきつい(前書き)

活動報告での予定より大幅に遅れてしまってますいません。今週は色々と用事が立て込んでしまいました……。

あとしつこいようですが感想お願いします。PVやユニークよりも自分の小説に対する反応がよくわかりますし、何より更新しても感想が付かないと結構寂しいものでして(笑)

二十三話 ダブルカップルの中で独り身はさすがにきつい

「で、何で私までこんなところにいるんでしょうか？」

「到着してから言うあたり、わかってるな。カウベルにはつつこみの才能があるよ」

「だからアラベルだと何度言ったら憶えるのですか。いい加減貴族様といえど締め落としますよ」

俺は後ろにいるアラベルとそう言葉を交わす。馬に乗れないということでわざわざ乗せてきてあげたのに、この子礼儀つてもんを知らんのか。まあ、半ば無理矢理連れてきた俺が悪いと言えば悪いのだけれど。

目の前には日の光を浴びてさんと青く輝く湖が広がっている。これが今回の目的地であるラグドリアン湖である。

「で、本当になんで私は連れてこられたのですか？ いきなり朝早くに来たと思ったら『ラグドリアン湖に行くのに付き合ってくれ』って。あれはお誘いというより、もうほとんど拉致か誘拐でしたよ」

「迷惑かけて悪いけど我慢してくれ。いや、俺も本来は一人で来るつもりだったんだよ。ただな……あっちを見てくれ」

そう言っただけ俺は馬に乗った近くの二人、具体的にはサイト君とルイズの方を指さす。

「サイト……ぎゅってして」

ズ。
サイト君の胸によりかかりながら、顔を見上げそうささやくルイズ。

「ぎゅ、ぎゅってして……もうしてるだろ。これ以上強くすると痛いんじゃないか？」

「痛いくらいでいいんだもん。強くぎゅってして、昨日首筋につけてくれた痕みたいに痣でもできれば私がサイトのだってみんなにもわかるもん。そうすればサイトは私以外の子を見なくなってくれるって、信じてるんだもん」

「ほ、ほあああああ……」

なにやら軽く痙攣しはじめたサイト君。ルイズのおなかのあたりにまわした右手が不振な動きをしだし、それを左手で必死で止めようとしているみたいだ。

「私ももう一度サイトに痕をつけるんだもん」

そう言っつてサイト君の首筋に吸い付くルイズ。

「や、やめてくれ……ルイズ！お、俺は……俺はもう……もう……」

「……うわあ」

「どうだ、見てるだけで殺意が湧いてくるだろ。次はあっちだ」

次はギーシュ、モンモランシーペアの方を指さす。なにやら湖の縁にかがみ込んで水面に手をかざしているモンモランシーに、ギーシュが話しかけている様だ。

「それにしても美しい湖だね、モンモランシー。透き通るような青い水面に日の光が散りばめられ、まるで星くずを撒いたようじゃないか！」

「まあ、風光明媚なことでは有名な場所だしね。……それにしても変ね、水の精霊が怒っているみたいだし、それに以前はこんなに水位が高くはなかったはずだれど。家がいくつか水没しているようだし、何かあったのかしら……？」

そうつぶやきながらモンモランシーが立ち上がる。

「まあまあ、いいじゃないか。それにしても残念だよ、モンモランシー。そんなに景色が素晴らしいことで有名なのなら、君と来るべきではなかったかもしれないね。何せ、君の前ではこれほど美しい景色も色あせてしまうからね！」

そう言いながらギーシュが近づき、モンモランシーの手を取った。

「君の澄んだ青い瞳の前ではラグドリアン湖でさえかすんでしまうよ。それにさつきはあんなにも美しく見えた湖面に映る日の光の輝きさえ、君の髪の毛の輝きを見てからでは……えーと、そう！ 君の髪の毛の輝きの前ではかすんでしまうよ！」

「バカじゃないの。それに私はまだあなたと仲を戻したわけじゃないのよ、軽々しく触らないで」

ギーシュの手を振り払うモンモランシー。だが、それしきのこと
でギーシュは諦めず、なおもするるようにモンモランシーに話しか
け続ける。

「そんな事を言わないでくれよ、モンモランシー。愛している君に
嫌われてしまったては僕は生きていくことさえできないというのに！

ああ！ 愛しているよ、モンモランシー！」

そう言って手を握るところか抱きしめて、愛していると繰り返すギ
ーシュ。なんだかんだ言いつつもふりほどかないということはモン
モランシーもまんざらではないのだろう。

「……最初いきついのを見たせいか、あれが微笑ましく思えるので
すが……これってまずいですかね？」

「ああ、それは結構やられてるな。だけど出発前からあんな感じだ
ったんで、俺も頭ではあれがおかしいというのはわかっていても、

感覚的には違和感を感じなくなってきたよ。帰ったらゆっくり休もうと思う。ほれ、着いたんだし馬から降りな」

そう言って差し出した俺の手を借りながら、アラベルが馬を降りる。

そして、ラグドリアン湖の方へ近づきながら話を続ける。

「で？ 結局なんで私が連れてこられたのかの説明がまだなのですか。あの二組がどうかしたのですか？ ……まあ、どうかしてるとは思いますが」

「ああ、簡単な話だ。あのバカップル二組の中で俺だけ一人っつのは寂しいじゃんか。だから誰か女友達連れてこようと思ったんだけど、タバサっちもキュルケもいなかったからさ、ちようどよく近くにいたお前でいいや、ってんで連れてきた」

「とっ」

「あだっ！」

妙なかけ声と共に背中を蹴られた。さすがにタバサ達の代わりに、つてのは失礼だったかな。

「お……おのれ、平民が貴族を蹴るとかちよつとあれだろうよ。まあ、少し失礼な言い方だったのは認めるけどさ」

「わかっているのなら改善するよう心がけてください。さすがに少し傷つきましたよ」

「俺の服と背中も少し傷つきましたけどね。まあ、悪かったとは思

ってるよ。こんど何か埋め合わせするから許してくれ。で、水の精霊様はどんな感じよ、モンモランシー。ちゃっちゃとやって帰ろーぜ」

未だにいちやいちゃしているモンモランシーに声をかける。彼女が働いてくれないとまず、水の精霊に会う事ができない。

「きゃっ！ いたのならそう言いなさいよ。ほらっ！ギーシュ、離れなさい」

「そんな冷たいことを言わないでくれよ、愛しいモンモランシー！今の僕は君と離れるだけで胸に痛みが走るほど、君を愛しているというのに！ ああ、どうか離れるなんて言わないでくれよ」

「そ、そうじゃなくて。ほら、アシル達も見てるし、私達がここに来たのは水の精霊に用があるからで……」

「サイト……キスして」

「さ、さっきしただろ！ そんな何回もしなくていいじゃないか」

「だってさっきのはおでこだったから……。今度はきちんと唇にしたいんだもん……」

「ル、ルイズ……。やめて、その目が俺を！俺を狂わせる！」

「……………」

「……………」

ラグドリアン湖の上、つまり水面上に裸のモンモランシーが立っている。正しくは、モンモランシーと同じ形をした水の塊だが。

あまりに二つのカップルがうざかったので端折ったが、モンモランシーの使い魔のカエルにモンモランシーの血を渡し、水の精霊を呼んできてくれるよう頼みしばらくすると、湖岸からいくらか離れた所の水がまるで沸騰でもしているかのように沸き上がり、しばらくぐねぐねと動いた後あの形になった。あれが水の精霊だ。

水の精霊自体意志を持った水の様な物であり、決まった形を持っていない。おそらく送った血液の持ち主であるからモンモランシーの形をとったのだと思うが………どういう理屈なんだ？ 血液なんて赤ん坊の時から変化していないだろう。なら今のモンモランシーを見て今回の形になったってことだ。つまり水の精霊には視覚があるということになるが、それなら服を着ていない意味がわからない。

………普通の視覚ではなくて血液などの液体が流れている部分だけを認識しているということか？ それなら服を着ていない、認識できていない理由として筋は通っている気がするが……。それだと今度は髪があるのがおかしいか？ 髪に体液は流れていなかったような気がするしな。

……まあいいや。俺もこのファンタジックな世界で十数年生きてきて、考えてもしょうがないことがあると言うことは学んできたからな。水の精霊だから裸で現れた、それでいいよもう。

「で、モンモランシー。男として一言くらいは感想でも言った方がいいか？ スレンダーで綺麗だね、くらいならお世辞で言ってあげてもいいぞ」

「シツ！ 水の精霊を怒らしたらシャレにならないんだから、今回はばかりはくだらない事を言うのは自重してちょうだい」

モンモランシーは俺に対しそう言つと、喉を整えるようにセキを一つし、水の精霊へと向き直つた。

「私はモンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ、旧き盟約の一族の者よ。その姿になってもらえた、ということとは私の血液を憶えていてくれるという事よね」

「覚えている。単なる者よ。貴様と最後に会ってから月が五十二回交差した」

水の精霊は無表情のまま、モンモランシーの問いにそう返した。

水の精霊については書物以上の知識は持っていないなかったので、こんな面倒というか持って回った言い回しをするのだとは知らなかったな。

しかし、単なる者か。水の精霊は意志を持った水であり千切れようと繋がっていようと、その意志は一つ。一は全、全は一というどつかの錬金術の理みたいな存在だと本で見たな。俺らが単なる者なら、さしずめ水の精霊は複なる者か。

……ちなみにいまさらだが水の精霊の涙とは、水の精霊の一部の

ことだ。

「よかった。水の精霊よ、お願いがあるの。図々しいと思われるかもしれないけど、あなたの一部を分けてもらいたいのよ」

「断る。単なる者よ」

「でしょうね。さあ、帰りましょう。アシル、約束通り頼むわよ」

水の精霊に頼みを即答で答えられたモンモランシーは、これまた即答で諦めた。まあ、水の精霊の答えもモンモランシーの行動も当たり前だ。水の精霊にとっては自分の一部を渡す義理も利益も何もないし、モンモランシーはこのまま帰っても俺が解除薬を作っても約束になっっている以上、ねばる必要はないわけだからな。

ここまでは俺の予想通りだ。後は、上手くいくかわからないが俺の血液を水の精霊に何とかして渡し、俺のことも覚えてもらう。もともと俺の目的はそれだけだ。

そして、前に出ようとした俺を押しつけ、何故かサイト君が水の精霊と対峙すると、いきなり土下座した。

「頼むよ、水の精霊さん！俺の大切な人が大変なんだ！どうか少しでいい、あなたの身体の一部を分けて欲しいんだ！」

「ちよっ！ サイト君、何やってんだ！ つーかおいモンモランシー、お前サイト君に言ってなかったのか!？」

サイト君の土下座を止めようとしてつつモンモランシーの方を見ると、『あ、うっかりしてた』みたいな顔をして、気まずそうに目をそらした。

「頼むよ！ 本当に！ なんでもするから！ 何でも言うこと聞くから！ どうか少しでも分けてくれよ！」

「だからちよつと待って、落ち着いて！ 変な約束しないでくれサイト君！ そんなことせんでも俺が……」

「何でもすると言ったな？ よかろう。単なる者どもと歪みし者よ。我の望みを叶えし暁には我が一部を渡そう」

「本当か！？ ありがとう！ 水の精霊さん！」

……終わった……。

「え！？ 水の精霊の涙を手に入れられなくても、解除薬アシルが作ってくれることになったのか？」

「ああ。その金髪ドリルがサイト君に言い忘れてなきや、さつさと帰れたんだがよ。しっかし参ったな。まさか、水の精霊との約束を破る訳にもいかんから、襲撃者とやらを何とかしないと」

水の精霊の頼みというのは実に簡潔なものだった。ようは自分を退治しに夜な夜な現れる奴を何とかしろというものだった。

「それにしても歪みし者って何でしょうね？ 普通の人の事は単なる者、って呼んでるみたいだけど」

そう言うモンモランシー。

俺も気にはなったが少し考えりやわかるだろ。

「ルイズの事だろ。惚れ薬で心を歪ましている、って表現もできるしな。で、まあそれはいんだよ別に、どーでも。一個聞いときたいんだが……モンモランシーは戦えるか？ ルイズが役に立たんだらうからモンモランシーが手伝ってくれんと、俺とギーシュとサイト君の三人しか戦力がなくてきついんだが」

「いやよ。私、ケンカ嫌いなもの」

こんな事になった理由の一端を握ってるのに、堂々と我が儘言いなざるモンモランシー。何か腹立つなこんにやろう、ドリルもいでやろうか。

それにしても参ったな。水の精霊の涙を使うことで非常に効果の高い治療薬や、心身を破壊するようなえげつない毒薬を作る事ができるのは言ったと思う。水の精霊の一部である涙でそれだけの事ができるのだ、本体はそれ以上にえげつない事が出来るのは当然だろう。具体的に言えば水の精霊、この場合はラグドリアン湖の水に一瞬间でも触れた瞬間、襲撃者は見るも無惨なことになる。つまり、襲撃者は水に触れずに湖底の水の精霊を攻撃しているということだ。まずこのことから、襲撃者には風のメイジがいることがわかる。球状にした風に包まれることで、水に触れずに湖底に行く事ができるからだ。さらに火のメイジもいるだろう。火以外の魔法では、湖底に行けても水の精霊にダメージを与えることは難しい。そして、一度に二つの魔法は使えない。つまり襲撃者は最低でも風と火の二人それも水の精霊にケンカを売れるような度胸と実力の備わった奴ら。その上そいつらはかなりの絆で結ばれている。なにせ風のメイジが少しでもミスって風の球が破れたら、湖に潜っている火のメイジは一巻の終わりだからな。命を預けられるくらいの信頼関係はあると

いうことだ。この上、二人だけではなく護衛を連れている可能性が高い。なにせ二人だけだと、戦闘時ある場合において致命的に不利になるからだ。

これらの事から考えて、襲撃者は良くて三人、悪ければ手練れが四人か五人以上……。んな事状況ならまず勝ち目は無い。

「……仕方ないか。おい、作戦を伝えるから集まってくれ」

俺は一声かけてみんなを呼び、その注意が俺に集まったことを確認すると自分の考えを伝えた。

「まず隠れて襲撃者の様子を伺う訳だが……そいつらが五人以上だった場合は諦めて学校に帰ろう。正直勝ち目が無い。次に、四人だった場合だがこちらの戦力はサイト君にギーシュに俺の三人だ。上手くやりやなんとかなる。その場合の作戦はだな……」

戦闘になったとしても戦わないからか、早くも俺の話に対する興味を失つたらしいアラベルとモンモランシー。

それなりに真面目に聞いてくれているサイト君に、真面目に話を聞いている風の自分のシリアスな表情をモンモランシーにさりげなくアピールしているギーシュ。

そして空気を読まずにサイト君にキスをねだるルイズ。もうお前は死ね。

「……頼むから真面目に聞いてくれよ……」

切なさと共にはき出した俺のそんな台詞は、どことなく虚しく湖畔に響いた。

そんな俺の不安を無視するかの様に夜が来る。
……襲撃者の来る
夜が。

二十三話 ダブルカップルの中で独り身はさすがにきつい（後書き）

だいたいこの話が終わったあたりからオリジナル色が強くなってきました。

そして正直戦闘ではあまり役に立っていなかった主人公も、自分の得意分野を生かすことでいくらかする成長というか強くなる予定です。

良ければそのあたりも楽しみにしてください。

二十四話 少女の頭に本気でキックする回（前書き）

読みやすいように行間を開ける程度ですが、ざっと今まで投稿してきたものを編集しました。

文章を推敲して付け足したり、削ったりしたわけではないのでもう読んだ方は読み直したりしなくても大丈夫です。

二十四話 少女の頭に本気でキックする回

「来たか……」

ラグドリアン湖から少し離れた草むらに隠れて、俺とサイト君は息を殺して襲撃者を待っていた。そうしてしばらく待ち、あたりが完全に暗くなったころ二人の人間が現れた。深くフードをかぶり口―ブを羽織っているので、性別はおるか年齢すらわからないが、おそらくあの二人が襲撃者で間違いないだろう。

それにしても二人だけとは……。余裕の表れか何か知らんが、馬鹿な奴らだな。

小さいほうの襲撃者がもう片方に杖を向け、何やら呪文を唱える。とそいつは空気の球のようなものに包まれた。それを確認するとそいつは躊躇さえ見せずにラグドリアン湖の中へと入っていった。

それを見た俺は一呼吸、二呼吸置くと隣にいるサイト君の肩を軽く叩いた。攻撃を開始する合図だ。

デルフを抜き、ガンダールヴの力を発動させたサイト君が残った襲撃者へと襲い掛かり、俺も同時にそいつ向け走り出す。相手もそれに気づいたようだ。もう遅い。この時点で俺たちの勝ちが決まったようなものだ。

何せメイジは一度に二つ以上の魔法は使えない。つまりもう片方の襲撃者を湖に潜らせるための魔法を使っている以上、こいつは魔法が一切使えないうえ、そちらの魔法を制御するために集中力もそちらに割かなくてはならない。様は今このこいつは集中力の乱れきった平民と同じだ。こちらは水のラインとはいえメイジとガンダールヴのコンビだ、負けるはずがない。それにもし仮に今使っている魔法を解き、逃げるだの立ち向かってくるだのをすれば、湖の中にいるお仲間は一瞬で廃人だ。どちらにせよ襲撃者二人の内、片方は完全に無力化することができる。

こういうことになるから相手も護衛を引き連れてくるものだと思
っていたんだが……いやー、相手が考えなしで助かった。

しかし、さすが水の精霊を倒そうなんてする奴だけのことはあり、
魔法も使わずに軽い身のこなしでなんとかサイト君の攻撃をしのい
でいる。だけど襲撃者さんには可哀そうなことにサイト君だけじゃ
なくて俺もいるんだよな。

軽くサイト君に目配せすると、サイト君はわかってくれたらしく
軽くうなずいた。

「らあああああつー!!」

サイト君がデルフを大きく振りかぶり、襲撃者を叩き割るかのよ
うに振り下ろすと、相手はその隙を突くように軽く横に動いてよけ、
サイト君の腹に蹴りを叩き込んだ。……が、それを予想して死角に
いた俺が、サイト君の仇を打つてわけじゃないがそいつの頭に蹴
りを叩き込んだ。

「……っ!!」

そうして吹き飛びうつぶせに倒れた襲撃者に急いでまたがると、
左手で頭を地面に押し付けてながら右手では杖を持っていた、右手
の手首をつかんだ。

「ゲホッ。あー、痛てえ。そっちは大丈夫か、アシル」

「まあ、おいしいところだけ頂いたからな、無傷だよ。……それに
しても思ってたよりこいつ小さいな。もしかしてまだ子供か？」

男の中でどちらかといえば小柄な俺よりもまだ圧倒的に小さい。
それこそ十代前半の女の子くらいの背丈くらいしかない。子供でこ

れだけのことをしたのか？ そうなら恐ろしい話だな。しかしそれ以上にすごいのが、この状況になってもまだ、相方への魔法を維持し続けているところだ。修羅場なれしているのか、相棒がよほど大事なのか……いずれにしてもすさまじい精神力だ。

「で、この後はどうするんだ？ もう一人が上がってくるのを待つんだっけか？」

「まさか、潰せるもんは潰せるうちに潰しとくもんさ。ほれ、さつさとこいつの杖を切り飛ばしてくれよ、サイト君。そうすりゃこいつも湖の中に入ってた奴も無力化できて万々歳だ」

「ま、待って！」

そこで初めて襲撃者が口を開いた。仲間が危ないということをかされたからだろうか、かなり切羽詰った口調だ。……それよりも

……

「……………え？」

地面に押し付けているので随分とくぐもってはいたが、それはとてもよく聞きなれた声だった。よく見てみれば押さえつけているフードの間から、青い髪の毛が見えている。

「……………」

嫌な予感がほぼ確信へと変わってはいたが、それが外れていることを祈りつつ顔を隠しているフードをめくってみた。

「いや、ほんと、なんていうか、すいませんでした、というか……。別に知っていてやったわけではないのだし仕方ないんじゃないのかなあ、というか……。ああ、言い訳してすいません。反省してます」

結論から言おう。襲撃者はタバサとキュルケだった。つまり俺は知らなかったとはいえ、タバサの頭に蹴りをかまし、その上あと一歩のところまでキュルケの心を破壊していたところだったわけだ。正座させられてキュルケに頬を杖でぐりぐりされながら延々と文句を言われるのはなかなかきついものがあるが、まあしょうがないだろう。ちなみにタバサはキュルケが危なかったことに対しては、俺の頭を杖で叩いて怒りを伝えてきたが蹴りをかましたことに関しては、知らなかった上に戦いならば仕方がないと許してくれた。

「はあ、まあ私も無事だったし、タバサも怪我したってわけじゃないからもう許してあげるわ。で、あなたたちがなんでこんなところにいるのよ？」

「ん〜、サイトお」

キュルケとの会話の途中でまた腹の立つ声が聞こえてきた。横を見てみれば俺と同じように正座したサイト君の背中にルイズがもたれかかるようにして甘えている。ルイズの性格を知っている人ならば誰でもそうなるだろうが、キュルケもそれを見て目を丸くしている。

「……どうしたのよ、あの子」

「女の嫉妬は恐ろしい、って話だ。ちなみに犯人はモンモランシーな」

「モンモランシーって……まさかこれ薬か何かのせいなの？ はあ……男つてのは自分の魅力で落とすものじゃないの。薬に頼るなんてどうしようもないわね」

髪をかきあげながら胸を強調するようにして、モンモランシーにそう言うキュルケ。それを見たモンモランシーは不機嫌そうに眉をひそめた。

なんとなく雰囲気が悪くなりそうだったので、話をそらそうとキュルケたちが水の精霊を攻撃していた理由を聞いてみたところ、どうもラグドリアン湖の増水を止めるためだったらしい。そういえば着いてすぐの時にモンモランシーが水の精霊が怒っているみたい、と言っていた覚えがあるがそれと関係しているのだろうか。

まあそれはそれとして、タバサたちも引けない理由があるらしく、お互い話し合った結果、明日水の精霊に襲撃者を撃退したことを報告し水の精霊の涙を受け取った後、増水させている理由を聞いてみてなんとかできるようなら手を貸してやる、無理そうなら俺たちが帰った後またキュルケとタバサが頑張つて水の精霊を退治する、という方針に決まった。これなら一応襲撃者は撃退するという約束は果たしたことになるだろうから俺たちに責任はないだろう。ただ撃退した奴らが諦めずにまた襲撃しに来た、というだけだ。とんちみたいな感じだがもともと俺はそこまで義理堅いほうじゃないんでな。俺はとりあえず自分が納得できる形で筋が通っていればかまわない。

そんなわけできつそく次の日の朝、モンモランシーに頼みまた水の精霊を呼んでもらった。

前呼び出したときと同じように、水が盛り上がるとぐねぐねとうごめいた後モンモランシーの形をとった。

「水の精霊よ、言われた通り襲撃者は撃退したわ。さ、約束通りあなたの一部を分けて頂戴」

そうモンモランシーが伝えると水の精霊はプルプルと震えた後、ピツと自分の一部を切り飛ばしてきた。そしてそれをギーシュが持っていた壇で受け止めた。そしてその後、何も言わずにその横で空き壇を構えて待機していた俺のほうにも飛ばしてくれたあたり、水の精霊は案外空気が読める存在らしい。もちろんそれはありがたく頂いた。これで水の精霊の涙の在庫に余裕が出てきたから、構想で止まっていた薬の作製に着手できるな。なんならタバサの知り合いもなんとかできるようなら手を貸せるように、後で症状だけでも聞いておくか。

そして俺たちに自分の一部を渡すと用は済んだとばかりにモンモランシーの形を崩し、湖に戻っていこうとする水の精霊。しかし、これで帰られては困るので俺が引き止める。

「待つてもらいたい、水の精霊よ。一つ聞きたいことがあるんだ」

その声が届いたのか再びモンモランシーの形をとり、こちらへと向き直った。

「なんだ歪みし者よ」

……歪みし者って俺のことかよ。人前で面倒になりそうなことを

言いやがって、空気読めよ、このアメーバもどきが。

「いや、最近湖の水が増水しているらしいが、何か目的があったのか？ そうでないのならやめてもらいたい。水かさが増していることで多くの者たちが困っているんだ。もし、理由があったことならば聞かせて欲しい。俺たちになんとかできることなら、襲撃者の件のように手を貸すから増水をやめてもらいたい」

「ふむ……」

そう一言いうとまた人の形を崩しぐねぐねと子供が粘土で遊んでいるかのように、形を何度か変えた後再びモンモランシーの形をとった。形を変えたりしていたのは水の精霊が悩むときの癖だろうか。精霊に癖があるというのもおかしな話だが。

「お前たちに任せてよいものかと我は思う。だが、お前たちは我との約束を守った。ならば、我ももう一度お前たちを信用しよう」

そう言つとまたしばらくの間ぐねぐねと形を変化させ、そして人の形に戻ると話し始めた。

「数えるのも愚かしいほど月が交差するときの間、我と共にあった秘宝、『アンドバリの指輪』。それがお前たちの同胞に盗まれたのだ」

「『アンドバリの指輪』？ 確か偽りの命を与えるっていう伝説のマジックアイテム……。本当にあったのね」

そうモンモランシーがつぶやいた。

「死とは我には無い概念ゆえ理解できぬが、命を与える指輪。それはお前たちには魅力的なのだろう。だが、あれは我が永い間守り続けし秘宝。だからこそ取り戻すために水を増やした。いつかすべてを水が覆いし時、我は秘宝の在り処を知るだろう」

「つまり世界中を水で覆うつもりだったと。気の長い話だな、おいとこでその『アンドバリの指輪』とやらが盗まれたのはいつごろなんだ？」

そうサイト君が水の精霊に尋ねると、またぐねぐねと動いた後サイト君のほうを向き答えてくれた。

「あれは月が三十ほど交差する前の晩のこと。風の力を行使し、我が眠っていた最も濃き水の底から盗んでいった」

なるほど、おおよそ二年ちよい前ってところか。しかしさすがに手がかりが少なすぎるな。

「水の精霊よ、せめてその者達の容姿や名前などはわからないだろうか。さすがにこれでは探しようがない」

俺がそう聞くと、

「単なる者どもの容姿の区別など我にはつかぬ。だが、我のもとへ来た個体の一人が『クロムウエル』と呼ばれていた」

……冗談じゃねえぞ。クロムウエルって言ったらアルビオンの反乱軍レコン・キスタの頭、いやもうアルビオンの新皇帝になったんだったか？ どちらにしろんでもない大物じゃないか。頼むから人違いであってくれ。そんな奴から指輪を取り返すなんて無茶もい

いとこだ。

「あー、ところでその指輪を取り返すと約束したとして、いつまでには取り戻せ、といった期限はつけるつもりはあるのか？」

一縷の望みをかけてそう聞いてみると

「お前たちの寿命が尽きるまででかまわぬ。我にとって明日も未来もさしたる違いはないゆえに」

「よし、じゃあ約束成立だ。俺たちで頑張って指輪を取り返してくるから、水を引かせてくれ」

死ぬまでに、つてんなら受けても構わないだろう。ぶっちゃ俺が死んだあとどうなるかなんてしたこっちゃないし、レコン・キスタなんてあんな危なっかしい組織が何十年も続くとは思えないからな。これだけ時間がもらえればなんとかなるかもしれないし。

「わかった。お前たちを信頼しよう。指輪が戻ってくるのならば水を増やす必要もない」

そう言い残すとまだ人の形を崩し、湖の中に戻ろうとする水の精霊。まだ、用は済んでいなかったなのでそれを呼びとめようと声を張り上げた。

「待って」

「待ってくれ！」

「え？」

声がタバサと重なった。タバサが誰かを呼び止めるところなんて初めて見たな。別に俺の要件は急ぐものでもないので、先を譲った。

「水の精霊、あなたは私たちの間では『誓約の精霊』とも呼ばれている。よければその理由を教えてほしい」

「単なる者どもの間での私の呼び名の理由など、我は知らぬ。ただ……我に決まった形はない、しかし我は太古の昔よりはるかなる未来まで、平和なる時も混乱の世にも……我は変わらずここにいた。だからこそ変わりゆく時を生き抜くお前たちは、変わらぬ我に対し変わらぬ誓いを掲げたくなるのだろうか」

「……そう」

水の精霊の答えを聞くとタバサは小声でそうつぶやくと、目をつむり手を合わせた。何を誓っているのかは知らないが、そこには何か犯しがたいほどの想いがこもっているように俺には感じられた。キュルケがそんなタバサを慈しむような目で見ながら、ただ肩に優しく手を置いているのはタバサの誓いについて何か知っているからだろうか。

その後、愛の誓いをしてくだなんだとルイズたちが騒ぎ、それが一段落ついたところで俺はまだそこにいた水の精霊へと向き直った。

「水の精霊よ、『アンドバリの指輪』の件、確かに約束した。取り戻した時のために私の中に流れる体液を覚えていただき、私もまた盟約の一員へと加えて頂きたい」

そう言つて手を差し出すと、水の精霊はまたもぐねぐねとうごめくと人の形を崩し、そのまま俺の手へと体を触手のように伸ばしてきた。そして、それが俺の指へと触れるとかすかな痛みとともに俺の指先に小さな傷ができた。おそらく今、俺の血液を取り込んだのだろう。

「歪みし者よ、貴様の体を流れる液体を我は覚えた。指輪を取り戻した折にはその液体をラグドリアン湖へとたらしせば、我は貴様の前へと姿を現すこととしよう」

途中いろいろとあつたがこれで俺の目的は終わった。水の精霊とのコネはいずれ大きな利益となることだろう。用を済ませた俺たちは馬へとまたがり学園へと戻っていくのだった。

……ちなみになぜ俺が歪みし者と呼ばれたのかについては、モンモランシーやタバサから様々な説が出たが、最終的にはアラベルの出した『性格が歪んでるからじゃないですか?』という説で落ち着いていた。まあモンモランシーもタバサも納得はしていなかったが、結局のところ水の精霊の考えなんぞが人にわかるわけもない、ということでの話題は終わりということになった。

それにしても……俺はラグドリアン湖がある方へと振り返り思う。

……別に俺それほど性格悪くはないと思うんだけどなあ……。

二十四話 少女の頭に本気でキックする回（後書き）

感想についてですが、良い点をあげてくださっているのはもちろん非常にうれしいですが、できれば悪い点も指摘してくださるとありがたいです。

自分でたまに読み直しても誤字や変な表現だったりするところが結構頻繁にあるので。

後個人的な趣味でパロが入ったりしてることもありますがそこらへんは大目に見てください。

二十五話 閑話休題（意味は知らない）（前書き）

ずいぶんと間が空いてしまつてすいません。

二十五話 閑話休題（意味は知らない）

「頼まれた食事を持ってきました」

片手に食事を乗せたトレイを持ちながらドアをノックし、そう言う中から鍵はかかっていないから入ってきて構わない、と返事が返ってきた。それを聞き私は部屋の中へと入る。

「ん、ああ悪いな。あー、……置く場所がないな。ちょっと机の上片づけるから待っていてくれ」

部屋の中には私に食事を持ってきてくれるように頼んだ張本人であるアシル様がいた。彼が向かっていた机の上には何やら難しそうな物の名前が書いてある紙だったり、様々な色をした液体の入った壺が置かれていて、トレイを置くことが難しいことに気付いたので。散らかっていた紙をまとめたり壺を一ヶ所にまとめたりして場所を作ってくださいました。できた空いた場所にトレイを置くと、椅子の上はまだ荷物があつて座れなかつたので失礼かもしれないがベツドに腰掛けた。

「それにしてもここしばらく何をしていますか？ タバサさん達の誘いも断って」

なにやらサイトさんやミス・ツェルプターなど、普段アシル様と親しくしている人たちが揃ってしばらく前から出かけてしまっているの、そのことについて聞いてみる。メイド仲間のシエスタもそれについて行ったのだが、聞くところによると目的は宝探しらしい。どちらかというと現実主義者のアシル様が参加しないのは理解できるが、まさかミス・タバサまで一緒に行くとは思わなかった。しっ

かりした方だと思っていたがやはり年相応なところがあるのだなあ、と聞いたときは微笑ましく思ったのを覚えている。そんなわけで普段の面子で今学院に残っているのは、アシル様とミス・ヴァリエールだけだったはず。

「わかりやすく言うとだな、才能の無い人が努力をせずに強くなる薬を作ろうと頑張っているわけよ。構想はできてたんだが、材料が足りなくて作れなくなっつてな。だけど、こないだの件で手に入ったんで作り始めたんだ。あとは、微調整だけなんだが……これが難しくてな……」

「才能も努力も無しに強くなれるですか……。本当にいつみてもアシル様はぶれずにダメな人ですね」

「……まあ、清廉潔白な人よりも私はそのほうが好ましく思うのは確かだが。」

「しかし、この……なんかよくわからんが焼いた肉にソースかけたやつうまいな。パンにはさんで手軽に食えるってのもいい感じだ。マルトーのおっさんにお礼言っといってくれよ」

「……それを作ったのは私です。まあ……気に入って頂けたのなら幸いですよ」

「へえ、まじか！ 使用人なんだし料理くらいできるだろうとは思ってたけど、上手いもんだな。嫁に来てくれよ」

急にそんなことを言われ、私は疲れた目をもんでいるようなふりをして顔を右手で覆い隠した。

「冗談なのか本気なのか……、まあ会話の流れからして間違いなく

冗談だろうが。表情に乏しいせいでクールなように思われている私だが、それでもこんなことを言われれば柄にもなく照れるくらい乙女心は持ち合わせているつもりだ。感情が顔に出にくい性質とはいえ、なにかの拍子に赤くなった顔でもこの人に見られたら何を言われるかわかったものじゃない。間違いなくからかわれてしまう。

「そついやあ、お前も困ったことあったら言えよ。普段世話になってるし、俺にできることなら手え貸してやつから」

「ありがとうございます。では何か問題がおきたら相談させてもらいますよ」

パンを片手にそう言ってきたアシル様に対してそう返す。その後は何を話すわけではなくただ部屋の中には、アシル様の食事をする音だけがしている。

今更だが部屋の中には私とアシル様だけか……。ふとそんなことに気付いた瞬間、自分が男性のベッドに腰掛けていることが恥ずかしくなってきた。普段ならこれしきのことでもこんな忙しいような気持ちにはならないのに……。貴族様に対してこんな言い方は失礼かもしれないが、この間のラグドリアン湖へ行った時のあの二組のバカップルにあてられたのだろうか。

「はあ……」

私らしくもない。あのラグドリアン湖でのべたべたしていた二組を思い出したせいだろうか？ 顔が熱を持ってきたような気さえする。と、というか今の私の顔は絶対に赤くなってしまうている。そんなことを考えていたとき、ため息が気になったのだろうか、パンを啜えながら私のほうを変なものを見るような目で見ているアシル様と目が合った。

「……」

「……」

「とわっ!」

しばらく静寂が流れた後、顔を赤くして見つめあっているという状況であることに気が付いた時、恥ずかしい話だが私は軽くパニックに陥ってしまった。まず考えたのはなんとかしてこの赤くなつた顔を隠さなければならぬ、ということ。そのために、ベッドに座っていた時から手に当たっていた何かを思いつきり顔に押し当てた。その時に今まで出したことも無いような奇声をあげてしまい、余計に恥をかいた気がするが気にしないことにしよう。

(……あれ?)

そこでなんとなく覚えがあるような匂いが顔に押し当てているものからすることに気付いた。嫌な予感を感じつつ、押し当てていたものを顔から離しよく見てみるとなんてことはない……アシル様の枕だった。

「ひゃいっ!」

「ふんぶっ! げほっ、こほっ……、ちょ、何か変なところ入った。げほっ、げほっ……あーのどに詰まるかと思った。何するんすか、ジングルベルさん」

自分でも何がしたかったのかわからないが、なぜかそれがアシル様の枕だと気付いた瞬間、持ち主のアシル様に向かってそれを思い

切り投げつけていた。それもまた奇声のおまけつきで。まったく自分で自分が嫌になる。ちょうどパンを食べていたところだったのもあり、枕をぶつけられた拍子にのどにつまりかけたようだ。それは素直に申し訳ないと思う。私は軽くうつむいて、先ほどと同じように手で顔を隠しながら謝罪した。

「なんかすいません。ちょっと寝不足で体調がすぐれなくて……。もう戻ります、お皿とかは後で取りに来ますので。あと私はアラベルです」

「ふーん……。寝不足ね。まあ、お大事にな」

その何も気にしていないかのような言葉を聞いて少しばかり落ち着きを取り戻した私が、顔をあげて目にしたのは……。この上もなく得意げな顔をしたアシル様だった。おそらく詐欺で生計を立てている人がお金持ちの弱みを掴んだ時、似たような顔をするだろう。気のせいか顔の後ろに『にやにや』とか擬音が見えるような笑顔だ。

「体調悪いんだろ？ アラベルちゃんよ。顔が真っ赤だぜ、熱でもあるんじゃないですか？」

「くっ……！」

顔が赤いことに気付かれたら、からかわれるだろうとは思っていたけれどもここまでうつとうしいからかい方をされるとは……。しかもこんなときに限ってきちんと名前を呼んでくるのが、厭味つたらしい。覚えているのなら普段からもそう呼べばいいものを。

アシル様はそのにやにやとした顔のまま私のほうへ近づいてくるのと、私の肩に手を乗せた。緊張していたせいとその感触に軽く震えてしまう。

「どしたのさ、震えちゃって。寒いのか？俺が手厚く看病してやるのか？」

それにしても何でこの人は、人をいたぶる時こんなに楽しそうなのだろう？しかし一番不思議なのは、こんな面倒くさいからかい方をされているのに欠片も怒りや不快感を感じていない私自身だ。それよりこれ以上からかわれたら認めたくもない自分の中の気持ちは、何かに気付いてしまいそうだ、何でもよいから話をそらさないと……。

そう思い何か話題になるようなものでもないかと部屋を見渡してみると、おかしな物が見えた。部屋の中ではなく窓の外だが、何か大きいものを学院へと運んでくるドラゴン。運ばれているのは……なんだろう、見たことがない。何やら大きい鉄の塊のようなものに、横へまつすぐ生えている薄っぺらい金属の板のような物。目を凝らしてみると後ろのほうにも似たような金属板が付いている。……：新の芸術品か何かだろうか、こんな時に学の無い平民であることが嫌になる。話をそらしたいのはもちろんだが私自身あれが一体何なのか気になったので、アシル様あれが何なのか聞いてみようと思いついた。案外物知りなので答えてくれるだろう。

そう思いアシル様の顔を見ると、今まで見たことも無いような真面目な顔で私と同じように窓の外を見ていた。気のせいか私の肩に置かれた手にも力がこもっているような気がする。かと思うとパツと肩から手を離し、顔もいつも通りの締まらない感じに戻った。

「悪いな、なんちゃらベルさん。ちょっと興味わいたんでアレ、見てくるわ。かまってやれなくなつてごめんな？」

「いい加減私が暴力に頼りたくなる前にどっか行ってください。それにあんなふうにいじられて喜ぶような趣味は持ち合わせていない

ので、謝らなくても結構です」

「どっか行けっってお前、ここ俺の部屋……。まあいいや、ちょっと行ってくるわ」

そう言っってひらひらと手を振りながら部屋を出ていくアシル様。
部屋の外に出たと同時に先ほどまでのにやにやとした顔でこちらを振り向き口を開いた。

「俺がいないからって枕だのベッドだので変なことすんなよ、アラルさんよ」

私が無言で投げた枕は閉められたドアにぶつかった。その向こうから聞こえた忍び笑いには、さすがに私でも多少の怒りを感じたのだった。……まあ、そんなやりとりに顔は少し緩んでしまっていたかもしれないけれど。

二十五話 閑話休題（意味は知らない）（後書き）

今更ですがPVが三十万を超え、四十万まであと一歩、というところになっていました。総合評価も千の大台が見えるところまで来ました。

これも見てくださっている皆さんのおかげです。ありがとうございます。

二十六話 初めての共同作業の相手は中年のおっさんでした(前書き)

ついに総合評価が四ケタの大台に乗りました。お気に入り件数も五百にまでなり非常にうれしいです。

今後とも頑張ろうと思つのでよろしくお願いします。

二十六話 初めての共同作業の相手は中年のおっさんでした

運ばれてきた飛行機らしきものへと駆け足で近づくと、近くにいたサイト君が俺に気付いた。運ばれてきた飛行機にはコルベール先生が目を輝かせて張り付いている。たまに変な発明品みたいなものを授業で発表することもあったし、多分あの人根が科学者なんだろうな。

それにしてもすごいな、機体に日の丸のような物が書いてあるし結構古い感じだから第二次大戦のときの日本の戦闘機なんだろうが詳しくはわからない。だいたい戦闘機の名前なんざゼロ戦しか知らん。

そんな考えを押し殺し何も知らない風を装ってサイト君に話しかける。

「何か珍しいもの拾ってきたな。これなにさ？」

まあ、知ってますけどね。

「ああ、アシルか。いつだったか言ったことあったろ？ 飛行機って言うって俺が元いた世界……じゃねえ、ロバ・ウル・トルイエだっけ？ まあ、俺が元いたところにあつた空を飛ぶ乗り物だよ。ちなみにこれはゼロ戦、っていつて戦いに使う用の飛行機だな」

こいつ本当にごまかすつもりあんのか？ 嘘のつき方が下手つてもんじゃないんだが。

まあそれは置いておいて……これがゼロ戦か。名前だけしか知らなかったがこうして直に見ると、なかなか圧巻だな。……それにしても知っていることをいちいち聞くのも面倒だし、少し不自然な会話の流れになるが大まかな事柄についてざっと質問しておこう。

「これが飛ぶのか！ すごい話だな。で、飛ぶのにはなんか精神力みたいなものでもいるの？ あとこの翼みたいなやつが固定されていて飛ばたけなみただけど、なんで飛べるんだ？ あとこれ誰でも飛ばせんのか？ 誰にでもできるんなら俺も飛ばしてみたいんだけど」

「んないっぺんに聞かないでくれよ。えー……と、さっきコルベール先生にも伝えただけど飛ばすのにはガソリン、という燃料がいるんだけどそれが空っぽなんでしばらく飛ばすのは無理だ。あと飛行機はなんだっけな、揚力？ とかなんかそんな力で浮くらしい。確かなんかいい感じの角度にした翼に前から風あてると、上向きに力が発生してそれで浮くんだったかな。俺もうる覚えなんであんま詳しくは聞かないでくれると助かる。操縦は練習さえすれば誰でも飛ばせると思うぞ。結構むずかしいと思うけど」

そこまでサイト君が話したとき、飛行機の各所を調べまわっていたコルベール先生がこちらを向いて声をかけてきた。どうも空っぽになっていたとはいえタンクには多少のガソリンが残っていた上にそれは『固定化』という物を保存するための魔法がかけられていたようで化学反応も起こしていなかったらしい。つまり、完成品であるそれさえあれば、『錬金』などの物質を変化させる魔法を使うことでガソリンを生成することが可能であるらしい。

そのままタンクの中にこびりついていたガソリンを持っていた壺に入ると、コルベール先生は俺とサイト君に付いてくるように言った。

「なんとというか、『水薬』としては心躍る部屋ですね。今後、何か難しい薬の調合をしたいときはお邪魔してもいいですか？」

「いくらでも構わないよ、ミスタ・セシル。まあ、しばらくはこの『がそりん』を生成するのに集中したいからお構いはできないがねいや、それにしてもわくわくしてきた。今まで自分が積み重ねてきた知識に技術、それらすべてが通じないかもしれないほどの大きく新しい理に触れるのは初めてだよ。こんなに進んだ技術で作られたであろう物に挑むのが、こんなにもわずかな不安と大きな期待を抱くものなのだよ！」

連れてこられたのはコルベール先生の研究室だった。

部屋のいたるところに置いてある薬品の壇に試験管、アルコールランプ。壁際には本がぎっしりとつまった本棚やモルモットとして使うのかトカゲなどの動物が入った檻がある。その部屋に置かれた椅子に座るこの部屋の主、新しいおもちゃをもらった子供が冷静沈着に見えるほどはしゃいでいるコルベール先生（四十二歳、独身）。まあ、今までの授業を見る限りその知識と技術、そしてそれを支える知的探究心と好奇心は凄まじいものがある。できれば少しでもその技術を学びたいと思っていた俺にとって今回の件は、渡りに船だ。

「ん……、ならコルベール先生、僕も手伝わせてもらえませんか？」

「え、手伝うって、……『がそりん』の生成をかね？ 君の力を貸してもらえればそれはありがたいが……いいのかい？ おそらく手探りに近い作業になるだろうから根気のいる作業になるが……」

「まあ、薬の開発などをしているのでそういったことは慣れっことですから大丈夫ですよ。それよりもこのガソリンが作れるようになれば様々な事に応用が利きそうですから、それが楽しみなので早く作

りたいですし。それにコルベール先生の技術や知識を盗ませていただくことは、今後の秘薬の作製に役立ちそうですから」

「そうか。それは立派な心がけだと私は思うよ。しかし、技術を盗むなんて言わないでくれ。一言言ってくれば、私が知っている程度のものでよければいくらでも教えるさ。じゃあ、ミスタ・セシル、『がそりん』の生成の協力……よろしく頼むよ」

俺は、そう言って差し出されたコルベール先生の手を笑顔で握り返した。

「じゃあさつそくだがミスタ・セシル、これとこの材料は持っているかね？ 他の物は余裕があるんだがこの二つの材料を切らしてしまっていてね。多少の代金ならば払うから持っていたら、分けてもらえないか？」

「ん……ああこの二つならありますよ。後この反応を起こす時にあと便利な触媒もいくつか残っていたと思うので、持ってきてます。それと代金は結構ですよ、場所や設備はもちろん材料のほとんども先生持ちなんですし申し訳なくて受け取れませんよ。まあ、あとこれはついですが、サイト君みたいに君付けで呼んでもらえませんか？ 『ミスタ』なんてつけられるとどうも背筋がかゆくて」

「そうか……いや、わかったよアシル君。じゃあ、君ももう少し砕けた態度で構わないよ。今の君と私はさしずめ共同研究者なのだからね」

「俺はいいとこ助手だと思いますけどね」

「……二人ともちよつといいですか？」

材料やこれからの工程を大雑把をまとめた羊皮紙を見て話し合っている、後ろからサイト君の呼ぶ声がした。振り返ってみるとなにやら思いつめたような顔でこちらを見ている。……腹でも壊したのか？

「コルベール先生にアシル……俺は東方から来たことになっていますが、実は……別の世界から来たんです」

「そらすごいね」

「……なんだって？」

いかん、結構衝撃的な告白だったはずなのに普通に流してしまった。サイト君の言葉に対する俺とコルベール先生の反応の温度差がすごい。しばらく黙ってよう、この話に俺が口をきいたらいらぬ墓穴を掘りそうだ。

「このゼロ戦も、いつだかの『破壊の杖』も、ここハルケギニアじゃない別の世界、俺が元いた世界の者なんです」

「そうか……なるほどね。いや、うん、そう考えると納得がいったよ」

サイト君の告白を聞いて作業の手を止めていたコルベール先生はそう呟くと、体ごとサイト君のほうへと振り向いた。

「すごい話だね、サイト君。もしも他にその異世界の技術についての話があればぜひ聞かせてほしい。いや、そんな細かいものでなくともいいんだ。魔法を使わず、純粋な技術と知識のみで人はどこまでの物が作れるのか……。他にどういったものが君の世界にあるのか、聞かせてはもらえないだろうか？」

「信じてくれるんですか……？」

自分で言い出したことなのにどことなく呆然とそう返すサイト君。まあ、当たり前か。俺は実際に経験しているから異世界なんて突拍子もないものを信じられるが、そうでなかったら間違いない病院を勧めている。

「まあ、驚いたけどね。しかし、君の言動や考え方、知識、今考えたと召喚された時の服装……。まあ今君が着ている服のことだが、見たことも聞いたこともないような物ばかりだからね。むしろ、納得がいったくらいだよ」

「ありがとうございます。ここまでしてくれる人たちに嘘をついているのも心苦しくて、変なことを話してすみません」

肩の力が抜けたような表情でそう言うサイト君。

「しかしそれを聞くとなおさらわくわくしてきたよ。この『ぜろせん』一つとっても私の知らない技術の結晶だ。ならば君のいた世界には遥かに多く、複雑な技術があることだろう。そして、それはここハルケギニアで再現することも可能なはずだ。ふむ、なんと素晴らしいことだろう！ 私の研究のどれだけ大きな一ページになることだろうか！ サイト君、しばらくは『がそりん』に精一杯なので無理だろうが落ち着いたらいろいろと聞かせて欲しい。代わりと言

つてはなんだが、何かあつたら遠慮なく私に言ってくれ。この『炎蛇』のホルベールがいつでも君の力になるよ」

そこからの日々はは絵面的には地味だが、非常に濃い時間だった。俺とホルベール先生は寝る間はもちろん、食事の時間さえも惜しみながらガソリンの開発に没頭した。俺は受けるべき授業を、ホルベール先生はするべき授業をさぼりながらも頑張り続けた。中年のおじさんと油や薬品の臭いがする一つの部屋でひたすら特殊な油を開発するために研究を続ける、なんて日々だったがこれが案外楽しかった。途中でしばらく食事に来ていないことに気付いたアラベルが食事を持ってきてくれたが、室内の臭いをかぐなりそのままウターンしようとしたなど様々なことがあった。そうして二日が過ぎ……

「ついにここまで来ましたね……」

「ああ、感慨深いものだ……。いや、しかしありがとうアシル君。随分と助かったよ。君がいなかたならも長い時間がかかっただろう」

「いや、結構関係ない話で盛り上がりすぎたりもしましたから、案外先生一人のほう及早かったような気がしますけど」

俺たちの目の前にはビーカーに入った液体が置かれている。後はこれに『錬金』の魔法をかければおそらくガソリンが完成する。

しかし、それにしてもここまで長かった……。ガソリンは石油から作られたものであることは知っていたのでそれを前提にしてガソリンの成分を調べ、その結果をホルベール先生に伝えたところ同じ化石燃料である石炭を材料にする、というアイデアを出してもら

った。そこから二人で様々な触媒などを使い、ここまでたどり着いたというわけだ。

「では、最後の仕上げは先生にお任せします。俺あんまり錬金得意じゃないんで」

「そうか、わかったよ。ではいくぞ、『錬金』！」

コルベール先生が呪文を唱えると同時にビーカーから煙が上がり、それが収まるころにはビーカーの中の液体が茶褐色へと変わっていた。鼻を近づけ軽く臭いを嗅いでみると、そこからはもはや懐かしくさえあるガソリンの臭い。つまり……

「成功だ！ アシル君、ついに完成だ！ このハルケギニアで初のガソリンの生成について成功したぞ！」

「やりましたね、コルベール先生！ 俺も……つと、ちょっとすいません、完成して気が抜けたら疲れが急に出てきました……」

実際、眠気と疲れがどつとできて完成の喜びうんぬんの前に今はただひたすら眠くてたまらない。

「そうか、じゃあこの部屋は好きに使っていいからゆつくり休んでくれ。私はこれをサイト君に見せてくるよ」

そう言っつてガソリンの入ったビーカーを持って研究室を出ていくコルベール先生。

あの人結構いい歳な上に、そんな鍛えている風にも見えないんだがなんであんなに元気なんだ……？ それとも俺が年に見合わず体力が無いだけなのかね？

それにしても眠いが、この部屋にはベッドがないんだよな。俺は
重い体とふらつく頭を抱えながら部屋へと戻っていった。

二十六話 初めての共同作業の相手は中年のおっさんでした（後書き）

とりあえず一話だいたい五千字前後を目標に投稿していこうと思います。

そして以前投稿したものを見直してみたところ、最初のほうは二千字程度の物がいくつかあったのでまとめてしまうのもありかな、と思っています。こういったことにあまり詳しくないので、どちらのほうが良いという意見があれば言ってくださいるとありがたいです。

二十七話 湖の向こう側へ（前書き）

気付けばお気に入り登録数ももう少して六百件に届きそうなのころまできました。ありがとうございます。

二十七話 湖の向こう側へ

「せ、先生……この作業いつまで続くんですか？」

眠い目をこすり、疲労でかすかに震える指先を必死に動かしながら俺はコルベール先生へと尋ねた。ろくに睡眠も食事もとらずにもう働くこと……何日だろう？ よくわからないが結構長い間頑張っていると思う。

ガソリンが完成した後、俺は自室で眠っていたのだがいきなり部屋にきたコルベール先生に起こされた。なんでもエンジンを動かすことはできたのだがさすがにあれだけの量では飛ばすことができないらしく、飛ばすために必要な量、最低でも樽で五本ほどは作ってほしいとサイト君に言われたらしい。それでゼロ戦が飛ぶところを一刻も早く見たい先生は、寝ている俺をたたき起こしてガソリンの生成を手伝うように言ってきた。……まあ、無理やりではなくて協力を頼まれただけなので嫌なら断ればよかっただけなのだが、三日も一緒に作業していたせいかな変な仲間意識がわいてしまい、うっかり了承してしまった。そのせいでこんな大変な目にあっているという訳だ。

「た、確かサイト君に言われたのは樽に五本ほど……、む……1、2、3……できている！ もう十分な量ができているぞ、アシル君！」

「ほ、本当ですか！？ コルベール先生！ これで、これでついにやっつ……」

「ああ、やっとだ！　これで……これで……やっと……」

「寝れる！……！」

「ぜろせんが飛ぶのを見ることが出来る！……！」

……え？

「さあ、行こうじゃないか！　アシル君！　サイト君に頼んでさっそく飛ばしてもらおう！　いや、はは、わくわくするなあ。何の魔法も使わずにあれほどの物が飛ぶことが見れるのだ。今までの苦労が飛んでしまわないかね、アシル君」

「ちよ、ちよ、ちよ、ちよと待っててくださいコルベール先生。俺も今気付きましたけど、外真つ暗ですよ。こんな暗い中飛ばすのはさすがに難しいでしょう。それにこんな遅くにあんなすごい音出すもの飛ばしたらさすがに学院長も良い顔しないと思いますよ」

このままだとゼロ戦飛ばす前に俺の意識が飛ぶつちゅうねん。

「む……そうだな……仕方がないか。それに私も随分と疲れてしまったし、今度明るいうちに飛ばしてもらおう。それにしてもアシル君、あんなにすごい音ってエンジンを動かしたときは君、いなかったじゃないか。なんで知ってるんだい？」

やべえ、また口が滑った。

「ああ、使用人がエンジンのかかる音を聞いていましたね。その子から聞いたんですよ、エンジンをかけたのはまだ明るいうちだったらしいです結構いろいろな人が聞いていたみたいですよ」

「なるほど、確かに何人が遠くから興味深げに見ていたしね。気になるようだったらもう少し近くで見ても構わないと言ってもらえるかい？ サイト君ならば、平民だからなどといった理由で断らないだろうからね、構わないだろう」

「わかりました。じゃあ、おやすみなさい。一足先にお暇します」

「ああ、おやすみ。後片付けは私がやっておこう。本当に助かったよ、ありがとう」

笑顔でそう言ったコルベール先生に一礼すると、俺は先生の研究室を出て行った。

「…………おつとつと…………、これはまずいな」

睡眠不足と極度の疲労のせいか、足がふらつく。自室に戻るためには階段を上る必要があるのだが、こんな状態じゃころんで大けがをしそうだ。かといってレビテーションなどの魔法で窓から入るのも、難しいだろう。とりあえず一休みでもしないと怪我じゃすまない事態になりそうだ。

中庭まで来た俺はそこにおいてあったベンチに座ると、夜風に当たりながら体を休めることにした。

「…………んあ…………。…………うおっ！ 寒っ！」

ゆさゆさと体を揺さぶられるのを感じ、目を開けた。どうやらいつのまにか眠ってしまっていたみたいだ。周囲は眠る前よりも少し明るくなっている。生まれて初めての野宿によって、予想以上に冷えてしまっていた体を両手で軽くこすりながら、いまだに俺の服を掴んでいた人物の方を見るとそこにいたのはタバサだった。後ろには使い魔である風竜のシルフィードもいる。

「起こしてもらって悪いな。それよりもこんな朝早くにこんなところにいるなんてどうかしたのか？」

そう聞くといつものように小さめの声で簡潔な答えが返ってきた。どうも散歩気分で明け方の空を飛んでいたシルフィードが外で眠りこけている俺を発見、それをタバサに伝えたということらしい。以前言っていたタバサの知り合いを診察…………といえるほど俺は治療などに関して詳しいわけではないが……………することを約束していたので俺を起こすついでにそれをしてほしいんだそうだ。どうもその見てほしい人はタバサの母親で、その人が療養しているところまでは距離があるらしく、そのせいでこんな早くに起こしたらしい。

「こんな早い時間に申し訳ないけれども力を貸してほしい」

真剣な面持ちでそう俺に言うタバサ。

アルビオンで迎えに来てもらった借りがあるし、その病氣の人を診てみると約束したのは事実だ。確かにこんな太陽が完全に出てきていないような時間に出かけるのは、さすがに少し非常識な気がするがレコン・キスタの件といい、アンリエッタ王女のお輿入れが近いことといい……………なにやら面倒なことが起きそうな予感がする。な

ら今の平穏なうちに行っておくのも一つの手だろう。

「いや、たまにはこんな時間から体動かすのも良いもんさ。それに約束しといていつまでもほっとくつてのは寢覚めが悪いからな、覚えてるうちにさっさと行ったほうがいいだろ。むしろ俺こそ今の今までほっぽつといてごめんな」

「そんなことはない」

そう言つてタバサはふるふると首を横に振つた。

そして病状について一応聞いておこうと尋ねたところ、

「……私はあまり口が回るほうではないので病状などの詳しい事情は母さまの世話をしている、ペルスランという執事に聞いてほしい。もちろんその後で何かわからないことがあつたのなら私に聞いてもらえば、可能な限り答える」

という返事が返ってきた。

「執事さんがいるってことは、おふくろさん実家で静養してるのか。……そういやあタバサの実家ってどこなんだ？ よく考えたら家名すら知らないしな。距離があるっていつてたけどそんな遠いのか？」

「家はラグドリアンのほうにある。ゆっくりと行つても二日もあれば着くから、この時間に風竜で出れば明日……遅くとも明後日には帰つてこれると思う」

「結構な長丁場だな。それよりラグドリアンにあるんならこの間ラグドリアン湖に行ったときにも言つてくれりゃあよかったのに。

……まあ、過ぎたことを言つたつてしょうがないか」

俺はそう言って立ち上がると、変な体勢で寝たせいで固まってしまった体をほぐすように伸びをする。パキ、ポキという関節が立てる音と鈍い痛みを感じながらもタバサへと返事をする。

「ちょっと待つてる。準備してくっから」

「恐ろしいほどはえーな。やっぱ俺のホロスケとシルフィード交換してくれよ」

「ホロスケ？」

「俺の使い魔のフクロウだよ。いつまでも名無しってのは可哀そうだからな、適当に名づけてみた。交換してくれたら今なら洗剤もつけるよ、お得だろ？」

「……そんな特売品みたいに言われても困る」

凄まじいスピードで空を飛ぶシルフィードの上で会話をする俺とタバサ。そんなくたらない会話をしている間にも眼下に広がる風景が少しずつ過ぎ去っていく。よくわからないが車以上の速度は出ているのではないだろうか。使い魔にランクを付けるのならばドラゴンがトップクラスだろうが、このスピードを見れば納得ができる。使い魔はメイジにふさわしいものが召喚されるというが、こんな立派な風竜を召喚できたということはタバサはやはり超一流のメイジだということだろう。実家も風光明媚で有名なラグドリアン湖の近

くようだし、どれだけ恵まれているのやら。

「お願いを重ねるようで悪いけれど、一つ約束してもらいたいことがある」

さすがに疲れが残っていたので、軽く休もうかとしたところそう声をかけられた。

そのまま目で先を続けるように促す。

「私の家でのことや母さまについてのことは外では口にしないでほしい。あまり人に知られたくないことがいくつかあるから」

なんだそんなことが。

「言われないでも、人様の家庭事情を言いふらすほど性根は腐ってねーよ。それよりやっぱまだ眠いんで寝るわ。ついたら起こしてくれ」

そう言って自分の腕を枕にごろりと横になる。そのまま意識を手放そうとしてあることに気づき、タバサに一言言っておく。

「寝相良いほうじゃないんで、もしシルフィードから転げ落ちたら助けてくれよ?」

ゴンー!!

「のわっ！ ……つてえ、何、何だよ。てか誰だよ」

いい気分で寝ていたところ頭をたたかれて目が覚めた。とっても軽く叩かれた程度なので対して痛くはなかったが。

「ついた。揺さぶつても起きなかったので、悪いとは思ったけれども叩かせてもらった」

どうやら目的地についたらしい。事実、シルフィードも飛ぶのをやめ地面へ着陸している。そして俺の目の前には……

「……お前って結構なお偉いさんだったりするの？」

今まで見てきた貴族の邸宅の中では最も大きいであろう屋敷がでん！ と構えていた。

「初めまして。セシル様」

俺が屋敷を見上げている間に、近くへ一人の老人が来ていた。物静かで上品な雰囲気身をまとった老紳士といった人だ。この人がタバサの言っていた執事さんだろうか？

「このオルレアン家の執事をしておりますペルスランでございます。要件はシャルロットお嬢様からうかがっております。奥様のご診断はすぐになさいますか？」

……オルレアン家？ シャルロットお嬢様？ 誰だよそれ、タバサのことか？

どうやら俺が眠っている間にタバサが事情を伝えているようで、

俺たちが来た理由も知っているようだ。しかし、眠っていた俺には何が何だかさっぱりだ。しかし診察に来たのを知っているからだろうか、諦めと期待が混ざっているようなペルスランさんの顔を見るとそれを今聞くのも気が引ける。眠気が完全には抜けていないのもあり、俺はあいまいに返事をするそのまま彼に案内され、気付けば何やら仰々しい部屋の前にいた。

「ここが奥様の部屋でございます。では、私は扉の前にいますので……」

やばい、俺が想像していたのよりも遥かに凄まじいスピードで事態が進んでいる。これは止めたほうがいいのか、俺何の状況把握もできていないんだが……。

そう考え俺が勇気を出して声を発しようとした瞬間

……コンコン。

ノックの音が静かな廊下に響き渡った。横を見ればタバサがどことなく緊張したような様子で軽く握った手を扉に当てている。これで後戻りはできなくなった、ような気がする。俺の様子を無視した行動に文句の一つでも言いたくなかったが、

「では診察をお願いします」

何の悪意も感じない純粹に早く母親に治ってほしいから、早く診察をお願いしたいという気持ち伝わってくるような真剣なタバサの顔を見た俺には、

「……ああ。全力を尽くすよ」

そう返すことしかできなかつた。

二十七話 湖の向こう側へ（後書き）

なんだかんだで八万字以上も書いてきたというのを知り、自分にこんな根気があったのかと少し驚いています。

これからもがんばろうと思いますので応援、ご感想をよろしくお願ひします。

二十八話 オルレアン夫人の診察（前書き）

お気に入り登録が600件を超えました。

ちよくちよくこんなことを言っている気もしますが、うれしいことは何度あってもうれしいのでしつこいな、なんて思わずに笑って流してもらえるとありがたいです。

これからもご意見、ご感想、応援お願いします。

二十八話 オルレアン夫人の診察

部屋の中にいたのはタバサと同じ色の髪をした妙齡の女性だった。ほほはこけ、目はくぼみ、ずいぶんとやつれた様子で手に持った人形へとひたすら話しかけている。ベッドの上にいる彼女には俺たちが部屋に入っていたのはわかつているはずなのに、こちらに視線を向けようとしてもしない。人の母親に対してこんなことは言いたくないが、俺の中の精神が病んでいる人のイメージそのままだ。

「母さま。治療の心得がある友人を連れてきました。彼の診察を受けていただけませんか？」

タバサが彼女に対してそう声をかけた瞬間、やつれているとはいえどことなく穏やかさをもって人形に話していた様子が激変した。

「王家からの回し者め！ 私とシャルロットを殺しに来たのか！」

目をららんと憎しみと興奮にみなぎらせ、こちらを口汚くののしってくるタバサの母親。かと思えば一転して慈愛に満ちた目で自分の抱いている人形にほお擦りを始める。

「おお……シャルロット。私の大事な娘よ。この子が王家に反逆するなど、恐ろしいことを誰が言い出したのか……、大丈夫よシャルロット。何も怖がることはない、何があろうと私があなたを守ってみせる……」

そう言つと食事に使ったのだらう、ベッドの脇にあるテーブルからスプーンを手に持った。

「出て行きなさい！ 薄汚い人殺しが！ シャルロットには指一本触れさせるものですか！」

金切り声でそう叫ぶと手に持ったスプーンをタバサに投げつけた。
「危ないな」

俺は飛んできたスプーンを叩き落とすとタバサへと視線を向ける。これを避けるくらいタバサならば簡単なはずなのに、微動だにしないタバサ。いろいろと気になることはあるが彼女とまともに話すことは無理だろう。ならば……

「タバサ。実の母親に対しやるのは気が引けるだろうが、彼女に『スリー』……っつ！」

腕に痛みを感じ、そこを見してみると赤くなっていた。床にフォークが落ちているし、タバサの方を見ているときにフォークをぶつけられたのだろう。まあ、怪我というほどでもないし怒るほどのことでもない。

「タバサ、彼女に『スリーピング・クラウド』をかけてくれ。暴れられちゃどうにもならん」

「……………わかった」

いくらかの沈黙の後、こくりとうなずくと杖を出し、スリーピング・クラウドを発動させた。

杖の先端から青白い煙が発生するとタバサの母親の頭を包み込んだ。そして、次の瞬間には彼女は目を閉じ、ふらりと枕に頭をのせるように倒れこむと眠りについた。

「これでよし、と。じゃあ、とりあえず診てみるわ。すぐ終わるから少し待っていてくれ」

意味はないがなんとなく腕まくりをすると俺はそう言った。

俺ができる精一杯の診察をした後、俺たちはペルスランさんのいれてくれた紅茶をいただいていた。

「おつかれさまです、アシル様」

「いえ、それほどでも。それより、ペルスランさん。いくつか聞きたいことがあるのですが構いませんか？」

「はい。私でわかることでしたら何なりと」

俺は飲んでいた紅茶のカップをテーブルに戻すと、姿勢を直す。ここに来た時から気になっていたこと。あの女性について気になること。タバサについて、ああなった原因について、診察を試してみてわかったこと……聞きたいこと、言いたいことは山ほどある。……が、そのすべてを聞くのは野暮というものだろう。必要なことだけ聞くことにしよう。

「まずあの女性についてなんですが、昔からああいった状態だったのですか？」

俺のその質問にペルスランさんは少し眉をひそめた。

「まさか！ 奥様は心を狂わされる薬によってああなってしまうわれたのです。以前の奥様はそれは慈悲深く聡明な方でした」

「失礼、そういった意味で言っただけではありません。誤解させてしまい申し訳ない。私が言いたかったのは、オルレアン夫人の症状は一貫したものであるか、どうかなのです」

「と、言いますと？」

「私が見た限りでは夫人の症状は大まかに分けて三つほどだと思います。一つ、人形をタバサ……いや、シャルロットだと思っただけ。二つ、異常なまでの疑心暗鬼と被害妄想。三つ、極度の精神的緊張状態を続けさせられている。この三つの症状は薬を飲んで来ずつとなのか。それとも日によつてはきちんとしてシャルロットを自分の娘だと認識していたり、ペルスランさんが食事を運んだ際には笑顔でお礼を言ったりしたことがあったかを聞きたいのです。どうですか、一度でもそう言ったことはありませんか？」

ペルスランさんは悲しげな表情で首を横に振った。

「……いえ。奥様は毒を盛られたあの日から、常にあの状態です」

「なるほど……」

俺なんかに期待してくれたタバサには悪いが、これは俺の手に負えるものじゃないと思う。コルベール先生の研究室を借りて、先ほど少し取らせてもらった血液を調べてみればとっかかりくらいは見つかるかもしれないが、先ほどパツと診察した限りではかなり難しい。ほんの一時的、それこそ五分かそこら元に戻すことならばなんとかなるかもしれないが、完治は無理だろう。なぜなら彼女の中で

いまだに毒薬は効果を發揮し続けているようだからだ。これでは一時的に元の状態に戻せてもすぐに元に戻ってしまう。」

「……友人のお母上です。できる限り頑張ってはみますが、期待はしないでください。なんらかの対応策は打てるかもしれませんが、完治だけは間違いなく無理だと思います」

シャルロット……どうも言い慣れないな、タバサは俺を信頼して母親の診察をお願いしたわけだ。なら俺もその信頼には真摯に答えるべきだろう。まあ、誠実さの表現が自分には多分無理だと告白するというのは少々情けないが。しかし、俺にも何かできることくらいはあるはずだ。

俺は出された紅茶を飲み干すと立ち上がった。

「ではそろそろ失礼したいと思います。お元気で、ペルスランさん」

「……………」

「……………」

帰りのシルフィードの上には行きと違い、沈黙が下りていた。これからどうするか考えなくてはいけないことも多々あるうえ、タバサの背景がうつすらとわかってきた今となってはさすがに軽口も叩きにくい。

ペルスランさんが言っていたオルレアン家とシャルロットお嬢様。シャルロットという名前には覚えがないが、オルレアン家のほうは俺でも聞いたことがある。現ガリア王であるジョゼフとの政争の末

に没落したガリアの王族だったはずだ。よそ様のお家騒動なんかは何の興味も持っていないので詳しいことは知らないが、俺の記憶が確かならタバサはガリアのお姫様ということになる。そういえばガリア王家の人間はきれいな青い髪らしいが、なるほど確かにタバサの髪も青い。

そう思いながら俺の前のほうに座っているタバサの後頭部を見ていると、前を向いたままタバサのほうから話しかけてきた。

「……聞かないの？」

「……聞かないさ」

ここで何を？ と返すほど空気が読めないわけではない。確かに何があつたのか聞きたくは思う。しかし、他国の王族の後ろ暗い話なんか聞いたら枕を高くして眠れなくなるかもしれない。すでにオルレアン公夫人を診察した時点で結構やばい気もするから、正直これ以上の危険要素はノーサンキューだ。

「知的好奇心につられて身を滅ぼしたら、どうしようもないからな。今まで通りでいいじゃないか、俺がアシルでお前がタバサでさ。まさかこれからはミス・オルレアンと呼べ、なんて言わないでくれよ？」

「言わない。人前でシャルロットと呼ばないように気を付けてさえくれればいい」

タバサが俺のほうへと振り向き、言葉を続ける。

「あなたは自分には完治は無理だと言っていた。それは本当？」

「ああ、間違いない。せめて薬そのものがあればまだわからないが、飲んだ人だけ見て解毒薬を作るのは俺には不可能だ。力不足で悪いがな」

「そう……」

少し落ち込んだように視線を落とすタバサ。その姿を見てなんだから小さな子供をいじめているような気持ちになってきた俺は、励ますように言った。

「いや、でも、あれだ、ほら。これもかなり難しいとは思うがほんとは一時だけでも戻す薬なら、もしかしたら作れるかもしれないから、な？ それに毒薬を作った奴をとつかまえれば解毒薬の作り方も知っているかもしれないし。だから、ほれ元気出せって。今度メシおごるから」

「……ありがとう。借り、いち」

顔を上げ俺の目を見るタバサ。

「もし必要な材料などがあつたら私に言ってほしい。母さまを治すために必要なことならば協力は惜しまない。それ以外にも何か困ったことがあつたら私もできる限り手伝う」

「それは千人力ってやつだな。頼もしい限りだ」

なんとなく笑いながら俺はタバサへそう言った。それを俺の勘違いかもしれないがどこことなく柔らかい表情で聞くと、タバサはくりと前を向いた。

「では行こうと思う」

「どこにだよ？」

前を向いて何やらシルフィードへと指示を始めたタバサ。

「食事に。おごってくれるって言ったから」

「え？」

なんとなく勢いでおごるとか言ったが、よく考えればコイツ、牛みたいによく食べるんだった。

「あのタバサさん……僕あんまり財布に余裕がないので、できれば安めのところにしてくれるとうれしいんですが……」

おごる側の俺が卑屈なもの何かおかしいような気もするが、不思議なことにはただちや不快感は感じない。たぶん俺の中でタバサは、友達というよりはどこか妹のように感じているのだと思う。

「大丈夫」

そう言つと俺のほうを向きぐつと親指を立てるタバサ。背景が綺麗な空であることといい、風で流れる髪といい、半端ないかっこよさが漂っている。

「食べ放題の店にする」

「俺お前のそういう空気の読めるところ好きだよ」

馬鹿な会話を続ける主人とその友人を乗せながら、シルフィードは高度を下げていった。

二十九話 脇役は大舞台には立てない（前書き）

前もこんなこと言った気がしますがまた随分と間が空いてしまったような気がします。なんだか書き始めると一気にいくんですが、もともと不精な性分なのでどうも書き始めるのに時間がかかってしまいます。

楽しみにしてくださいっている人には申し訳ないです。

二十九話 脇役は大舞台には立てない

「あれ、ゼロ戦が無いな」

学園に帰ってきた俺達は中庭に着地したが、行く前には置いてあったはずのゼロ戦が何故か無くなっていた。

「……………そう言えばアンリエッタ王女のお輿入れが今日だか明日だかでそろそろだったはずだ。戦闘機でパレードに華を添えるとか、また王女に無茶ぶりされたのでなければいいけれども。いや、よく考えたら王女さんは、戦闘機が存在そのものを知らない人だったな。じゃあ何だ？」

俺はタバサと手を振って別れると、コルベール先生と会うために研究室へと向かった。研究室を使わせてもらうためというのもあるが、彼ならばゼロ戦が無くなっている理由も知っているだろう。

自室に戻ってきた俺は、後ろ手でドアを閉めると椅子に腰かけた。あの後コルベール先生にゼロ戦の行方を聞いたが、何やら焦った様子のサイト君が持って行ったということがわかっただけで、結局何のために持って行ったのかはわからずじまいだった。ま、伝説の使い魔様らしく適当に大冒険したら帰ってくるだろう。怪我してなきやいいけど。

「とりあえずはサイト君よりこっちかね」

タバサの母親の血液が入った小瓶を目の前で軽く振ってみる。

当たり前だがこうして見る限りでは何もおかしいところはない。しかし、調べれば原因か解決策のところがかりくらしいは見つかるかもしれない。といってもきちんとして調べるにはコルベール先生の研究室の設備を借りる必要があるだろうし、何よりも出先から帰ってきて今からやるというのも疲れてるから嫌だしな。調べるのは明日からにしよう。

「ああ、こつち忘れてた」

血液のほうばかり気にしてお土産を買ってきていたのをきれいに忘れていた。以前アルビオンに任務で行って帰ってきた時、アラベルに遠出するときは一言言ってくださいとか言われたのに、私も勝手に出かけちゃったからな。お詫びとして途中で扱った町で、若い女の子に人気のある本を三冊、適当に店員さんを選んでもらって買ってきたのだ。中身が何なのかは知らないがどうせ俺は若い女の子の間での流行なんて知らないし、別に構わないだろう。つーかなんで俺が彼女でもなんでもないあいつのためにここまで気を使わなきゃならんのか……と思っただけでもメシやら掃除やらで結構世話になってるからな、たまには労をねぎらう意味でお土産兼プレゼントをするのもいいだろう。

とりあえず俺は本の入った袋を掴むと、アラベルを探すために部屋を出て行った。

トン、トンというノックの音で目が覚めた。一つ伸びをして、誰かを尋ねると『アラベルです』という返事が返ってきたので寝ぼけ眼をこすりながら鍵を開けた。

「よう、アラベル。何か用か？」

「まず一発殴らせてください」

「お前は肉体言語以外のコミュニケーションを知らんのか」

扉を開けたところにいたのはアラベルだったが、どうも怒っているようだ。いつも以上に眉間にしわがよっている。それに手に何が入っているのか袋を持っている。昨日お土産を渡そうとアラベルを探したが、結局見つからなかったので適当にそこらにいたメイドさんに渡してくれるよう頼んでおいたんだがそれのお礼だろうか。それにしてはなんで怒ってるんだ？

「まあ、いいや用があんならとりあえず入って紅茶でも飲めよ。ああ、面倒なんで紅茶はお前が入れてくれ。俺の分も頼むわ」

「で、どうしたのよ」

アラベルに紅茶を入れてもらい、お互いに座って一息ついてから俺はそう聞いた。

アラベルはため息を一つ着くと手に持っていた袋を机の上に置いた。

「どうもどうもこれですよ」

「これって……普通に俺がお土産として買ってきた本だろ？ つま

んなかったとか気に入らなかったとかか？ そんな場合のために店員に若い女性に人気の本を、って頼んでお勧めのを三冊も買ってきてやったんだけど」

「……お気遣いは素直にうれしいですよ、わざわざありがとうございます。今度お礼にクッキーでも作りますよ。……それはそれとして、やはりそういった事情でしたか……。アシル様、いくら平民相手のお土産とはいえ今後は何を買ったのかの確認くらいはしてください。昨日、アシル様からのお土産だと同僚の子からそれを渡されて、私がどれだけ戸惑ったか……」

どういうことだ？ いつだかの手紙見たく、また俺が何かやらかしてしまったらしい。まあ確かに中身も知らん物を送ったのはアレかも知れないが、店員のお勧めの本のはずだ。そんな変なものであることなんてあるのか？

「……中身、見てもいいか？」

「……どうぞ」

とりあえず袋の中から一冊取り出して題名をしてみる。そこに書いてあったのは

『メイドの午後 愛のムチ編』

「……………えっ!？」

あきらかに18禁の臭いが漂うタイトルに驚き、残りの2冊も取り出して見てみると、

『メイドの午後 二人きりの昼下がりに編』

『メイドの午後 最後の夜編』

「シリーズ物かよ!」

好みに合わなかった時のために三冊も買ってきたのにこれじゃあ何の意味もないじゃねーか!

「……………いえ、一応若い娘の間で流行っている本ではあるんですよ? 確かシエスタも持っていましたし、他の子から読ましてくれと頼まれましたし。たぶん店員の方も悪気があったわけではないと思います」

だとしてもこれはないだろう。あんまいい気分のする想像じゃないが俺がメイドやってたとして、知り合いの貴族から『メイドの午後 愛のムチ編』なんて本買った日には冗談抜きで貞操でも狙われてんのかと勘繰るぞ。

「一応言っておくが他意はないぞ。この本も俺じゃなくて本屋の店員が選んだもんだし」

俺のその言い訳じみた(まあ、事実なわけだが)言葉を聞くと、

アラベルは軽く呆れたような目をして、ため息を一つついた。

「わかってますよ、アシル様にそこまでの甲斐性があるとは思っていません」

「へえへえ、そうですね。そら悪うございましたね」

会っていきなりけんか腰だったので、もしかしたら結構怒っているのかと思っていたが、そんなこともないみたいだ。安心して肩の力を抜き、椅子の背もたれに体重をかける。

これからもこいつと仲良くしていきたい俺としては、こんなくないことで気まずくなりたくはなかったので案外ほっとしている。

「で？ いつもよりも散らかっている気がしますが、まだあの努力もなしに強くなる、とかいう薬作ってるのですか？」

アラベルからの質問に俺は顔の前で手を軽く横に振る。

「あれはもう完成したよ。今やってんのは人助けだよ、人助け。博愛精神あふれる俺としては困っている人を見ると、助けずにはいられなくてな」

「はいはい、それはすごいですね。で？ アシル様が入助けとやらをしている間、私はまたここに食事を運ばないんですか？ あれ、結構面倒なんですけど」

「いや、今回はコルベール先生の研究室を借りてやるつもりだからそつちに持ってきてくれ。ま、悪いとは思いますがそれが仕事なんだし我慢してくれや。お礼に今度はきちんと俺が選んだ物をなんか送るよ。なんかリクエストあるか？」

「え……あ、どうも、それはありがとうございます。プレゼントですか、そうですね……」

そう言うとアラベルは少し考えた後、どことなく目線をそらしながら微妙に小さな声で要望を伝えてきた。

「……じゃ、じゃあアクセサリーなんてどうですかね。やはり女性へ送るものといえば、お約束ですし」

「まあ、アクセサリーだろうとなんだろうと高いものじゃなけりや別にいいけどさ。じゃあ、今度どっか行く用事が出来たら買ってくるわ。そうだな……首輪でいいか？」

「構いませんがその場合、食事にちよつと不思議な食材がプラスされてしまったりすることが起きるかもしれません」

「おっかないな。ま、冗談は置いて何か無難なものを用意してくよ。それより、明日からメシ頼むな、俺は多分コルベール先生の研究室に詰めっぱなしになると思うから」

「はあ……全く仕方がないですね。わかりましたよ、まあ、頑張ってください」

その後も近況報告やら世間話やらをしてしばらくすごしたあと、仕事が残っているということでアラベルは戻っていった。シエスタがサイト君との既成事実を狙っているらしい、というわりかしどうでもいい情報を手に入れたので今度ルイズに会ったら教えてやろう。やっぱ、ルイズとサイト君は喧嘩しているくらいがちょうどいいしな、見ている分には。

そんな意地の悪いことを考えながら、俺はカップに残った冷めた紅茶を飲み干した。

追伸になるがそれから何日かしてサイト君とルイズが帰ってきた。後から知ったことだがレコン・キスタの奴らがアンリエッタ王女のお輿入れに合わせて、タルブ村という場所に侵攻をしてくていたらしい。それを二人で力を合わせてなんとかしてきたみたいなことを言っていたが、正直侵攻を二人でなんとかしたとかスケールが大きすぎて俺には理解できないし、あまりしたくなかったので詳しくは聞かなかった。だってどうせあれだろ、ルイズが虚無のメイジとしての新たな力が目覚めたか、サイト君のガンダールヴのルーンに秘められし力が覚醒したかのどっちかだろ？ ただのラインメイジである俺には手に負えないからな。聞いたってしょうがない。

虚無のメイジに伝説の使い魔、長く続いた王家がレコン・キスタに倒されて、防いだとはいえそいつらはトリステインにまで攻め込んできた。俺にだってわかる。これから先、ここハルケギニアは間違いなく何か大きなうねりにのみこまれていくだろう。けれどもそんなこと俺には関係ないことを願うよ。戦争だ、伝説だつてのはルイズやサイト君がどうにかしてくれ。俺は分相応に研究室にこもってちまちま薬でも作ってるさ。

歴史という名の大舞台に主役として立てないのは、多少悔しくもあるけれども……ま、これはこれで楽しいもんだよ、ホントにさ。

二十九話 脇役は大舞台には立てない（後書き）

四コマとアンソロから入った口ですが今更ながら恋姫に興味が出てきました。もしかしたら恋姫でも何か書き始めるかもしれない。

まあ、本編のゲームソフトを買ってプレイした後でになるので、もし書くにしてもずっと後のことになると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1159r/>

それなりに楽しい脇役としての人生

2011年12月14日23時50分発行